

炭鉱現場用語解説集

平成 14 年 3 月

財団法人 石炭エネルギーセンター
社団法人 資源・素材学会
北海道炭鉱技術会
九州炭礦技術連盟

現場用語解説集の編集にあたって

これまでに炭鉱用語集として編集されたものは幾つかあるが、ここでは、現場用語集として解説を含めて編集した。

笹尾了祐氏の「炭鉱用語解説と図解」が嘉飯山郷土研究会会誌に掲載¹⁾された。これは九州地域の炭鉱で使われていた現場の用語を中心に用語解説集として編集されている。この現場用語は過去から現在に至るまでの炭鉱の作業現場で使われていた用語の編集とその解説である。この用語集は、現代から見て用語の解説が不十分かもしれないし、また、学術的な正確さに欠けるかもしれない。しかし時代の流れの中で、特に技術的にも未だしといった時代の炭鉱で、その時々坑内で通用されていた現場用語である。従って、用語そのものが一般には使われていないが坑内で通用している言葉もあり、現在から消えたものもある。また、用語といっても現場の慣用語として使用されている。例えば、その一例を挙げれば、硬（ボタ）、棹取（サオトリ）、深（フケ）、肩（カタ）等はそのよい例である。炭鉱では、特に古い時代には、坑内で使用する器具は勿論坑木の立付け方法やその部分の名称も違っている。また、それが現代の用語（JIS等）から見ると違っているかもしれない。

一般に使用されている日本語では、以前は各地方ではそれぞれの地方の言葉（方言）が多用されていたが、TVの普及、情報の多様化により、標準語が主力となり、方言は消えつつある。それぞれの職業でも、それぞれの職人言葉が使用されてきた。炭鉱用語もその1つと言える。そして炭鉱用語は採掘技術の標準化や保安技術の標準化等とともに標準化されてきた。炭鉱用語でも、北海道、常磐、宇部及び九州の各地域によって全く異なる事もある。それらの炭鉱現場用語の集大成は炭鉱の歴史であるとも言える。炭鉱における技術の変遷を記録するに際しては、現場用語解説集の編集も必要ではなかろうか。

このような趣旨に基づき、古今の炭鉱現場の用語を尊重し、その解説を行う事にした。笹尾了祐氏の「炭鉱用語解説と図解」を主とし、これを補足する形で北海道、常磐、宇部の各地域特有の用語を収録した。

なお、笹尾氏の「炭鉱用語解説と図解」については、単語、用語の解説は学術的に多少の甘さがあったとしても、また現場では実際に勘違いしていて昔からそう使われていたのであれば、現在用語として加筆訂正しないで、寧ろ原語を尊重し、原語は誤字、誤植のみを訂正し、漢字そのものも当用漢字に訂正することなく、過去の古い漢字をそのまま採用し、そしてスペースの関係で、加筆訂正は最小限度にとどめた。なお、現在と余りかけ離れた用語にあっては「炭鉱用語解説と図解補足」で解説した。

¹⁾ 嘉飯山郷土研究会会誌第14号石炭産業特集号（平成12（2000）年11月）

炭 鉱 現 場 用 語 解 説 集

目 次

炭鉱用語解説と図解	1
炭鉱用語解説と図解補足	45
炭鉱用語解説集 北海道地区	51
炭鉱用語解説集 常磐地区	69
炭鉱用語解説集 宇部地区	79

炭鉱用語解説と図解

炭鉱用語解説と図解

笹尾了祐

かつては石炭鉱山の最盛期は全国で 949 鉱、九州で 540 鉱、面積の狭い筑豊にも 265 鉱の炭坑があり、出炭率も 20% を占めていた。昭和 51 年 8 月 5 日貝島大之浦炭坑が閉山になり、元禄時代から三百有余年続いた石炭採掘は筑豊から総て消滅し永い歴史の幕を閉じる。残る 2 鉱は長崎県松島炭坑、北海道の太平洋炭坑は電力業界の国内炭引取りの協力を得て細々と残っている。石炭が産業を発展させ、社会の生活向上に努め船舶、鉄道は勿論、発電、製鉄などの燃料、そして医薬品、農業、染料、塗料、火薬、化学工業、繊維、食料品と多目的に利用された石炭の重要性は周知のとおりである。石炭産業が発達、機械化されるにつれて、石炭産業独特の言葉が編み出されて、炭坑以外ではまったく適用されない用語（言葉）が数多くあり、元炭掘る仲間と一献かわす時に、昔懐かしく語る程度で殆どが死語になっている。小学校に社会科学習で炭坑の話で行った時に先生から私たちは炭坑の話は聞いたが『具体的に坑内作業内容または炭坑用語は理解が難しい』。炭坑用語は石炭鉱山にまつはる本、市町村誌に主だった用語解説が書かれているが炭坑を知らない人には難解に苦しむので用語の意味を具体的に細く解釈できないかと相談をされたことがある。坑内現場で労働した人達は日常の用語であるが、同じ炭坑で働いた鉱外の人達もチンプンカンプンで殆ど一握の言葉しか理解していないのが現状であった。炭坑用語は何れ死語になるのは必至であるが、日本国内の炭坑は永久に産業発展に大きく貢献した事実は過去の歴史で継承されるでしょう、その課程のなかで炭坑独特の言葉としては是非継承を願います。尚明治、大正、昭和初期の言葉は差別用語などが多分に含まれているので、そのような言葉、解釈は記述を省略する。

文面の中に夫、盲とあるが、他に適当な解釈が見当たらず、炭坑で使用した言葉をそのまま文面にした。決して差別用語でないことを、読者、その他関係者の方に理解をお願いします。

用語 解 釈

アイカタ 相方、(向う方)

二交替制、三交替制で作業をする場合に相手の交替番の人をいう。作業は一週間で輪番制交替である。

アイズ 合図

鉱車（石炭、硬など積載するトロック）の巻上機を運転する者と棹取（操作する運搬員）との間で鉱車を地底に下げたり、坑外に上げたり、停止する信号。

アカサビ 赤錆

石炭の表面に水酸化鉄が付着し、赤色を帯びたもので、石炭表面の水酸化鉄をいうこともある。

アガリサケ 上がり酒

坑内作業を終わり入浴をすませて自宅で飲酒。作業衣のまま酒屋で飲酒をする。

アガル 昇坑

坑内より坑外に昇坑すること。

アゲアナクリ 揚穴割り

天井に鑿先を当て下部よりハンマーで叩いて穴を開けてゆく。熟練が必要、新入りの方は自分の手を叩いて作業がすすまない。

アゴシタ 顎下

木枠の切込（組）を行う部分の名称。

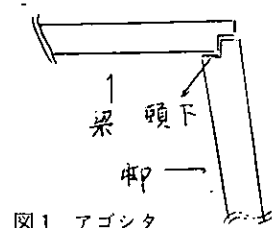


図1 アゴシタ

アサバコ 朝函

その方で石炭、硬などを第一回目に積み込んで出す炭車のこと。

アセオカク 汗をかく

木枠や天井、壁に湿気を帯びて水滴が溜まる。特に古洞（採掘跡）などに水滴が溜まる、湿度が急上昇すると自然発火のおそれがあり要注意。

アタリヲツケル 当たりを付ける（固定する）

枠入、空木積、硬巻など施行した場合に天

井、壁に密着させて固定すること。

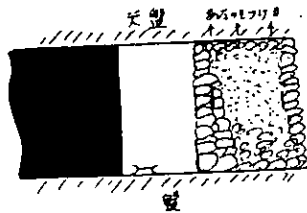


図1-2 アタリヨツケル

アーチワク アーチ枠 (半円枠)

アーチ型の坑道の鉄製枠。旧国鉄などの不用レールを払い下げたものを切断して曲げたものを、2本合せて天井中央部で繋ぐ。

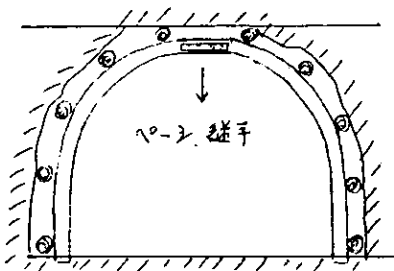


図2 アーチワク

アトガス 跡ガス

ガス炭塵爆発や坑内火災の跡に発生する一酸化炭素、炭酸ガス等の有毒ガスのことで、爆発の風圧や火焰衝撃で死傷者が出るほか、この跡ガスでも死傷者が出る。

アトケン 跡間

坑道掘進、仕操作業の場合、延間 (M) につき一間 (M) に幾らの賃金と前以て会社と労働組合で請負賃金を決定し作業する方法、一定の期間内に坑道掘進を進行させたかを調査する跡間とりがあり、これによって賃金が支払われる。

アトバラシ 跡壊

石炭採掘跡の天盤は自然に落盤するがこの落盤がない時は、古洞 (採掘跡) の天盤に索孔し爆薬で人工的に崩落させ、石炭採掘上切羽面の天盤過重荷を軽くするため行う。

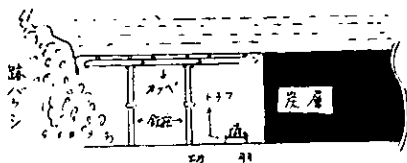


図3 アトバラシ

アトムキ 後向 (後山)

先山 (熟練者) に対していう言葉で、先山より比較的経験の浅い作業員。坑内作業に始めて就労した者は新山という。

アナアケ 穴空

爆薬に雷管を装填する時に爆薬に木製器具で穴を空ける。この作業は、坑内保安係員、発破係員の国家試験合格者のみしかできない。

アナクリ (クル)

孔を削る
爆薬を装填する
孔を鑿でほる。

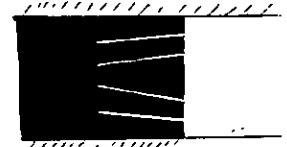


図4 アナクリ

アナジリ 孔尻

発破孔の一番奥の部分。

アブラバン 油盤

盤肌がなめらかで光沢をもっているもので、天井面にもこのような現象があり油天井という。

アラカン 荒函 (未洗炭)

坑内から搬出され選炭をしていない石炭のことで、採炭課 (採鉱課) で保安係員が書く書類の出炭量は荒函数で記入する。

アラトコ 新床 (地山)

未だ全然採掘に手をつけていない場所。

アンカーポスト

カッター、ホーベル等の駆動部 (エンジン付) が肩 (上) 深 (下) に移動しないように、木柱又は鉄柱を足元を下盤奥に立て天盤に穴を開けて斜めに差込み駆動部に付けたチェーン (ロープ) をアンカーポスト下部に取付けて移動しないように固定する。

アンゼンシュウカン 安全週間 (現: 保安週間)

毎年7月1日から1週間、全国の鉱山、工場に対し、国主催で行う安全運動。坑内では天井、側壁の浮石点検、整理整頓、重量物運搬時の相互の連絡確認等がある。

アンゼントウ 安全灯

二重の金網でおおい、外部の可燃性ガスに引火しないようにしてある坑内照明具。灯内の油はベンジン。

アンドンシャ 行燈車 (道中車)

車道の真中に地面、枕木より高く車道の上面程度に取付け、地面や枕木をロープでこすらないようにして、ロープが乗ると軽

く動き廻転する。木製、鉄製、陶磁器類がある。

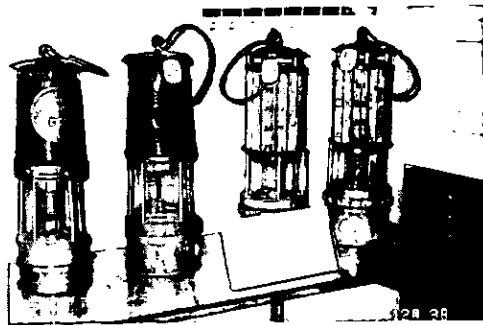


写真 安全灯

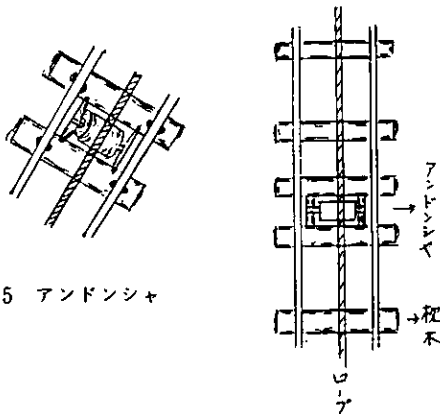


図5 アンドンシャ

イシ 石(石炭)

筑豊では石炭を石という、又石炭をスミとも言う。

イシガラ 石殻

粗製コークス。筑豊では石炭のことを「イシ」又は「スミ」という。イシを焼いて黒い煙が噴出しなくなると、すばやく火を消した物が「ガラ」又は「イシガラ」で家庭用燃料として使用する。

イシタケ 石丈(炭丈)

炭層の厚さのこと。

イタメ 板目

炭の目の一種。炭層には丁度木理のような目が、普通縦横両方にはいっているが、其の中、最も発達している目を標準とし、これが切羽面に平行に現れたものを板目という。

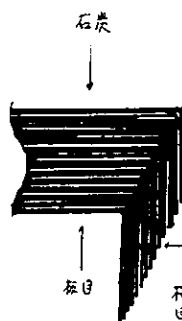


図6 イタメ

イチカタ 一片

昇り、卸の幹線坑道から左右にほぼ平行に

延びている支線坑道のうち一番目に延びたものを左一片、右一片と呼び、奥に進むほど数字が大きくなる。図14参照。

イチコロ

事故などで即死すること。

イチバンカタ 一番方

8時間交替で一番早いのが一番方、次を二番方、最後を三番方という。

イチチョウキリハ 一丁切羽

長い長壁切羽に対して、短い採炭面で採掘する切羽のこと。

イッポンケン 一本剣

車道の分岐する所にある可動レール。このレールの位置を変更して鉱車の進行方向をかえる。

イテンカタ 移転方

払面に敷設したコンベヤを、切羽面が進行するにつれて、新しい位置に移す作業つまり移転をする人。

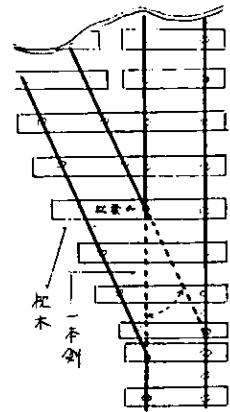


図7 イッポンケン

イリビキ 入引

炭車の縁まで石炭が積込まれたときは、一函分の賃金が支払をされるが、不足しているときは、その不足量に応じて一割引、二割引と賃金を差し引かれる。また硬の量が多ければその分硬引として賃金が差し引かれる。

イレクチ 入口

坑道や切羽を新たに造る時に、現存する坑道に口を開けることをいう。

イワ 岩

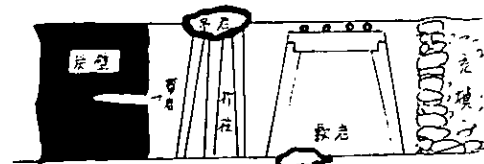


図8 イワ

炭坑では「松岩」または「ドン」の称。炭層や天井などにある異色の堅い岩石。一見石炭に似ているが少しも燃えない。天井か

ら吊り下がっているものを「吊り岩」、下盤に盛り上がっているものを「敷岩」、炭層の間などに帯のように細長く挟まっているものを「帯岩」と称して区別している。

イワハダ 岩肌 石炭層と岩の面との境目。

イワマイト 岩マイト

岩を破碎するために行う発破。岩に穿孔し火薬を装填して発破する方法と、火薬を岩の上に乗せ、粘土で押えて発破破碎する方法がある。

インターフェロメーター 光の屈折を利用して坑内有害ガスの検出を行う機械。「ガス干渉計」ともいう。

ウキイシ 浮石

特に天盤の剥離しかかった岩石、または石炭。早く発見しこれを落とすのが安全。

ウキツミ 浮炭

炭層の切羽面、天井や壁から浮いて、落ち易くなっているもので、早く落とす。

ウケヨイキュウ 請負給

炭坑での給与体系の一つ。請負作業全般に対し、その出来高に応じて支払われる賃金。

ウチオトシ 打ち落とし

炭層または岩石の下を透かしを行い、上部にある石炭、岩石を発破によって打ち落とす。

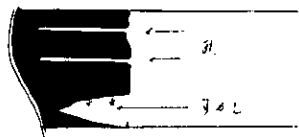


図9 ウチオトシ

ウチコミナル 打ち込み成（差矢法）

崩壊性の岩石や砂礫の中を掘進する場合に施す方法。成木の先端を尖らせて打ち込んで進む方法。

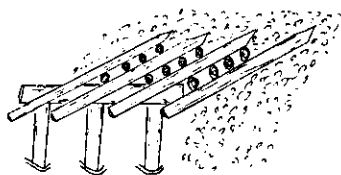


図10 ウチコミナル

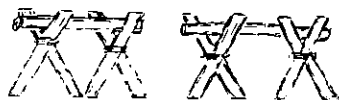


図11 ウマ

ウマ 馬

仕操作業で天井の高い個所で使用する。動物の馬ではなく成木で造った簡単な足継ぎ、ベルトコンベヤの上にローラーを取付ける鉄製の台も「ウマ」という。

ウマノセ 馬の背

斜坑の坑口付近が馬の背型になった部分。

ウミダシ 生み出し

坑内に於ける圧風管、(エア管) 散水管の「ホース」取付口。

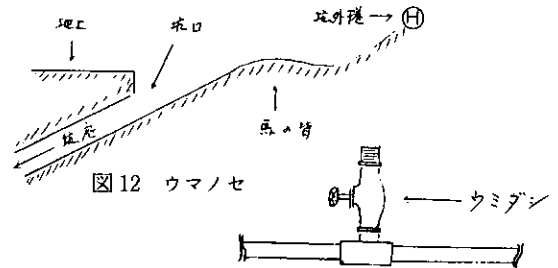


図12 ウマノセ

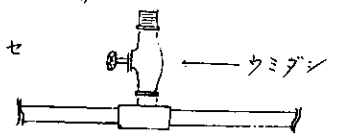


図13 ウミダシ



写真 ウミダシ

ウラゴメ 裏込め

煉瓦巻やコンクリート壁を施行した際にできる隙間に硬など隙間なく詰めること。

ウワメクル

上役の目を盗んで保安炭柱など切羽以外の掘ってはない個所で盗掘する

ウンテンバコ 運転函（運転する鉱車）

坑内の函廻りを良くするために、それぞれの個所に応じて、常に切らしてはならない適当な運転に要する炭車数が必要。この運転函の数で、運転函が多いとか少ないと、坑内作業現場より苦情が出て出炭などに大きく支障をきたす。

エブ

「えびじょうけ」ともいう。物を手で運ぶ時の運搬用具で左右に手が差し込まれるように造られた竹製のざるで、ざるに満積したとき石炭で約6kg、硬で約10kgは運搬

できる。



写真 エブ

エヤー 圧縮空気

コンプレッサーで圧縮された空気、坑内作業の穿孔機などの動力に用いる。一般にエア、又はエアーと云う。

エンジンザ エンジン座（駆動部座）

ホーベル、コンベヤのエンジンを据付ける個所で「肩」上部と「深」下部にある。

エンジンバシラ エンジン柱

エンジンを設置し、運転によりエンジンが動かないように固定する柱。

オイカゴ 負籠

採炭個所より炭車まで、竹製の負籠を背に負って石炭を運搬する籠、機械化されてから必要がなくなる。

オオガタ 大肩

払面の一番上

オオダシ 大出し

普通よりも特別に石炭を多く出す。この日は特別に賃金も支給される。

オオテン 青天

筑豊炭田で三五尺層の上磐にある厚さ1メートル程の硬い岩石に対する俗称。

オオヤマ 大山

大手炭鉱、資本金もあり機械化も進んで、人員も多く働いていた。

オカジョウキ 陸蒸気

蒸気機関車のことで、陸蒸気が出現する前

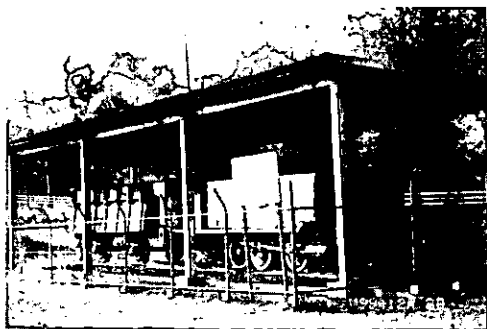


写真 オカジョウキ

は「川端」で筑豊から産出された石炭を遠賀川、彦山川を下って芦屋へ、芦屋から海路福岡方面に送った。

オクナリ 奥鳴り

発破の際に爆薬が孔の奥で爆発して、外に吹き出さない。

オクリマイト 送りマイト

次の方が入坑してすぐに作業がかけられるように、その前方が作業の終りに装填しておく火薬のこと。

オコリ

石炭と火山岩との接触部分よりやや遠ざかった個所に生ずる天然の半骸炭。見ためはコークスに似ているが、小さい六角状に割れることがある。パチパチとはねず、無煙で火力が強い。

オシアゲカン 押上管

坑底に溜まった水を排水ポンプで押し上げる鉄管（パイプ）のこと。

オビイワ 帯岩

帯のように薄く細長い松石（珪化木）。炭層の中に薄く挟まった松石のこと。

オヤトラフ 親トラフ

エンジン（駆動部）のところにある一段と大型の金戸極。

オーライ 停止

オーライは炭鉱以外では正反対になり、失敗談が多くある。電気を止める、エンジンを止める、鉱車を止めるはすべてオーライという。

オロシ 卸

斜坑坑道の場合ある位置から下に向っている坑道を卸向という

オロシツメ 卸詰

卸坑道の一番下の所。

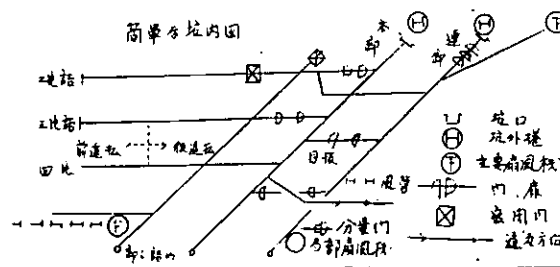


図14 オロシツメ

オロシバライ 卸払い長壁採炭法で卸向に採掘す

る。下に向かって採掘していく方法。

カイトン 塊炭

比較的大きな石炭のことで、この反対に細粉になった石炭を粉炭という。



写真 カイトン

カガミハダ 鏡肌

断層に沿って両盤の摩擦のために生ずる鏡のように滑らかで光っている。

カキイタ 搔板

石炭を掻きよせる道具。



図 15 ガンツメ・カキイタ

カグメワク 屈目杵

捲立、つまり捲卸と曲片との分岐点に用いる一種の杵で差梁という片一方の足のない杵梁を支える杵のこと。

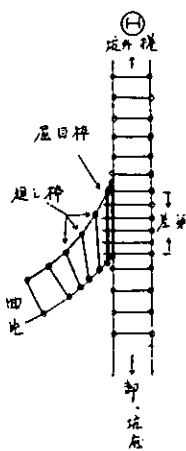


図 16 カグメワク

ガケマキ 崖巻(硬巻)

天井を保持するため、硬で硬積を造りその表面を座りのよい太目の硬で石垣巻にすること。

ガス 瓦斯

坑内で発生する有害な気体。メタンガス、炭酸ガス、一酸化炭素、硫化水素、酸化窒素などが主に発生する。

ガストウドク 瓦斯中毒

炭酸ガス、一酸化炭素、その他毒性ガスの吸入により起る中毒。症候は多く咽喉頭の刺激、頭痛、目まいなど起し人事不省に陥り死亡することがある。ガス、炭じん爆発、ガス燃焼などによって発生する一酸化炭素は、空気中10万分の1で中毒、1000分の1で死亡する。ガス炭じん爆発事故で爆発による直接の死亡よりも中毒死のほうが遥かに多い。

ガストッシュツ 瓦斯突出

メタンを主成分とする可燃性ガスが突発的に高い圧力で、炭壁や岩壁を押出してくる

現象。突出の一般的な前兆として、その付近から出てくるガス量の増加、炭質の軟化、出水、山鳴りが連続し、大音響と共に突出する。突出のガス量が多いと窒息死や、粉炭による埋没、突出時の風圧で倒れ天井落盤が起る。坑内に拡散して流動し、火元があれば爆発のおそれもある。

ガスバクハツ 瓦斯爆発

炭層から湧出するメタンガスの量が増加して、空気中の含有量が5~14%になると、爆発性を有する。これを「爆発限界」という。9%前後が最も爆発性が高い。メタンガスが14%以上になる、青い焰をあげて燃えるだけで爆発はしない。

カセ 加背

坑道の広さを示すもので、加背3メートル×2.5メートルの坑道は、高さ3メートル、幅2.5メートルの坑道のことで普通は杵梁、杵足の長さで示す。

カタ 肩

傾斜した炭層で深度の浅い方を肩、その反対に深いほうを深という。

カタカンダンケイ カタ寒暖計

普通の寒暖計に似ているが、ガラス管の底球部の水銀の代りに着色したアルコールを入れ、それを湿絹布で包んである。空気の湿度、温度、風速を同時に測定できる。坑内作業個所での労働条件の適正度を調べるのに使用する。

カタド カタ度

カタ寒暖計で測定した数字、測定個所における労働条件の適正の度合を示す。

カタバン 片盤

炭層に沿って水平に掘進した坑道。普通捲卸を中心に左右に、上から番号をつけている。(片盤坑道ともいう)。このような名称は坑口より下部に向って左○片、右○片という。

カタバンコウドウ 片盤坑道

カタバンに同じ。

カタバンサオドリ 片盤棹取(卸棹取)

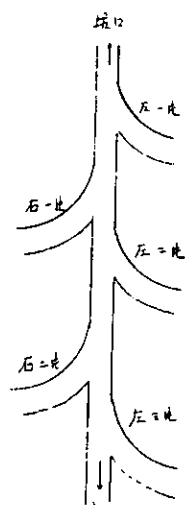


図 17 カタバン

斜坑捲運搬の炭車を片盤にいて操車する者で、炭車に乗って函の配車したり実函を捲上げたりする人。

カタバンバイ 片盤払

曲片の進行と平行して炭層を50メートルから90メートルを採掘する方法。ロング払ともいう。

カタフウドウ 肩風道

払面の肩部に設けられた風道。普通曲片に平行して設ける。

カチボウ カチ棒

炭車の速く走るのをブレーキがわりに車輪に差し込む棒のこと。

ガックリ

小さい断層のこと。

ガッシュウワク

合掌枠

図で示す。

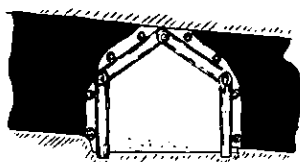


図18 ガッシュウワク

カッター

採炭機^{サイタンキ}のことで炭層下部4、50センチのところの炭層^{トウライ}を透截して採炭を容易にする機械で、棒型、鎖型など数種類ある。最新式ではドラム・カッターがある。

カッター・マン

採炭機を運転する運転手。

カタン 褐炭

炭化度のあまり進んでない石炭。骸炭^{ガイ}75%以下、固定炭素30~55%の炭。粘結せず多量の揮発物を出し、光沢がなく、黒褐色を帯びたものが多い。

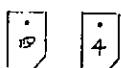
カナイタ 金板

複線^{カネカタ}曲片の延先^{ノビサキ}などで、空函線から実函線へ炭車を切替えるためレールに取付けてある鉄製の板。



カナテコ 金挺

重量物を移転、移動させる時に使用する。



カナフダ 金札 (炭札)

坑内から捲上げた炭函に誰が、石炭積んだか検炭場で識別できるように一函ごとに取付けたブリキ製の番号札。

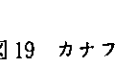


図19 カナフダ

カネカタ 曲片

片盤にレール敷設した水平な運搬坑道で単線と複線のものがある。かつては片盤坑道を炭層内に掘り、炭層が曲がったところは坑道も同じように曲って掘ったので「曲片」というようになったと書かれている。

カーブ・シーブ

レールの曲線部^{カクセンブ}内側に設置するロープ受け^{ドウチウシキ}の導中車。

カブダシ 株出し

石炭を函に積込む時に、函がなく積込めないで、一時石炭を溜めておく。

カマガス 釜ガス

ボイラーで燃やした石炭殻^{ガラ}。家庭用燃料にもならない。

カマズミ 釜炭

ボイラー用の燃料炭。

カマバ 釜場 (汽場)

ボイラーを据付け、蒸気機関その他に送る水蒸気を作る釜炊き場。

カミサシ (楔、矢板ともいう)

楔のことで、杵や柱を固定する時に使用する。図112矢板参照。

カヤクウンバンシャ 火薬運搬車

坑内火薬庫に火薬類を運搬する函は、特別構造になっている。台車に厚さ一寸(約3センチ)で高さ三尺(90センチ)の箱を取付け、内部に金属類が露出しない構造で、火薬と雷管の収納室を区切って設置し、箱全体と蓋の外部に、厚さ3ミリの鉄板で覆い施錠でき堅固な火薬運搬車。

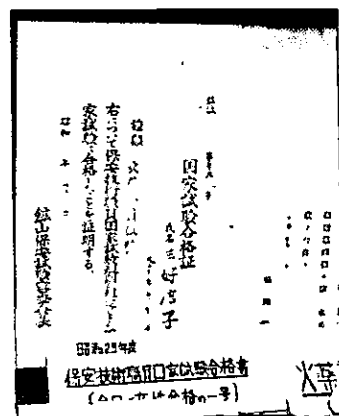


写真 火薬係資格証

カヤクコ 火薬庫

発破に使用する火薬を入れておく倉庫。



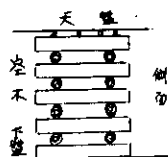
写真 ガラ

ガラ 骸

石炭を不完全燃焼させて作る家庭用燃料。沈殿バックに蓄積した微粉炭を、25センチ角に切り取り、透間を開けて積重、燃焼させ、完全に燃えないうちに土砂を被せ蒸焼きにしたのが骸炭。

カラコヅミ 空木積

坑木を井形に積上げて天盤を支える充填の一つ。空木積みみの内部に硬をつめたのが実木積充填。

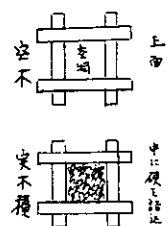


カラバコ 空函

石炭も硬も積んでない空函。

カラシキ 乾鋪

坑内で湿気がなく乾燥した個所。



カリシャドウ 仮車道

掘進切羽では八尺×八尺(約2.4メートル×2.4メートル)の沿層掘進の場合1回の発破で、1.2メートル掘進する。一方で3回発破で3.6メートル×三交替で12.96メートル掘進するため大工の正規の車道敷設が遅れるので、一時の間に合せに便利な仮車道を敷設する。翌日大工が正規の車道と取替える。

図20 カラコヅミ

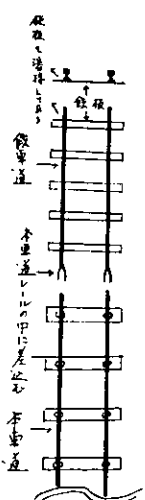


図21 カリシャドウ

カリワク 仮枠

天井が悪い個所で先に仮枠を入れて、後で本枠と入替える。

カワヒラタ 川舩

嘉麻川、彦山川、遠賀川は蒸気機関車が発

明されるまで、石炭輸送の主役であった。ひらた舟参照。

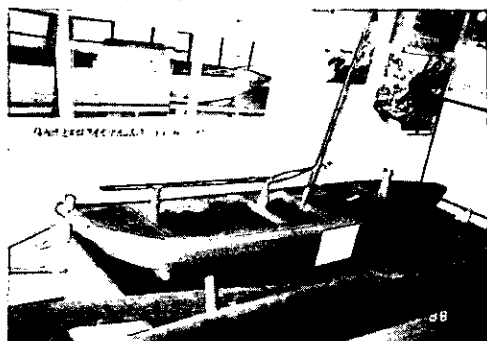


写真 カワヒラタ

カンセツ 間接

採炭、掘進、支柱、仕操など石炭採掘に直接作業をする者を直接と呼び、それ以外の作業者、棹取、大工など石炭採掘に直接関係のない者を間接員という。

カンセンコウドウ 幹線坑道

主要運搬坑道。本卸坑道、連卸坑道。図14参照

ガンブン 岩粉

坑内のガス、炭じん爆発の広がり防止するために撒布する岩石粉。

ガンブンダナ 岩粉棚

爆発の時、坑道、切羽などに岩粉層ができて爆発の勢力を押えるようになっている装置。

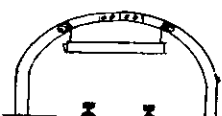
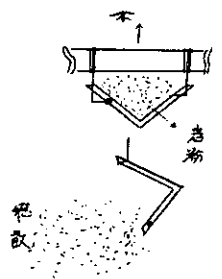


図22 岩粉棚



写真 岩粉棚

ガンブンサンブチタイ

岩粉散布地帯

採炭切羽大層坑道に坑道全面に約1センチ～2センチの厚さに岩粉が撒いてある所。

キカイサイタン 機械採炭

各種類の採炭機械が発達し、手掘りから比較している。

ギケイシャ 偽傾斜

傾斜した地層または炭層において、その斜面に沿って水平に走る方向を「走向」走向に直角な方向が真斜面とまたは単に「傾斜」という。斜面と水平面のなす角を斜面角という。斜面をなす水平面上で走向と真傾斜の中間の方向を「偽傾斜」という。

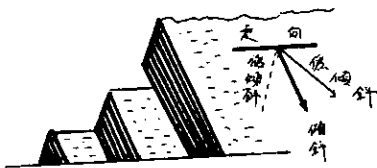


図23 ギケイシャ

キジュンハッパ 規準発破

発破法を研究し層状、岩質により有効な発破孔の深さ配置を基準に基いて実行する発破のこと。

ギチ

一般に粘土のことを言う。鉾山や炭鉾では発破孔に装填する粘土をギチと言うが、筑豊では土栓という。

キップ 切符(炭券)

賃金のかわりに出し、その炭坑指定の店にだけ通用し、他の店には価値のないただの紙切れで、終戦後も中小炭鉾では使用していた。

キテイカンスウ 規定函数

鉾車を捲揚機で捲揚げ、差込む時、能力などに応じて一定の連結函数が規制されている。この函数を「規定函数」という。これ以上連結するとロープが切れたり、その他の事故が起るので絶対に禁止されていた。

キバク 起爆

爆薬を爆発させること。

キバル

頑張、発奮する。

キャクセン 脚線

電気雷管についている二本の被覆銅線、通常先線ともいう。

キャップシツ キャップ室(安全灯室)

キャップランプの充電、修理をする室。

キャップランプ

携帯用の電気安全灯で、燈火部分を坑内帽子に取り付け、バッテリーは腰のベルトに通す。



写真 救護隊

キュウゴタイ

救護隊
炭坑災害のとき遭難者救助に備えて組織された団体。
甲種炭坑では必ず常設しなければならない。

キュウメイキ

救命器

ガス、炭じん爆発、坑内火災等の際、各種の有毒ガスが発生する。坑内内部の探検、救護等の作業が危険でできない。これ等の有毒ガスと関係なく、人間が呼吸できるように考案された装置である。

キュウレン

発破孔内の線粉を掻き出すために使用する工具の一種。



図24 キュウレン



図25 キョウタンソウ

キョウタンソウ 夾炭層

炭層を夾有する層。
一般に石炭、頁岩、砂岩、礫岩などの層からなる。

キョクセンハッパ

曲線発破

爆薬の爆発するところと、発破係員が点火または避難する位置とが、見通しがきかず

曲っていること。直線発破に対応する名称。直線発破は危険性がともなうので禁じられている。

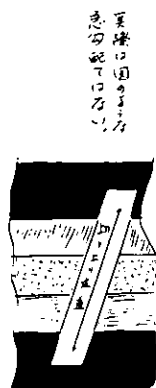
キョクブセンブウキ

局部扇風機

坑内で局部の通気を計るために据付ける小型の扇風機。主に掘進現場の通気廻路のない鉄砲延に使用する。

キリアガリ 切上り

下の地層、炭層から、それより上部の地層、炭層に連絡坑道を作る 図26 キリアガリこと。



キリアゲ 切上げ

重圧がきて天井が低くなり枠も折れる。炭車の通行、人間の通行に支障をきたすので、元の高さ広さに仕繰って切上げする。規定の広さにする。図27。

キリアゲコグチ 切上げ小口

坑道を切上げた先端口。図27参照。

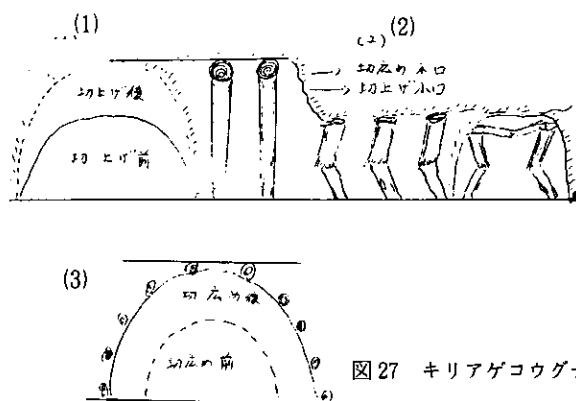


図27 キリアゲコグチ

キリグミワク 切組枠

重圧のかかる個所では施行しない。化粧枠、飾り枠として仕繰の技能を誇示するものである。

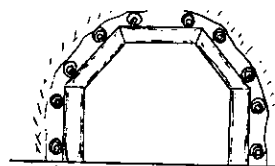


図28 キリグミワク

キリコミタン 切込み炭

石炭層中の硬も含めて坑外に上げる石炭。手掘りの時は硬は坑内で撰分して坑外に上げたが、機械化後は坑内では選別しない。

キリサガリ 切り下り

上部の地層、炭層より、下部の地層、炭層

に掘り下げ連絡坑道を作る。切上りと逆になる。図26参照。

キリダシ 切り出し

一人作業のこと。ヒトサキ二人一組の作業。フタサキ四人一組の作業。

キリチン 切賃

採炭現場で石炭を掘り炭車に積込んで一匁いくらと定めた単価。

キリツケ 切付け

穿孔前、発破後浮いた天井、壁の硬や石炭を鶴嘴で落として作業にかかる。

キリツメ 切詰め(延詰)

坑道の先端部のこと。

キリハ 切羽

坑内の採炭、掘進の最前線の作業現場。採炭は採炭切羽、掘進は掘進切羽という。

キリハメン 切羽面

作業現場で採炭を行う炭壁面、掘進切羽は掘進を行う岩石面。

キリバリ 切張り

枠、特に鋼枠(車道を曲げたもの)を施枠したときに倒れや、上下の振れるのを防ぐため手前の枠とで支えを木片で突っ張る。炭壁面が大きく倒潰の恐れがあるとき、施行している鉄柱より切張をする。

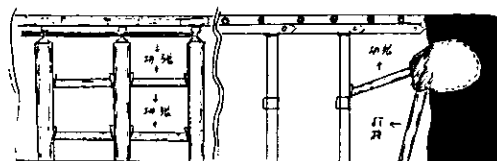


図29 キリバリ

キリヒロメ 切広め

幹線坑道、主要坑道など単線車道から複線車道敷設に変更するとき、より以上の坑道の広さに切り広める。図27-(3)を参照。

キリフキ 霧吹き

坑内の水管にゴムホースを取付け、先端に霧吹きになるノズルを取付け、採炭切羽の肩坑道に設置し、炭じんを鎮めるのに使用する。

キレツ 亀裂

地層や岩盤、炭壁の割れ目。

キンケン 金券

炭鉱が発行した私製の札。はじめは賃金の



写真 キンケン

内払いの意味であったが、炭鉱不況のため、中小炭鉱は現金で賃金が払えず、その炭鉱の購買店、特約店で品物が買える仕組みの購入券を出すようになり、これも「金券」と呼ばれていた。

キンサキキン 斤先金

鉱業権者から土地使用の代償として土地所有者に支払れた契約金。これは藩政時代に行われた「村益銭」の名残である。坑口を開かれた農村は多くの場合、採鉱と輸送に農地を犠牲にし、農耕を妨げられ、この損失を保証するため生産する石炭、あるいは骸の価格に応じて、一定歩合の斤先金が支払われた。

キンサキボリ 斤先掘り

鉱業権者でない者が、鉱業権者から鉱区借用し、又は請負って石炭を採掘すること。

クッシン 掘進

先進坑道を作り、採炭坑道の準備をする。

クノジ くノ字

鉄管（パイプの曲った部分のこと）

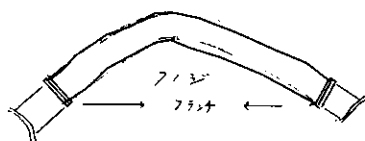


図30 クノジ

クミフ 組夫

鉱業所雇用の直轄と異なって、下請業者の雇用で採炭以外の作業をする人。

クラガイ

坑内弁当のことをいう。

クリコ 繰粉

鑿で穴を穿つ際に出来る炭粉または岩粉のこと。

クリコミバ 繰込場（進発所）

作業員が担当保安係員より、保安上の注意、作業の配置、手順を指示される場所。

クリップ

エンドレス、ロープ運転のとき、炭車とロープを連結する用具で、俗に「カチ」ともいうが、坑内では特に斜坑の仕操作業をするとき、鉱車を預ける時の函止をいう。

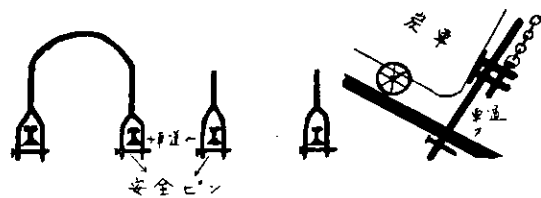


図31 クリップ

クルマカゼ 車風

同じ風が坑内の局部でも循環して新しい空気を換気しなくて、ガス、粉じん、発破後の煙が排除されない、局部扇風機が空気を送る坑道近くに設置すると車風になるので、Aのように適当に離して設置する。

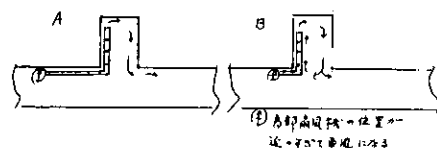


図32 クルマカゼ

ケイカイニン 警戒人

発破作業を行う時、爆発させる前に、発破係員の指示を受けて、発破現場に近寄らないように見張をする人。

ケイカイフダ 警戒札

発破作業現場に通じる坑道に、警戒人を出すとともに坑道の中央部に、発破中の札を標示しなければならない。

ケイシャ 傾斜

地層、断層または鉱脈などが水平面となす角度。傾斜の方向は、「走向」と直角となる。図23参照。

ケイセイ 傾城

ドン（进入火成岩）により無煙炭化した火力の弱い石炭。筑豊炭田の嘉穂地方での俗称。傾城（芸者）のように外観はよいが実質を伴わないので、このようにいわれる。田川地方の「チクラ」と同じ意味。

ケイハイ 珪肺

金属鉱山や石炭鉱山で坑内で働く人達がよく罹る病気。空気中に微じんとなって浮遊している石英、珪酸鉱物、硬質の岩石の粉末が呼吸の際、肺に達して之に膠着し、肺組織を損じ、その機能を困難にする。呼吸困難、胸内苦悶感を訴え衰弱する。

ケイヒョウ 警標

発破、作業、通行、危険個所の立入りを禁止するなどを明確に示す標識。

ゲージ 車道のレールとレールの間隔。

ケショウワク 化粧枠

坑口から最初にある装飾的な枠で、コンクリートや煉瓦巻がある。図28のキリグミ枠も化粧枠という。

ゲタ 下駄

坑内で地盤の軟弱な個所で、枠足や打柱など沈下を防ぐ

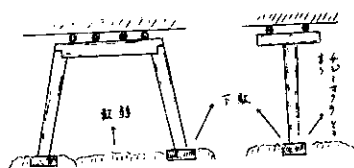


図33 ゲタ

ために盤際に敷く木片、この木片を敷くことを「下駄をはかす」という。

ケツガン 頁岩

粘土質物質を主成分とした葉片状の堆積岩。

ケッセン 結線

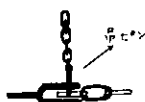
電気発破において装填した電気雷管の脚線と発破母線とをつなぐこと。



図34 ケッセン

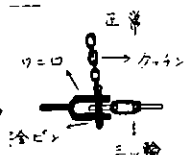
ケッチン 結鎖

炭車と炭車を連結するピン（丸鉄の長い物）に繋いである鉄の鎖のこと。



ゲッテン

筑豊では松岩（珪化木）というが、三池ではゲッテンという。



ケツビキ 欠引

坑内から上がった実函を 図35 ケッチン 検炭係が検査して、炭車

の縁から切れた分量によって賃金を引く。

ケツワル 尻割

働いている作業員が無断で退職、または逃亡することに対する俗語。苛酷な労働に耐えられず、とか前借金の踏倒しや、条件のよい炭鉱に無断で逃亡してかわる。中小炭坑では再々あった。

ケル 蹴

炭車の移動変更で一本剣を移動する。切替える。図7参照

ケンカギ 剣鉤

炭車等の連結ピン抜き、一本剣の切替え道具。別名ピンカギともいう。



図36 ケンカギ

ケンシンガカリ 検身係

入坑、昇坑に際し、火気類其の他危険物を持参していないか服装検査をする人。

ケンタン 検炭

坑内から石炭を積んで上がってくる実函の中に、硬量について疑わしいのは、転覆させ、中の硬量を選別し秤量検査し、積載量から硬



写真 検身所

の量だけ差引き、その分の賃金が支払われる。

ケンテイトウ 検定燈

ベンジ燈の焰の長さは空気中のメタンガスの量によって異なるので、ベンジ燈の焰の長さを測定し、メタンガス量を知ることができる。この目的に用いる安全燈を検定燈という。

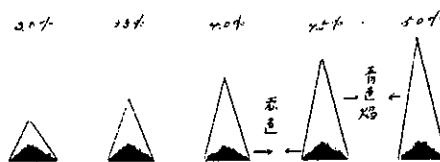


図37 ケンテイトウ

ゴアンゼンニ 御安全に

貴方の御安全を祈ります。という意味で炭鉱では坑内外を問わずに挨拶をかわす。作

業を終えて帰路につく時は、やはり坑内外を問わずに、お疲れさまと挨拶をする。

コウアツスイカン 高圧水管

水力採炭は水の力で石炭を粉碎する。ホース筒口径18~22 $\frac{1}{2}$ 、水圧50~140kg/cm²であり、それに対応するために強固で堅固でなければならない。

コウガイフ 坑外夫^{クツツ} (坑外員)

坑外作業に携わる人。

コウカタ 甲方

甲方は7時より15時まで、乙方は15時より23時まで、丙方は23時より7時までとなっているが会社によって多少の時間差がある。又甲方を一番方。乙方を二番方。丙方を三番方ともいう。

コガタマキ 小型捲^{ケンイン} (ホイス^{ホイス}ト捲)

捲上機械のうち牽引力の小さい機械。普通十馬力から二十馬力のものをいう。別名十馬力ホイス^{ホイス}ト捲、二十馬力ホイス^{ホイス}ト捲ともいう。

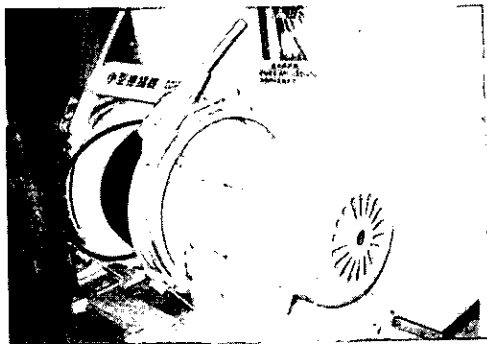


写真 コガタマキ

コウギョウケン 鉱業権

鉱区内に存する許可された鉱物を試掘または採掘し得る権利。前者を試掘権、後者を採掘権という。これらの権利を得るには一定の手続をなし国家（通商産業省（現・経済産業省））に願い出なければならない。

コウギョウケンシャ 鉱業権者

国家（通商産業省（現・経済産業省））から鉱業権を許可された人。試掘の権利だけを許可された試掘権者。採掘の権利を持っている採掘権者とある。

コウギョウホウ 鉱業法

鉱業に関する基本的制度を定めた法律。現行のものは昭和25年12月に公布、翌年1月から施行された。古くは明治5年の太政

官布告による「鉱山心得」、同23年に「鉱業条例」となった。同38年に「鉱業法」が制定され、改正につぐ改正で現在の「鉱業法」となる。昭和45年現在。

コウク 鉱区

法律上で決められた鉱物を試掘または採掘するため鉱業権の登録を得た区域。試掘権を得た区域は「試掘鉱区」。採掘権を許可された区域は「採掘鉱区」という。

コウグチ 坑口

坑の入口。

コウシ 鉱主

コウシュ^{コウシュ}だが筑豊弁が訛^マったもの。炭鉱の経営者。

コウショウ 公傷

公務中の怪我。公務中以外の怪我は私傷として区別され、公傷は特別に取扱いされる。

コウシュタンコウ 甲種炭坑

可燃性ガスの発生率に対して甲種炭坑、乙種炭坑と区別される。甲種炭坑は可燃性ガス発生率に対して通商（現・経済）産業省より指定された炭鉱で、概して坑内深度の深い大手炭鉱があげられる。

コウテイ 坑底

堅坑または斜坑など主要坑道の一歩終点付近をいう。「坑底」というのは一番深い所という意味ではない。一番深い所は、坑底より水平坑道が延び、又卸しを下った卸詰である。

コウテイジムショ 坑底事務所

坑底に設置された坑内事務所。

コウドウ 坑道

本線坑道、連卸坑道、人道、風道、通気坑道、炭車専用坑道、電車坑道、片盤坑道、卸坑道、目抜坑道等がある。

コウナイガカリ 坑内係（保安係員）

坑内の仕事を司る坑内保安技術職員のこと。これに対し坑外保安技術職員を坑外係員と称する。

コウナイズ 坑内図

坑内の模様を測量して縮図で示した図面のこと。

コウナイフ 坑内夫（坑内員）

炭鉱で坑内で働く労働者。単に鉱員ともいう。鉱員は鉱業所で雇用された者。会社雇

用は社員又は「職員」ともいう。

コウボク 坑木

坑内で採炭、掘進、仕繰等に保安上必要な材木（黒松、赤松、雑木）類で松材が最も広く使用されていたが、機械採炭になり、鉄柱、カッペ、鋼柱使用で坑木の使用量は半減した。

コウボクソウコ 坑木倉庫

坑内の支保材関係は勿論だが、坑外に必要な角材、板類、樽木類と全般的に必要な品物は確保していた。

コシセン 腰線

坑道を掘進する場合に、その傾斜を示すために、施行棒に盤から1メートルに測量係りが白線（石灰乳）を引く。昇傾斜、卸傾斜はこれが標準線になる。

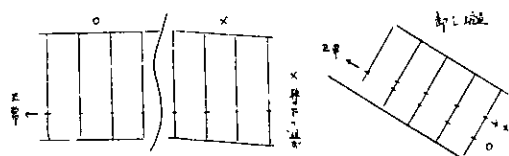


図38 コシセン

コース 綱首

捲網の鉤（炭）車に連結する方の端に付いている連結用の金具のこと。金具と捲網の取付け口を「コース元」という。

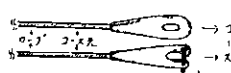


図39 コース

コースバコ 綱首函

コース元に一番近く連結した鉤車。

コースマキ 綱首捲

コースの付いている捲網を使用して、斜坑の捲揚運搬を行うを、コース捲という。

コースモト 綱首元

図39を参照。

コヅミ 木積

図20を参照。

コドリ 小取

仕事の見習い、または手助けをする人。

ゴヘイタ 五平太

北九州方面の石炭に対する俗語。語源は石炭の発見者「五平太」の名がつく。あるいは石炭を運搬した川舟（平太舟）のうち藩用のものを「御平太」と呼ばれたのが訛っ

たものといわれる。又炭層が「夾み」のため五枚に分かれたものを「五ヘダ」というものに基づくなどといろいろの説がある。川端参照。

ゴムホース

圧風管（エア管）の鉄パイプから、採炭、掘進等作業現場のさく岩機、コールビットなどに圧縮空気（エア）を送る柔軟性のあるゴム製のホース。

コメボウ 込棒

発破孔に爆薬や込物を装填するとき使用する棒。金属性の棒は危険なので木製のものを使用する。

コメモノ 込め物

発破孔に爆薬を装填し、その後孔の中の爆薬を押える粘土や砂類（砂はサンドバック）をいう。図24参照。

コヤマ 小炭坑

石炭の産出量の少ない炭坑。経営の小規模な炭坑のこと。

コール・カッター

機械の力で石炭をきって、採掘を容易にする機械。鎖型、棒型など各種の形式のものがある。和名で載炭機。

コール・ピック

圧搾空気によって運転し、鑿の部分の衝撃によって石炭、岩石を破碎する機械。ハンマー・ピック図91参照

コンセン 混線

電線が途中で短絡することで、電気発破ができなかったりする。

コンタン 混炭

炭種の違った石炭を混ぜ合わせることを。

コンベヤ 連続運搬機械。

鎖で石炭を運搬するチェーン・コンベヤ、戸樋のようなものを揺り動かして運搬するシェーカ・コンベヤ、ベルト・コンベヤ、パンツァ・コンベヤなど各種類ある。

ゴヨウ 御用

田川地方の塊炭にたいする俗称。小倉藩で田川郡の石炭を直営している時代に、鶏卵大以上の塊炭だけを買い上げたので塊炭のことを「御用」と呼ぶ。

サイクツセイゲン 採掘制限

鉱業法第64条により鉱業権者は鉄道、道路、



写真 グヨウ

港湾、河川、湖沼、堤防、公園、学校その他公共施設や建物の地表、地下50メートル以内の場所で、鉱物を許可なく採掘できないことを規定している。

サイタンキ 採炭機

カッター参照。

サイタンキカイ 採炭機械

直接石炭を採炭するのに必要な機械。例えば「ピック」「ドリル」「カッター」「ホーベル」「コンベヤ」等多種類ある。

サイタンフ 採炭夫（採炭員）

坑内で直接石炭の採炭に従事する作業員。

サオドリ 棹取（運搬員、乗廻、操作係）

鉱車の操作に携わる作業員に対する一般的名称。元来は坑内の配水を釣瓶で行っていた時代、これに従っていた労働者を「さをどり」または「さをどりふ」と呼んでいた。

サカギ 逆木

坑内で枠足、打柱類はすべて樹木の幹元が上（天井側）にならなければならない。

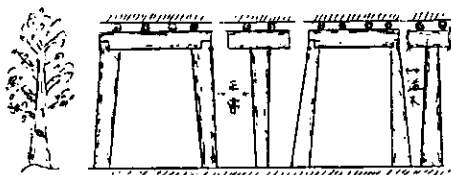


図40 サカギ

サガル 下がる

坑内に入坑すること。アガルは昇坑すること。

サキノビ 先延

坑道を掘進して先に延ばすこと。

サキヤマ 先山

作業現場の責任者。採炭、掘進、仕繰支柱、移転等必ず熟練した者が先山として、現場

作業を統括する。機械化が進んでも先山はいる。

サクガンキ 鑿岩機

岩石や炭層に発破孔をうがつのに用いる機械。「ドリル」「デムバー」ともいう。

サシ 差し

鉱車を下降させる。

サシバコ 差し函

卸で下に下げる鉱車（炭車）のこと。

サシバリ 差梁

屈棒に支えられた梁。図16参照。

サシモドシ 差戻し

捲立が斜面になっていて、斜坑を捲上げた炭車を「差す」場合、必ず斜面の上まで一度捲上げて、それから再び「下げ戻す」場所の部分という。

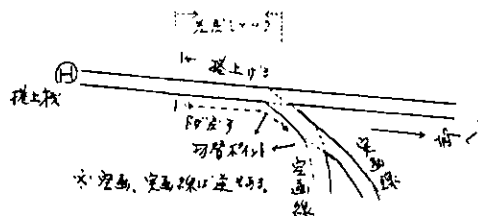


図41 サシモドシ

サス 差す

差しに同じ。

サッコウ 鑿孔

発破孔をうがつこと。

サビタン 錆炭

金気が附着し錆色になる石炭のこと。石炭の表面が水酸化鉄で錆色を帯びるものを「赤錆」。

サポーター

鑿岩機の支持具でエア圧力で操作する。発破孔をうがつ時は人力で三人ほど必要としていたが、この機械が導入されて、横倒れしないようにすれば一人で操作ができ、掘進坑道によっては3~4台で鑿孔ができる。

サボル

怠けること。

サマチャン 様ちゃん

好きな人、恋人。

ザンギョウ 残業

規定の時間を過ぎてからも残って作業をする。

ザンタン 残炭

坑内で甲方（一番方）の積んだ実函^{いばこ}は甲方の選炭場で処理するのが原則であるが、それが処理できず、次の方まで残った場合に、この実函の函数を「残炭函」という。又採炭員が積み残した石炭も「残炭」という。

ザンチュウシキサイタン 残柱式採炭

炭層を採炭する場合に天井の崩落を防ぐため、石炭の一部を柱状に残し、これによって天井を支える採炭方法。

サンド・バック 発破孔の砂の込物。

ザンリュウマイト 残留マイト

発破孔に装填した爆薬が不発となって残ったもの。

ジウリ 地売り

藩政時代に行われた名称で同一藩内、すなわち領内で売り捌くこと。これに対して藩外に売るのを「旅売り」という。

シォーマスク COマスク（自己救命器）

石炭の自然発火、ガス炭じん爆発などで発生する一酸化炭素に、坑内入坑者が侵されずに短時間に危険区域から脱出するのを目的として製作された、自己救命器。坑内探険、羅災者救出には使用できない。救護隊の救命器とは異なる。

シキイワ 敷岩

松岩や「ドン」（^{ホウニョウ}进入火成岩）が炭層の下盤際に敷いたように存在するもの。「ドン」の場合は「敷ドン」と称して区別することもある。

ジキウリ 直売

仲買人の手を通さず炭坑から消費者に直接売ること。

ジクウケ 軸受

炭車、台車の車輪の軸をうけるもの。

シクツ 試掘

石炭、鉱石などの埋蔵状態が判然とせず、採掘計画をたて得ない場合に、それらの産出状態、埋蔵量など明らかにするために、露頭調査、坑道掘進、試錐などで調査する。この場合監督庁に試掘願を出し、その許可を得ねばならない。

シクミホウ 仕組法

天保八年、福岡藩で制定した石炭の採掘、販売等を規定した法規で、石炭に関する日本国最初の法律。

シクリ 仕繰

坑道維持のため、拡大したり補修したりする作業。

シクリタン 仕繰炭

坑道拡大、補修中に出土した石炭を「仕繰炭」という。

シクリフ 仕繰夫（仕繰員）

仕繰作業に携わる労働者。

ジゴクナルギ 地獄成木

坑道の高落箇所を仕繰る場合、杵の上に成木を隙間なく並べて、炭や硬が坑道に落ちないようにする坑木（成木）のこと。

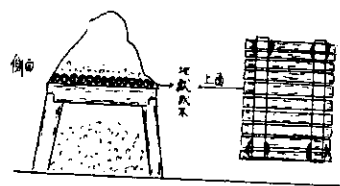


図 42 ジゴクナルギ

シショウ 私傷

公務以外の怪我、病気で休業する人。

シスイ 試錐

探査の目的で地表または坑内から試錐機械を用いて岩層に小孔を穿ち、地層の状態や炭層、鉱石の有無を探ること。

シゼンツウキ 自然通気

坑内の通気を行うのに扇風機など用いずに、坑内外空気の温度差などにより自然に換気を行う方法。

シゼンハッカ 自然発火

坑内や坑外硬捨場などで、酸化その他の原因によって石炭が自然に燃焼すること。

シタスカシ 下透かし

発破効果を大きくするために、炭層の下部に切込みを作ることをいう。

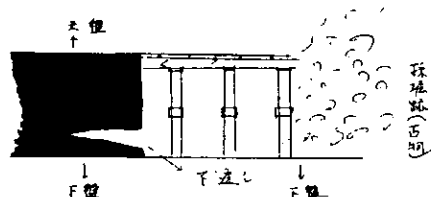


図 43 シタスカシ

シタバン 下盤

図 43 参照。

シテイコウザン 指定鉱山

可燃性ガスや爆発性炭塵の存在する炭鉱は、通商産業（現・経済産業）大臣の指定を受

け「甲種」炭鉱に指定される。以前の指定鉱山は「鉱業警察規制・石炭爆発取締規則」による取締を受けていた。

ジドウモン 自動門

炭車の通過に対して自動的に開閉できる仕掛けになっている通気門。

シバハグリ 芝はぐり

開坑式のこと、芝を掘り上げて、坑口をあけること。

シフター

レッペ・ホーベル（石炭削鉋機）とPC（パンツァコンベヤ）はガイドが付き一体となり、ホーベルで石炭を削り取り自動的に石炭をPCの中に掬い込み運搬する。一度ホーベルが通過すれば炭壁面との空間ができる。空間（隙間）ができないように圧搾空気（エア）で押し付けるものをシフターという。

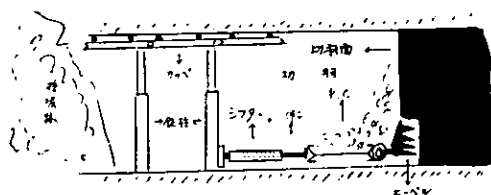


図45 シフター



写真 シフター

ジムクロー

軌道レールを人力で手軽に曲げる道具で大中小とある。大きいレールは大きなジムクロー、小さいレールは小さいジムクローを使用する。

シメ（硬）

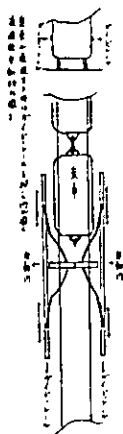


図44
ジドウモン

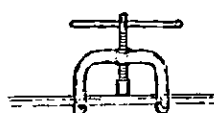


図46 ジムクロー



写真 ジムクロー

炭層の間に挟まれた薄い帯状の硬。

シャガン 砂岩

主として石英粒よりなる砂状の水成砂質物が膠着されたり、固化したりしたもの。構成鉱物の種類によって「石英砂岩」「花崗砂岩」などに分かれる。

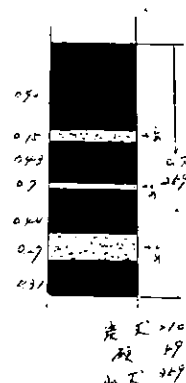


図47 シメ

シャコウ 斜坑

地表より斜めに傾斜して掘進した坑道。

ジャマ 地山

地殻が自然に層をなしたものの。特定の岩石または石炭層の周囲にあるそれ以外の岩石。または過去に全く手が付けられていない石炭層のことをいう。

シャシツ・ケツガン 砂質頁岩

砂を混えた頁岩をいう。

一方、粘土質鉱物を含む砂岩は「粘土質砂岩」という。

シャドウダイク 車道大工

車道（レール）の敷設や修理に携わる作業員。

シャベン 社弁

火薬代その他について経費を会社が負担する。

シャモット 硬山が自然発火し、硬が焼けたのを総称してシャモットという。

シャンク 発破孔を穿つに用いる鑿柄の機械に差込む側のこと。

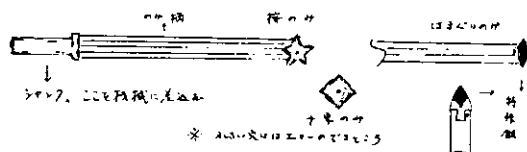


図48 シャング

ジュウテン 充填

石炭を採掘した跡、天盤が落盤しないように硬や土砂で埋めること。

シュモクツエ 主木杖

カルイ（すら）を引く時の杖で直径約5センチで、長さ15～20センチの小さな物。

写真右手の物

シュウヤクサイタン

集約採炭 多くの小切羽から出炭される採炭量と、殆ど同量の出炭を、数ヶ所の

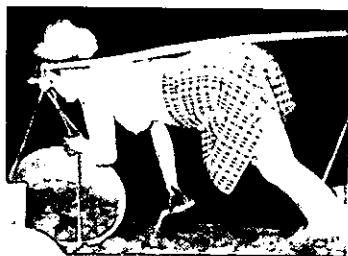


写真 シュモクツエ

大切羽から出るように採炭個所を集約して行う採炭。通気、運搬系統その他の坑内設置が少なくなり経費の節約ができる。

ジュンバク 殉爆

爆薬の爆発によって、その付近にある爆薬包が爆発を起すこと。

ショウカスナ 消火砂

坑内捲場、スイッチ座など油脂のある個所などの防火用の砂を準備して消火用の砂にする。油脂類の火災に水をかけると周囲に火焰が拡大する。

ショウコウ 昇坑

坑内から坑外に出ること。

ショウミタン 正味炭

坑内から上がった「荒炭」から硬の量を差引いた炭量。

ショクイン 職員（社員）

大手炭鉱は各地方に石炭鉱山を所持しており、本社雇用者を職員（社員）としており、各地方の鉱業所雇用を坑員としており、その他臨時、短期臨時、組夫（下請業者雇用）などがある。

ショクタン 燭炭

粘結性を有する瀝青炭の一種。揮発分 40

～60%、一般に無光沢、暗色、堅硬緻密、破面は貝殻状になっている。

ショベル

ショベル、スコップのこと。

シラセ 知らせ

天盤が落ちる前に、必ずバラバラと小さい小石が落ちて予告がある。これを知らせがあるという。

シロ 白

炭層中に噴出した火成岩で「どん」と同じ。坑内測量係が杵や岩壁、炭層につける石灰乳も白という。

シンケイシャ 真傾斜

地層、炭層、鉱脈、断層などの走向に直角的な方向の傾斜（水平面となす角）。図23参照。

シンザン 新参

新しく坑員に採用された者。他の炭坑で経験のあった者は「山新山」という。

ジンシャ 人車

坑内の入昇坑で人間のみを搬送する、専用車。



写真 ジンシャ

シンヌキハッパ 心抜発破

坑道掘進の場合、自由面を増して発破効果を大きくするために、中央部分に初発の発破で掘り込みを造り遂次に外に拡大して発破していく。

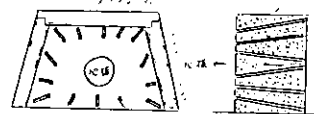


図49 シンヌキハッパ

スイセン 水洗

石炭と硬との水に対する比重の差を利用した選炭法。硬や松岩の破片は比重が大きいので沈み、石炭は軽いので浮く。

スイセンキ 水選機

坑内から上がった原炭を水で処理し、比重差を利用して良炭と硬とに分ける機械。

スイセンタンギョウ 水洗炭業

鉱業法の適用を大体受けず、石炭採掘の時硬を手で選り分けた時代に、多くの石炭が混入して硬山に捨てられている。その中に含まれている石炭を採取する事業。

スイセントリシマリジョウレイ 水洗取締条例

昭和26年嘉穂郡桂川町で取締条例を制定する。石炭、水洗等の桂川町が管理する道路、橋梁、河川、溜池、用水路、その他土地物件に、水洗炭業者が簇出し、このため放流する汚水が稲作の育成を阻害し、また川床を上げるなどの鉱害を発生させたので、この取締条例を制定し、各市町村もこれにならうなど自治体の自主的な鉱(公)害対策の先駆例をつくった。

スイセンボタ 水洗硬

水選機または水洗作業によって分けられた最後の硬。

スイヘイコウドウ 水平坑道 水平に掘進した坑道で、主に主要運搬坑道、通気、排気坑道に用いられている。

スエクチ 末口

坑木丸太の細い端を「末口」という。反対に太い端を

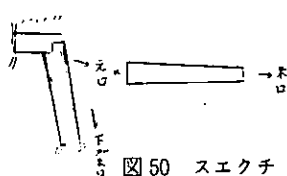


図50 スエクチ

「元口」という。一般に坑木の太さはこの末口の直径を表わし、末口何寸の坑木などという。

スキップ 石炭や硬の運搬機の一つで、目的の場所に着くと、自動的に運搬物の積込や積み下ろしができるようになっている。

スキップマキ スキップ捲

スキップを用いて石炭や硬を地上に捲上げる方式。斜坑の場合はレールの上を捲き上げる。この方式は捲場能力が大きく高度に自動化できるが、人間の昇降や材料運搬はできない。

ストップ 「ストップ・バルブ」

圧風管(エア管)散水管などの停止弁のこと。

ストライキ

①罷業、業務を罷めること、仕事をせぬこ

と。②地層、炭層、鉱脈、断層などの「走向」。図23走向参照。

ストレーナー

吸水管の先端についている。

俗称「蜂の巣」。

スパイキ (犬釘)

レールを固定させるために枕木に打つ釘のこと。

スライシングハライ

スライシング払

厚い炭層を二段採掘。

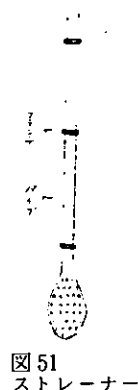


図51
ストレーナー

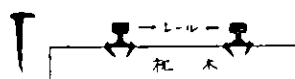


図52 スパイキ

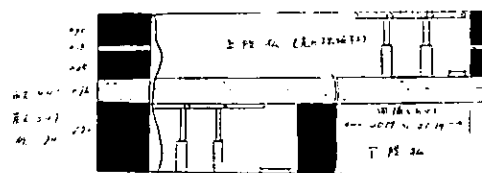


図53 スライシングハライ

スラセ 斜坑捲揚げ卸の場合は運転坑道の曲線部にレール並びに行燈車(あんどん車)よりなる装置を設置して炭車の運行を滑らかにし、行燈車と行燈車の間にロープが挟み込まないように厚めの板で囲う。総てこのような装置を「すらせ」という。

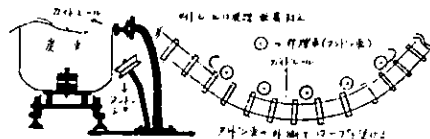


図54 スラセ

スリッパ

軌道の枕木のこと。

スンツナ 寸綱

仕繰員が坑内の粹入を施行する際に坑木の寸法を測る綱のこと。

セイショクエン 青色焰

検定燈をメタンガスのある所へ持ってゆくとガスが燃えて青色の焰が出る。これを青色焰という。焰の長さでガス量を測定する。

図37検定燈参照

セイダンソウ 正断層

断層の状態により正断層、逆断層、小さな断層をガックリに類別している。

セキタンコウギョウ

ゴウリカリンジソチホウ
石炭鉱業合理化臨時措置法

不況による石炭鉱業の混乱と高炭価是正を主な目的として、昭和30年8月に発布された。長期にわたり合理化基本計画によって、必要な資金の確保、非効率炭鉱の買い上げ、閉鎖、坑口の開設制限、石炭鉱業審議会の設置などが定めてある。

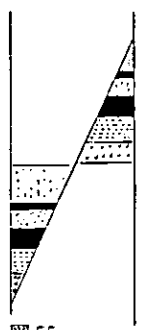


図55 セイダシソウ

セキタンシクミホウ 石炭仕組法

天保八年福岡藩で作った石炭に関する成文法規。石炭の採掘、販売、運送、賃金、価格など、石炭業務一切について規定したもので、国内における石炭法規の最初であろう。

セキニン 責任

長壁式採において、鉱員の中から技術、能力、体力、面倒見に秀でた者で切羽全体のリードをする人。

セツウ 切頭

孔削用の金鋤。

セツリ 節理

石炭や岩石の石目。

セリワク 迫り枠

四本の坑木を用いて作る坑道枠の一種で、主に著しき急傾斜（切上り、切下り）などの個所に用いる「四つ枠」ともいう。

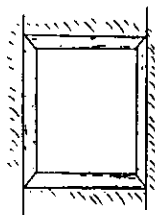


図56 セリワク

センセキ 燧石

炭層中またはその附近に火成岩が進入し、その高熱により地下の石炭が自然に蒸焼された「天然のコークス」で、燃えにくいですが火が附着すると、パチパチとはしるので「ハシリ」「オコリ」ともいう。

センシンサッコウ 先進穿孔

坑道を掘進する場合、前方にガスまたは水溜などが存在するおそれのあるとき、これを承知し災害を未然に防止するため、長鑿で長孔を穿ち、その有無を調べること。

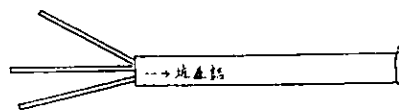


図57 センシンサッコウ

センタンバ 選炭場（選炭機）

坑内から上がってきた原炭を手選又は水洗により、精炭と硬を選別するところ。

センタンボタ 選炭硬

選炭場で選別された硬。

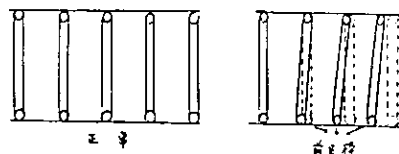


図58 ゼンツキワク

ゼンツキワク 前突枠

枠を入れた場合規定どおり正しく立っておらず、真上、横から見て足や梁が同一平面でないものをいう。規格的に足や梁を廻す、廻し枠と意味が異なる。

センテイコウク 選定鉱区

石炭資源の合理的な開発を行うために諸方に介在する小鉱区を政府の力で合併し、適当な大鉱区にしたもので、これらの鉱区は有力な業者に許可された。筑豊5郡に34選定鉱区を設定し、明治24年に発表決定する。

センメツ 尖滅 炭層の厚さが段々薄くなり最後に消滅すること。



図59 センメツ

ソウコウ 走向

地層、炭層、鉱脈、断層などと水平面に交った方向。「ストライキ」に同じで、同項参照。図23偽傾斜参照。

ソウチャクショ 装着所

発破係員が爆薬に雷管を装着する場所。天井崩落などなく、また電気、ケーブルから離して厚い板で囲った場所。

ソウバライ 総払

坑道の両側に炭柱を残して坑道保持をなす方法に対し、全部採掘し、採掘跡に硬充填をする方法を「総払」という。硬充填は重

圧緩和に役立つ。

ソエサキ 添先

先山の補助作業をするもので、先山が欠勤の場合先山としての任を負う。

ソエノビ 添延

坑道掘進の際、通気その他必要上、本坑道に沿い、平行に今一つの坑道を掘進すること。

ソエバシラ 添柱

折れた柱の横に応急処置として打つ柱のこと。図 60 参照

ソエワク 添枠（間枠）

坑道に荷（重圧）がきて、直ちに本枠に入れ替る仕様ができない時に、不良枠の横に枠を入れて補強することをいう。図 60 参照

ソギバシラ 削柱

柱の下つまり末口（末口参照）を削いで柱に可縮性を与えたもので、天盤の沈下に随って尖端が沈むようになっている。図 60

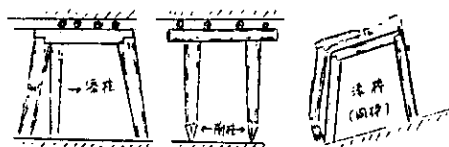


図 60 ソエバシラ・ソギバシラ・ソエワク

ソコウケン 租鉱権

他人が持っている鉱業権を借用してその鉱物を採掘する権利。相互の契約と通産局長の許可により成立する。

ソデツミ 袖積

高落個所に枠を入れる時、枠の真上に空木積をする。この空木積に側方から空木を積み添えることを袖積いう。



図 61 ソデツミ

タイキャクシキハライ

退却式払

最初に曲片掘進をして、奥に払面をつくり、戻り

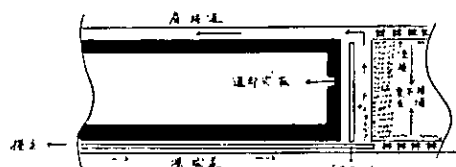


図 62 タイキャクシキハライ

に向って採掘する方法。

ダイクゴヤ 大工小屋

大工さんの控え所で周囲には軌道施設器材が蓄積されている。

ダイシャ 台車

坑内へ材料を運搬する時、炭車に入れることのできない坑木類など長い物の積込に使用する。



写真 ダイシャ

ダイナマイト

ニトログリセリン 75 を珪藻土 25 に含ませて造った爆薬。1886 年スウェーデンのノーベルが発明したものである。

タカオチ 高落ち

坑道または切羽など坑内の天盤が大きく崩壊し落下すること。何メートル以上なら高落ちという制限はない。2メートル程度は高落ちとは言わない。高落ちには時に 20 メートル以上のものもある。高落ちした時は坑木を積上げて空木（図 20 参照）積で天井の落下口を支える。このような高落個所の天井にはメタンガスが集積するので、保安係員は高落のないよう常に巡回し自前に察知し、添枠などの補強しなければならない。図 42 参照

タカピンキリ 高ピン切り

捲立などで炭車を流し込むとき、規定のピンを抜く場所より上部位置で抜く。ピンを抜くことを「切る」という。

タキイシ 焚石

石炭のことで「焚石会所作法書」天保 8 年（1837 年）に公布されている。

タケヤソウ 竹谷層

筑豊炭田における夾炭層の一部の名称。筑豊の夾炭層は下部から大焼層、三尺五尺（本層群）、竹谷、上石の四層類に分けられている。

タスキ 櫛

車道の交叉点、車道を鉄板に溶接したもの。図 63 の中央部分がタスキ

タチマエ 立前

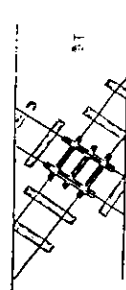


図 63 タスキ

梓の立具合のこと。図 69 参照

タチミツ 立水

坑内溜水の増減は湛水の垂直の深さによって測る。これを「立水何センチ」という。また増水、減水を下盤の傾斜に沿って測る場合は「這い水何センチ」という。図 83 這水参照。

タテレコウドウ 立入坑道（盾入坑道）

炭層、鉍脈などの走向に急角度に掘進した坑道。

タテコウ 立坑（竪坑）

地下深部の炭層の開発を目的とする。井戸のように垂直な坑道。急傾斜の斜坑を「斜め竪坑」という。垂直なものと区別している。使用目的によっては「鉍石捲揚竪坑」「通気竪坑」「材料運搬竪坑」などに区別することがある。

タテツボ 立坪

炭鉍または鉍山の坑内、外を連絡する垂直な坑道「竪坑」に対する昔の名称。

タナカケシクリ 棚掛仕繰

高い切上げ作業をする時、普通の足場では低く、切取った硬を直接坑道に落とせば炭車の出入りに妨げる。これを避けるため、棚掛を作り、切取った硬を棚の上に一時貯え、炭車等の通行の都合を見て短時間にこの硬を函に積込む仕繰作業の方法。

タヌキバシラ 狸柱

逆木のことで、中小炭鉍では幹元が下で末口が上のことで、狸柱といって大変不吉とって嫌われていた。図 40 参照。

タヌキボリ 狸掘

原始的な採掘方法。電機、機械のない時代に山腹に鶴嘴で小さな坑道を掘って採掘する。

ダルマ 達磨（チップラー） 転車機。

石炭や硬の入った函を回転させて、積載物の荷卸する装置。

タレカブル

貯炭場で積込み作業中に、炭抜口が坑木や硬が挟まり函に流れ込んで、函の外、つまり坑道に石炭が溢れ出たことを意味する。

タンコウ 炭鉍

石炭を採掘し処理する場所。

タンコウ 採鉍

各種の金属または非金属鉍床、炭層、石油鉍床など探し求めること。鉍脈があれば経済的に経営できるか否かを調査することという。

タンコウバクヤク 炭鉍爆薬

石炭鉍坑内に使用される爆薬、硝安ダイナマイトが最も多く。岩石坑道掘進、水の湧出の多い坑道掘進には「桜印」「梅印ダイナマイト」等が使用されるときもある。

タンザン 炭山

炭坑のことを略して「ヤマ」という。

タンシャ 炭車

石炭を積込む函で木製と鉄製があった。積載量は、0.5 トン、1 トン、2 トン、3 トン、5 トンあり各会社経営炭鉍により異っている。



写真 タンシャ

タンジン 炭じん

石炭の粉末。浮遊しているものを浮遊炭じん、堆積しているものを堆積炭じんという。

タンジンバクハツ 炭じん爆発

炭じんに漏電のスパーク、発破の爆焰、その他の原因により引火して爆発する。炭鉍災害で最も大きな事故の一つである。

ダンソウ 断層

地層が横切る割れ目に沿って、そのうちの一方が滑って互いに食違いができたもので、断層の滑り面の上盤が滑り落ちたものが「正断層」。に対し上盤が上方に押し上げられたのが「逆断層」という。また「上り断層」「落込み断層」等がある。

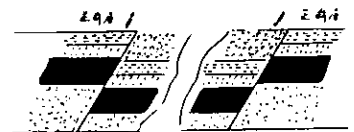


図 64 ダンソウ

ダンソウノアシ 断層の足

断層が出はじめのところをいう。

タンチュウシキサイタンホウ 炭柱式採炭法

残柱式採炭法に対する古い呼び方。残柱採炭法を参照。

タンチュウズ 炭柱図

炭層の状況を図で示したもの。

タンデン 炭田

炭層が多くあり、石炭の産出量の多い地域。
筑豊炭田、唐津炭田などがある。

タンバツ 単発

発破作業で1本づつは単発。2本以上を同時発破する時は「斉発」「連発」という。

タンベキ 炭壁

坑道の両側または切羽に面した石炭を炭壁という。

タンビョウ 炭標

鉄道貨車に石炭を積込み、発送する時貨車に取付ける銘柄標のこと。

タンリ 炭理

石炭にある炭目。板目、桎目、縮緬などがある。

チェイン・コンベヤ (チェンコンベヤ)

石炭運搬機の一つでトラフの中にチェインが通り、チェインによって石炭が運搬される。チェンはチェインの略称。

チェイン・ブロック (チェンブロック)

重いものを吊り上げたり、引張ったりする時に用いる機械。ブロックは滑車のこと。
チェン・ブロックは
チェイン・ブロック
の略称。



図65 チカラガネ

チカラガネ 力金

木製炭車の両側に、
補強してある山形の
鉄板のこと、図65。

チクラ

有煙炭と無煙の中間の石炭で品質はもろくて、粉炭を固めたようで、火に燃やすと直ぐに灰になるので他の石炭と混合して燃やすと逆に火力を圧する。田川地方の俗称で嘉穂地方では「傾城」と同じである。

チジミクラ 縮枕

可縮性をあたえるために使用する木片。アーチ枠の足元を乗せる時に使用する。図33参照。

チップラー

ダルマと同じ。
ダルマ参照。

チドリワク 千鳥枠

枠入れの一種。

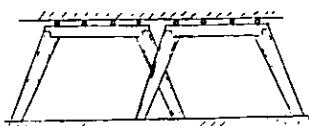


図66 チドリワク

枠を交互に入れる。

チネツ 地熱

地下深部に下がるにつれて次第に温度が上昇する。地下温度の上昇は「地熱」に起因する。地熱温度は各地により、バラつきがある。国内の平均33メートルで摂氏1度の上昇といわれている。

チュウオウシキツウキ 中央式通気

入排気坑道が平行して中央に通り、両側に片盤坑道がある。通気は中央入気坑道より左右の片盤に分かれ、排気は左右の片盤より集まって、中央排気坑道から坑外に排気する。入排気坑道の坑口入口は30~50メートルと接近している。

チュウシンセン 中心線

坑道掘進の場合、その方向と中心を示す白線で、それを基準に掘進していく。

チュウダンポンプザ 中段ポンプ座

斜坑が600メートル以上あれば、中間にポンプ座を設置し、坑底で集水した坑内水の中継して坑外に排水する場所。

チョイウンテン ちょい運転 (少し運転)

炭車、コンベア、機械を運転する時、一寸捲く時、差す時に使う言葉。

チョウヘキホウ 長壁法

二本の平行な坑道間の長さをそのまま切羽の長さにして採掘する。20メートル以下を「短壁」。それ以上の長さを「長壁」という。この採炭には坑道を維持するために、坑道の両側を保護炭柱として残すものと、炭柱を残さず採炭する「総払」と二種類ある。

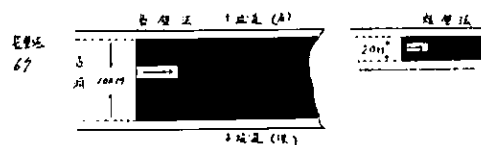


図67 チョウヘキホウ

チョクカツ 直轄 (直接員)

鉱業所雇用「鉱員」。会社採用は「社員」その他臨時、下請などがある。

チョクセツ 直接

直轄に同じ。

チョクセンハッパ 直線発破

発破する位置と点火する位置が一直線になっている発破。非常に危険性が高く禁止されている。

チョクレツケッセン 直列結線

図 34 参照。

チョタン 貯炭

石炭を一時貯えて置くこと。

チリメンタン 縮緬炭

石炭の目は普通証目か板目になっているが、炭目がはっきりせず縮緬状になっている石炭のこと。

ツウキコウ 通気孔

風を通す孔。

ツウキホウ 通気法

坑内の換気の方法。坑内に空気を廻路させる方法。

ツウキモン 通気門

坑内の通気量を加減するために用いる門。遮断門と分量門があるが、遮断門は空気を遮断する門。分量門は風量を適当に調整するため門に穴をあけて作った門。

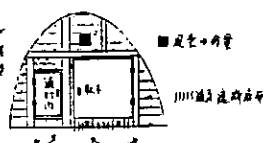


図 68 ツウキモン

ツウキリョウ 通気量

坑内の坑道を一定時間に通過する風量。これを計測するには一定面積内を 1 分間に通過する風量を測風器で測定してきめる。

ツウコウキンシ 通行禁止

採掘坑道、ガスの集積、自然発火の起っている個所、その他危険な個所には木柵を施し通行禁止の札を張る。係員の許可なく通行は許可しない。図 110 参照。

ツキノミ 突鑿

坑道掘進の場合、延先の奥に古洞があったり、溜水の恐れのある時、またガスの噴出する場合には、長い鑿を使って鑿孔する。この時に使用する鑿を「ツキノミ」という。

ツクリフダ 造り札

金札に同じ、図 19 参照。

ツナギ 繋ぎ

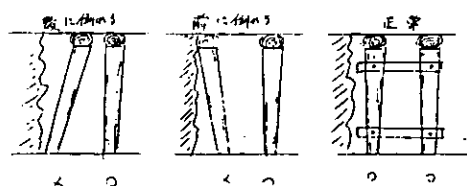


図 69 ツナギ

枠を立てる時、新しい枠が倒れないように、前に施行した枠から成木などにより釘付けの仮止すること。又カスガイの長いもので繋をする場合もある。

ツミマシ 積増し

石炭を炭車に規定以上に十分に積込んだ場合には、積増金として規定の炭価より余分の給与金ができる。これを積増金という。

ツミキ 積木

図 20 空木積参照。

ツメ 詰

坑道の一番奥。

ツメワク 詰枠

曲片や捲卸その他坑道掘進個所の最後の枠。

ツメワク 詰枠

普通坑道に枠を入れる場合は、一定の間隔で施枠するが、天井が悪かったり、降雨、湧水、重圧の激しい時は枠間を接近させて枠を入れる。普通の間隔は 90 センチ、120 センチ、150 センチで、これより狭く枠を入れる。

ツラコウタイ 面交代

作業現場で交代すること。

ツリイワ 吊岩

天盤から吊下っている松岩「硅化木」。吊下った松岩を落すのが原則であるが、これを落した為に附近が落盤のおそれがある場合は、打柱を施す。このような処置を怠った時は、吊岩の落下で重大災害の原因になる。坑内作業に従事する者は特に注意が必要。図 8 の岩を参照。

ツリバコ 吊函

捲卸等で硬積したり、切上げ仕縁をする場合に函を吊って作業をする。これを吊函という。この場合に函が降下逸走せぬように、充分安全な函止「クリップ」図 31 が必要、図 109 迎函参照。

ツリピン 吊ピン

図 35 結鎖参照。

ツルハシセンシ 鶴嘴戦士

第二次世界大戦中に、石炭増産に励む坑内労働者を鶴嘴戦士と呼称していた。

ツレオロシ 連卸

本卸と或る間隔を保って平行に掘進する卸坑道。普通本卸坑道が入気で、連卸坑道が

排気坑道になっている。図14卸詰参照。

テダイ 手代

江戸時代に、郡代、代官、奉行などの配下で、収税その他雑務に就いた小吏。「石炭仕組法」による石炭の収集、計量、販売などはこの手代によって行われていた。

テッシュウ 撤収（撤廃）

払跡の原動機、コンベヤ、チェイン、トラフ、カップ、鉄柱、古坑木等、又曲片のレール、鉄棒、パイプなど材料を取り、後方に搬送し、修理が必要な物は機械工場などで修理し、再利用をする。

テッチウ 鉄柱

主として採炭切羽に用いる。機械化以前は坑木を使用していたが、鉄で作った柱を使用するようになり、保安、安全面と何百回と再使用できる。空気鉄柱、水圧鉄柱、油圧鉄柱、移動鉄柱などがある。

テッチウカンリ 鉄柱管理

切羽全面の鉄柱、カップの管理をする。鉄柱、カップにはガス溶接で肉盛して番号が記入され、この番号を基本に現在使用中、破損し坑上げ、破損修理後坑内下げ〇〇本と毎日調査管理する者を鉄柱管理という。

テッポウノビ 鉄砲延

通気のない一本坑道延。鉄砲延は通気がなく鑿孔の粉じん、発破煙が排除されないのので、局部扇風機を取付ける。この時「車風」図32参照。扇風機の先に風管（鉄とビニールがある）を取付けて延先に風を送る。

テツメ 手填（手充填）

切羽採掘跡に「全面充填」と「部分充填」があり、いづれを問わず、採掘跡を充填するのに機械力を使用せず、手動で充填をすることをいう。

テツワク 鉄棒

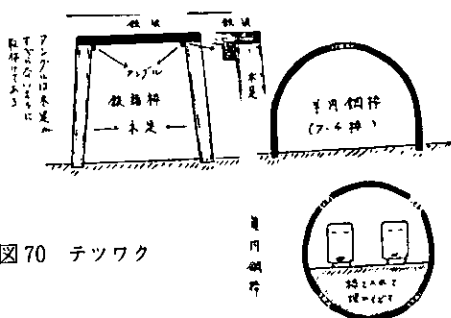


図70 テツワク

以前は坑道棒に坑木を使用していたが、昭和20年代後期より、梁に鉄材を使用し、又アーチ形に鉄材を曲げて使用するようになった。前者を「鉄諸棒」後者を「アーチ棒」というが、両方を総括して「鉄棒」ということもある。他に「ハイツマン棒」「自走棒」などがある。

デバダシクルマセン 出場出し車線

炭鉱の坑口から川岸にある川船（川舩）の積込み場までの運賃のこと。

テンカ 点火

爆発物を発破させるために導火線に火をつけること。電気発破の場合は「スイッチ」を入れる。または、ハンドルを「ヒネル」という。

デンキテンカ 電気点火

発破を行うとき電気を送電すること。

テングトリ 天狗取り

並んで物を順送りに渡して運搬すること。リレー式運搬のこと。高落個所の硬を運ぶ時に機械導入できず天狗取りで運搬する。

テンジョテンケン 天井点検

落盤災害防止のため鶴嘴のハンマーの方で天井を叩いて浮石状態を検査する。浮いた石があれば鶴嘴で落す。松岩などは鑿孔し、周囲の天井状態を見て発破して小割にして処置する。

デンバー

圧縮空気が主であるが、電気動力もある。発破用鑿孔をする時に使用する機械である。ドリルと同じ。

テンバン 天盤

坑道を掘進した時上部にある硬、石炭等はすべて天盤（天井）という。

トイシ 砥石

佐賀県唐津炭田地方では砂岩のことを砥石いう。

ドウカセン 導火線

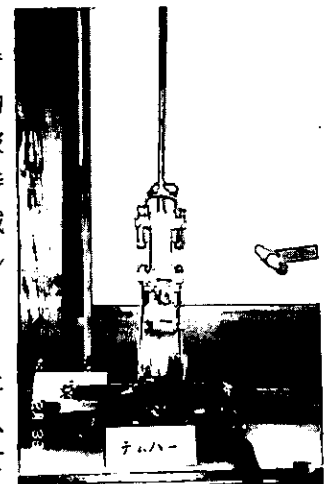


写真 デンバー

177	白色藥粉	不毒之藥	藥
178	暗色粉狀	不毒之藥	藥
179	暗色粉狀	不毒之藥	藥
180	暗色粉狀	不毒之藥	藥
181	暗色粉狀	不毒之藥	藥
182	暗色粉狀	不毒之藥	藥
183	暗色粉狀	不毒之藥	藥
184	暗色粉狀	不毒之藥	藥
185	暗色粉狀	不毒之藥	藥
186	暗色粉狀	不毒之藥	藥
187	暗色粉狀	不毒之藥	藥
188	暗色粉狀	不毒之藥	藥
189	暗色粉狀	不毒之藥	藥
190	暗色粉狀	不毒之藥	藥
191	暗色粉狀	不毒之藥	藥
192	暗色粉狀	不毒之藥	藥
193	暗色粉狀	不毒之藥	藥
194	暗色粉狀	不毒之藥	藥
195	暗色粉狀	不毒之藥	藥
196	暗色粉狀	不毒之藥	藥
197	暗色粉狀	不毒之藥	藥
198	暗色粉狀	不毒之藥	藥
199	暗色粉狀	不毒之藥	藥
200	暗色粉狀	不毒之藥	藥

トウクツ 盗掘

ドウグモン 道具物 (ベンド)

トウセキコウ 等積孔

坑内通気の抵抗の大小を表わす方法。

ドウチュウシャ 道中車

ロープの破損を防ぐため車道の中央部に取付けた円柱型の車。木製、鉄製、陶器製があり、使用個所に応じて異なる。立車、ネズミ車、行燈車（あんどん車）、天井車などがある。図54のスラセ参照。①斜坑の道中車。②③緩い曲線の従車。④スラセ^{アンドンシャ}の行燈車。⑤彎曲部底部辺り天井車。⑥捲揚ドラム近くにあるロープ誘導車等がある。

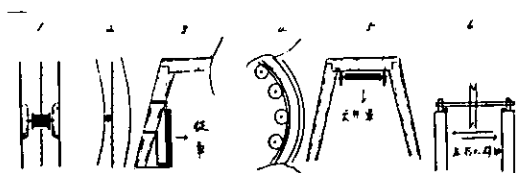


図 72 ドウチュウシャ

ドウテイ 働程

働く程度、一人の働程、一方の働程などいう。働程は「工程」に同じ。

トウナイバクハツ 燈内爆発

安全灯でガス検定をする時5%以上可燃性ガスがある個所では、安全燈内で爆発する。これを「燈内爆発」というが、この爆発で人間に危害はない。

ドウラン 胴乱

炭層が火成岩の進入によって接触変質をうけた結果、玉葱状^{タマネギ}の節理を生じたもの、楕円形または扁平形の石炭塊をなし、火成岩との接触部よりわずかに離れたところにある。

トジ 燈治

粗製コークス、三池地方の「ガラ」と同じ。

ドシャジュウテン 土砂充填

採掘跡を土砂で充填すること。パイプを通して土砂を水と共に払跡に流し込んで充填する水力充填、水力によらない圧縮空気を利用する乾式充填がある。

トビイシ 飛石

発破の時や鶴嘴で岩石、石炭を採掘する時に、岩石や石炭の破片が強く飛散する。大きい松岩を鉄槌（ボンコシ）で叩いて小割する時など防護用眼鏡が必要。このような飛石で眼を負傷した人数知れず。

トヒグチ 戸桶口

払面のトラフの終端で石炭を炭車に積込む場所。



写真 トヒグチ

ドベビキ

石炭の割れ目に、粘土や酸化鉄が入りこんだもの。

ドマグレ

炭車の車輪がレールから外れることをドマ
グレという。また常識を逸した人をドマ
グレ者という。

トメキノハナ 留木の花 (枯木の花)

坑木につく白色綿状の菌類。排気坑道の通気の悪い古洞などに多く発生し、坑道一面が綿菓子のようになる。

トモコ 友子

旧慣^{ヨクカン}による一定の形式に従い、多数の同業者が立合いで取立てを受けた鉾員。友子は昔からの習慣により相互の災害扶助の義務があった。講と同じ。

トモコセイド 友子制度

藩政時代に友子に取立てられた鉾員の間に自治的に行われた共済制度で、一種の自治的共済組合。

トラフ

切羽面に平行に敷設しゲートから曲片の石炭積込の戸樋口まで運搬する鉄板製の戸樋口。トラフは種類により形が異なる。

トラフコウドウ トラフ坑道

切羽の採掘進行と共にコンベアのトラフを移転させる。このトラフを敷設する坑道を「トラフ坑道」という。

ドリル

鑿岩機のこと。デムバーに同じ。

ドリル・マン 鑿孔員

ドリルで鑿孔専門の作業をする人。

トロンメル

精炭を撰分する時に使用する有孔円筒形の金板。

ドン

石炭層中に貫入して石炭に熱変質を与える火成岩に対する九州炭田の俗称。

トンボ 蜻蛉

打柱の一種で、天盤に60センチ～1メートルの横木を密着させ、その下に打つ柱。横木の無いものは「坊主柱」という。

トンボ

外来語の訛で炭車の転覆、脱線したことをトンボという。

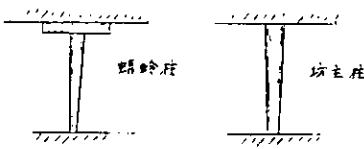


図73 トンボ

外来語タンブル。

ナイサオ 内棹

坑内運搬員（炭車を配車する人）。

ナイダイ 内大

坑内大工のことで、軌道の設置、撤廃等全般的作業をする人。

ナイデン 内電

坑内電工のことで、モーター類、電線、ケーブルの布設、修理をする人。

ナカコウドウ 中坑道

長壁掘の場合に曲片と肩坑道の中間の古洞

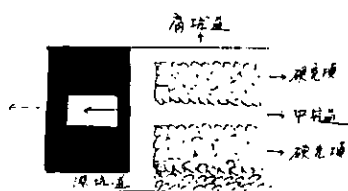


図74 ナカコウドウ

に坑道を保持することがある。この坑道を「中坑道」という。

ナガノミ 長鑿

普通坑道掘進には1.5メートルの鑿を使用する。使用目的によっては2.5メートル位の長い鑿を使用する。これを「長鑿」という。

ナガヨコイ 長憩

長い休日。土曜日の甲方（一番方）を勤め、月曜日の丙方（三番方）までの56時間の長憩のことをいう。

ナグレル

仕事が充分にできないことをいう。電気機器の故障、停電、捲の故障等で、採炭、掘進に^{ハツマツリ}廻が悪くて作業ができないことを「ナグレタ」という。

ナナメオロシ 斜め卸し

本線（本卸）から斜めの深部に向って掘った坑道を斜め卸という。

ナマ 生

素手のこと。脱線函を直す時、重量物を移動させる時、成木や梃子を使用せずに手でやる時「生」でやるという。

ナマイシ 生炭

坑内から上がった石炭のこと。筑前地方の俗称。

ナマズミ 生炭

これは筑豊地方で、坑内から上がった石炭のことを生炭という俗称。

ナルギ 成木

坑内で枠入作業をする時天井、壁を囲う時使用する小さい坑木。成木には1.2メートル、1.5メートルとある。

ナルサシカエ 成差替

鉄アーチ枠はしっかりしているが成木が損傷しているので天井、壁の成木を差替ることで、全面に差替る時と部分的に差替る時もある。

ニカイワク 二階枠

天井が非常に高い所で距離にして4.5メートルであれば角材を利用して空木もできるが、長くなれば二階枠を施行する。二段枠



図75 ナナメオロシ

ともいう。

ニガクル 荷が来る

坑内の天盤に重圧がかかること。

ニゴウタン 二号炭

精選した石炭を一号炭、その残りの悪い石炭を二号炭という。

ニジュウモン 二重門

本卸と連卸の間の目抜（災害時避難坑道）などで入気、排気の空気を遮断するために二つ以上の設置が義務づけられている。三つあれば三重門という。

ニジュウワク 二重枠

本枠を補強するために、本枠の内側に更に枠を入れること。

ニツミ 荷積（積荷）

炭車に石炭を積んだ量。山盛に積めば「荷積がいい」「積荷がよか」という。

ニナイフ 荷合夫

採炭後山で三池炭鉱の古い呼称の「ニナイフ」という。

ニナワセワク 荷合枠

丸太または二つ割を天井にあて、二本の坑木でこれを支え、鳥居形に立て、天井を支える。

ニバンカタ 二番方（乙方）

二交代制で作業をする場合、朝から夕方まで勤める人を一番方（甲方）、夕方から深夜まで勤める人を二番方（乙方）という。三交代制では二番方の後に勤める人を三番方（丙方）という。

ニマイジロ 二枚白

筑豊炭田では三尺五尺層（本層）中の上三尺層の天井硬をいう。

ニウウキ 入気

坑口から流れ込む空気で、本卸より水平坑道、卸坑道、曲片、昇坑道などを通過して、連卸に排気が集約され坑外に排除される。

ニウウキコウドウ 入気坑道

入気が通る全般の坑道のこと。

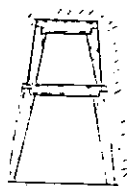


図 76
ニカイワク



図 77
ニジュウモン

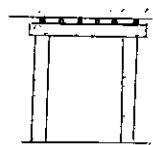


図 78
ニナワセワク

ニンギョウワク 人形枠

枠足を二本のうち一本だけ、または二本とも足元を本盤につけず岩の上や、石炭の上に立てた枠のことをいう。

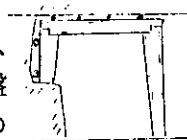


図 79
ニンギョウワク

ヌケアナ 抜け穴

発破の際岩壁や炭壁が薄くて、古洞（旧坑道）に抜けることがある。これを「抜け穴」という。

ヌビ 延び

延の訛りで「延先」が「ぬび先」になっている。

ネコ 猫

鑿岩機に対する俗称。

ネジケッチン ねじ結鎖

炭車等の結鎖がねじれて連結したもので、ねじれば強度が弱く、切断して炭車が逸走し重大事故の危険性がある。

ネズミグルマ 鼠車

図 54、72 参照。

ネブレル 鋭利な先が摩滅する。鶴嘴の穂先、鑿の歯、ヨウキ（斧）、鋸の歯が「ねぶれた」。

ネンリョウヒ 燃料比

石炭の工業分析による純炭と固定炭素分及揮発分を百分比で表わしたもの。

$$\text{燃料比} = \frac{\text{固定炭素}}{100 - \text{固定炭素}} = \frac{\text{固定炭素}}{\text{揮発分}}$$

ノウリツ 能率

採炭員一人当りの炭出量、全従業員一人当り出炭量。掘進、仕繰の工程などで、一定時間で出来上る仕事量のこと。

ノソン

仕事をするため坑内に入坑したが、自分の道具が紛失、盗難にあったり、気分がすぐれなかったり、仲間といざこざがあったりして、作業をせず昇坑する。外にもいろいろ縁起をかついでノソンする人がある。

ノヅル

坑内で散水する時、エア（圧風）管の末端に取付けて、水や空気を勢いよく噴射する時、出口を小さくしてある。水力採炭で水の力で石炭を切る装置でモニターノズル（ホースの筒口径 18～22mm、水圧 50～140

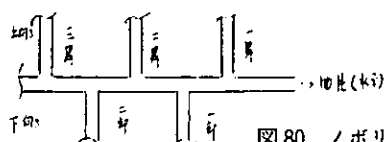


図80 ノボリコウドウ

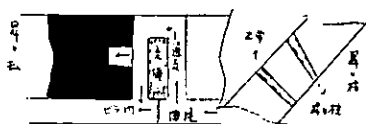


図81 ノボリバライ・ノボリバシラ

kg/cm²が取付けてある。ちなみに末口 20 センチの松の坑木を粉碎するのに 5 秒とは かからない。

ノビサキ 延先

現在掘進している坑道の最先端のこと。

ノボリ 昇り

曲片より肩（上）に向った方向の昇り坑道 をいう。

ノボリコウドウ 昇坑道

坑道の下部から上向に昇ってる坑道を昇り 坑道という。その反対に上部から下向を卸 し坑道という。

ノボリバシラ 昇柱

傾斜面で枠を入れたり、打柱を打った時に、 正しく天盤と直角にならず昇向きになって いる柱のことをいう。

ノボリバライ 昇り払

曲片から上向に昇坑道を取り（長さ10メー トル程度）採掘する。これを昇り払という。

ノリマワシ 乗廻し

（運搬員、配函係）斜坑運搬に於いて函を、 配函したり、実函（石炭、硬）を捲き上げ たりする運搬員のことをいう。

ハイキ 排気

坑内、内部の空気を排除する。坑内から排 出される空気のこと。

ハイキコウドウ 排気坑道

坑内の空気を流通し汚れた空気を排出させ るために作った坑道。坑内に新鮮な空気を入 れる坑道を入気坑道という。

バイスケ 機械化する前の坑内にて、硬や石炭を 荷担棒で前後に荷 担って、運搬する 道具で竹で編んだ 「ザル」の一種。水 の中にある物を運

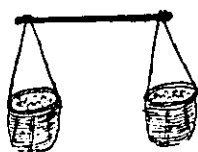


図82 バイスケ

搬する時に、竹で編んだ目（透間）より水 が切れて便利。

パイプ

エア、水、ガス、蒸気等を輸送する鉄管、 ビニール管をいう。坑内ではエア管、押上 管、排水管、散水管等をいう。パイプの直 径は大中小と利用に応じて違っている。

ハイブン 灰分

石炭中に含まれている灰の量。

パイブレンチ

パイプの継目のネジをはずしたり、継いだ りする道具のこと。

ハイミズ 這水

傾斜坑道に溜まった水の増水、減水量を下 盤に沿って測った場合に「這水何センチ」 という。これに反して水深によって増減を 示すときは、「立水何センチ」という。

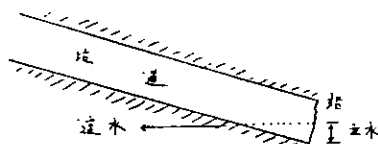


図83 ハイミズ

ハエマエ 這前

枠の立ち具合。枠足の立ち 勾配のことをいう。

ハカマコウフ はかま鉋夫

腰が据わらず同一炭鉋で永 く働かない人で次から次に 渡り歩く鉋夫のこと。

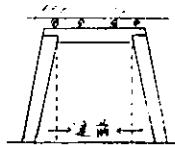


図84 ハエマエ

バクエン 爆焰

火薬類が爆発した時に生じる焰。火薬の配 合成分によって異なる。

ハクソウサイタン 薄層採炭

炭丈の低い炭層を採掘すること。20～30 センチ程度まで採掘することがある。

ハコオアソバセル 函を遊ばせる

実函、空函を一定の個所に何日も放置して おくこと。函を円滑に運用しないことをい う。

ハコオシ 函押し

捲立より曲片奥に空函を押込んだり実函を 捲立に押出したりする人。

ハコバック 箱バック

傾斜のある坑道に戸樋を施設し水を流すが、 粉炭とか硬の小さい物と一緒に流れるため

に、函バックを盤に掘り下げて作る。函バックに流れ込んだ水は下部の戸樋に流すが、集積した粉炭、硬等は時折浚える。車道の端に造る。

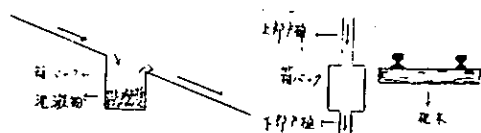


図85 函バック

ハコナグレ 函なぐれ

切羽の現場には採掘した石炭はあるが、電気、巻上機等の故障で空函がなく積込めなく、現場では石炭の採掘ができない状態のことをいう。

ハコノリ 函乗り (棹取又は運搬員)

実函、空函の捲き差しをする人。

ハコマチ 函待ち

空函に石炭を積み終って次の空函が配函されるまで待つことを意味する。

ハコモト 函元

中小炭鉱が数鉱連合して作っている友子(取立をうけた鉱員)の災害扶助事務所。

ハコモトコウサイ 函元交際

鉱員が病気等で廃疾になり、長期に亘り救済を必要とする場合、友子に数鉱が連合して共同で救済すること。

ハコマワリ 函廻

電気、巻上機等の故障もなく函の廻転が一般に、スムーズに行くこと。

ハシリ 燐石

火成岩の迸入のため熱で変質をうけた石炭の一種。火に燃やすと爆発するので、筑豊では「オコリ」という。地方により「ぼんしう」「まで」「もうがんこ」と呼ばれている。

ハシリコミ 走り込み

馬の背ともいう。図12馬の背参照。

ハシラビキ 柱引

不用になった柱を抜くこと。「抜柱」ともいう。

ハダカコウドウ 裸坑道

枠入がしていない坑道。周囲が固い岩盤で、落盤の心配がない坑道。別名、無枠坑道ともいう。

ハダカビ 裸火

覆いのない燈火、安全灯ではない。カンテラはすべて裸火である。

ハダシニナル 裸足になる

実函、空函が脱線すること。(ドマグレ)ともいう。

ハチウツ 爆薬を発破させたが効果のないこと。

バチギ ばち木

ハネナルをする時にその成木の手前、又は中に入れて支える成木のこと。

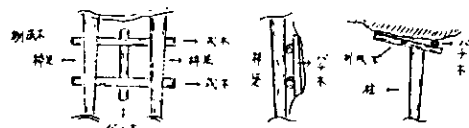


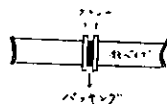
図86 バチギ

ハチノス 蜂の巣

ストレーナー、図51参照。

バックング

パイプを接続する時に(漏水又は漏風防止のため)パイプとパイプの間に挟む物。別名ワッシャ 図87 バックングともいう。



バック 普通は飲料水を溜める所をいう。坑内では水を溜める所をバックというが木製で箱を造って水を溜める場合箱バックという。

バッティラ 機械化以前の

炭鉱では石炭を積んで曳き出す平たい竹製の籠をいう。



ハッパ 発破

爆薬、ダイナマイトを点火すること。

ハッパカタ 発破方(発破係員)

発破をする人。

ハッパコウ 発破孔

写真 バッティラ

発破を行うために鑿岩機によって穿った孔のこと。機械化前は「手繰孔」でノミ、ヤットウでこつこつ叩いていた。

ハッパセン 発破線

ばくやく、ダイナマイトをかける時に使用する電線。二本の被覆した電線を綱のように、前方の端に爆薬の脚線に接続し、手前を電池に接続して、発破器専用のハンドルを廻転させて送電する。岩石坑道で30

メートル以上。長壁切羽で15メートル以上の発破線を使用する。

ハナバコ はな函

規定函数の一番コース元の函のこと。

ハネナル はね成木

ばち木の項、図 86 参照。

パネルシステム

坑内を数区域に分けて採掘する方法。



写真 ハッパセン



図 88 ハナバコ



写真 ハネナル

ハライ 払い

長壁法採炭の切羽は全面同時に採炭するのでこのようにいう。

ハライアト 払跡

切羽の採掘跡のことで古洞ともいう。

ハリダシ 張り出し

坑道を掘進する場合に、通気をとるために坑道の中央部に板壁を造って入気、排気することを張り出しという。局部扇風機の風管が導入される以前のもの。

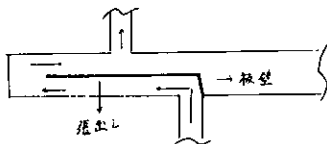


図 89 ハリダシ

ハリ 梁

枠の天井を支える部分のこと。

バレル ばれる

天井が崩落すること。

バン 盤

坑道、切羽の面より上部にあるものを天盤。面の下部にあるものを下盤という。

バンウチ 盤打

下盤が膨れ上がった時や、車道を全面的に下げる時に行う作業で、時には採炭掘進員から臨時募集して行うが、車道修正は必ず坑内大工がする。

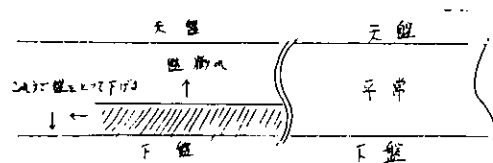


図 90 バンウチ

ハンコウサイ 半交際

旧慣による「友子」の相互扶助義務は、友子組合に加入を許可されるのは坑内員だけで、坑外員は除外されていた。しかし取立を受けない坑員（友子を認められない坑員及雑役者）に対しても、ある範囲内で救済を与えることが少なくなかった。これを「半交際」という。

ハンド・ランプ

手下げの坑内ランプ。昭和 32 年以降も技術開発の先端をいく、西ドイツでもハンド・ランプであったが、西ドイツ派遣の日本炭鉱マンは、解雇を覚悟でヘッド・ランプ（キャップ・ランプ）に切替え交渉に成功し、ドイツ人労働者も、それにならってハンド・ランプからヘッド・ランプに移行する。

ハンバ 飯場

めし場のことで合宿ともいう。

ハンマー・ピック

採掘機的一种で、圧風（エア）の力で鑿をたたいて、石炭や岩石を採掘する。コール・ピック参照。

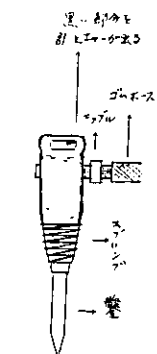


図 91 ハンマー・ピック

バンブクレ 盤膨れ

湿気を多く含んだり、両側の重圧のために、坑道の下盤が膨れあがることを盤膨れという。図 90 盤打参照。

ハンムエンタン 半無煙炭

燃料 比 7~12 の不粘結性の石炭。燃えるときに光輝と煤煙すくなく、短い焰を出す。純炭中の揮発成分は 9~13%。無煙炭参照。

ハンレキセイタン 半瀝青炭

燃料比4~7の石炭。粘結性のものと不粘結性のものがある。燃える時は短い光輝のある焰を出す。純炭中の不燃物は14~19%である。

ヒアカシ ひあかし

カンテラを使用していた時代に、自分の好む作業のしやすい個所に、吊るすことができるように、カンテラの頭部につけた鉤を、枠足などに打ち込んで使用していた。

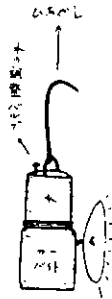


図 92
ヒアカシ

ヒエンダイナマイト

微焰ダイナマイト

ガスや炭じんに対する安全性を高めるために、硼砂（硼酸ナトリウムの白い結晶）、食塩などの消焰剤を加えたダイナマイト。

ヒカエバシラ 控柱

急傾斜などで木積などした時、それが崩れないように打つ支え柱。

ヒガエリマブ 日帰り間歩

地表からあまり深くない炭層を水平または掘下りで、幼稚な採掘方法で、少し採掘しては別の場所を採掘し、後は捨てる意味で「日帰り」という。別名間歩ともいう。

ヒケシズミ 火消炭

煽石と同じ。燃えている火の中に上から投げ入れたら、火力がにわかに消滅するので、このように呼んでいる。筑豊炭田では俗称「不燃炭」という。

ヒザラ 火皿

藩政時代に坑内の照明に使用した陶器製の皿。これに種油をいれて、燈芯を浸して点火した。

ビス

雷管のこと。図 93。

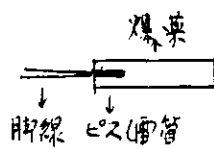


図 93 ビス

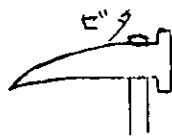


図 94 ビタ

ビタ

坑内外の保線大工が使用する鶴嘴のようなもので、これで枕木を起こしたり、取替え

たりする。図 94。

ビチューム 比胃母

液体をなす石油、粘体をなすタール、固体をなすアスファルトなど、あらゆる天然炭化水素に対する一般的な名称。近年は瀝青というものが多い。

ヒテイコウ 比抵抗

坑内通気の抵抗を表わす方法。

ヒトカタ 一方

炭鉱など交替制作業における単位作業時間。各鉱山、炭坑等によって一定していないが、原則として入坑から、昇坑まで8時間である。

ビトーカン ピトー管

風速測定器。気圧差により測定する。

ヒバン 火番

坑内喫煙所の番人。安全灯の消えたものを点火したり、煙草を吸引させていたが昭和27、8年頃から、何処の炭坑も火番は廃止された。

ヒバンショ 火番所

明治から大正時代にあった坑内喫煙室番人の詰所。

ビフン 微粉

石炭の微細な粉末。かつての遠賀川は微粉炭が流れ、黒い川と呼んでいた。

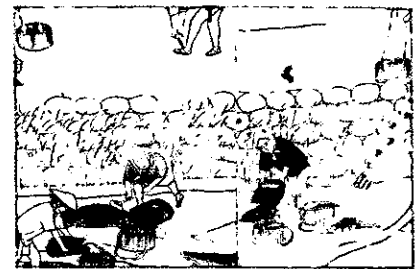


写真 ビフン

ヒョウジュンサギョウリョウ 標準作業量

坑内員が一定の作業時間にできる作業量の標準のこと。

ビラ

ビラ門等に使用する英帆布のこと。

ピラー

坑内のメタン・ガスを検定する一種の安全灯。ピラー安全灯ともいう。柱もピラー。

ヒラタブネ 舳舟

平太舟、平駄舟、平田舟などと書くことが

ある。昔筑豊鉄道が施設されるまで、筑豊の遠賀川で物資の輸送に使用した底の浅い川舟。大小二種の種類があり、大は長さ7.2メートル。小は5.4メートルを基準とし、大は6トン内外を積んで、下流の水の深い場所で使用される。小は3トン積で、上流で使用されていた。

ビラモン ビラ門

坑内通気に使用する門の一種で、板の代用で取替え英帆布を使用した門のことをビラ門という。

ヒロメ 拡め

図27-2切り拡め参照。

ヒロメワク 拡め枠

捲立に枠を入れる場合、その捲立の大きさによって複線捲立になれば九尺（2.7メートル）十尺（3メートル）十一尺（3.2メートル）十二尺（3.3メートル）と段々に広めて、屈枠を入れたり、差梁をししたりすることを「ひろめ枠」という。

ピン

函や台車の鎖に連結する時に使用する止め金具。図35結鎖参照。

ヒンズ 賓数 雑役員。

三池炭坑における明治初年の呼称。

ファツ 負圧

坑内の空気圧を大気圧より下げた場合の気圧の差をいう。

フウカン 風管

風を送る管、木製、鉄製、ビニール製などがあった。

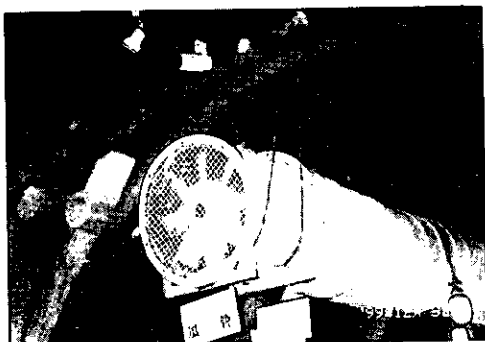


写真 フウカン

フウカンツウキ 風管通気

気流の誘導に風管を使用するもので、通気は主要扇風機の通風力で行われる。局部扇風機は全く使用しない。

フウキョウ 風橋

入気坑道と排気坑道と交叉した所では、木板か鉄板で上下に立体交叉させ、風の通る坑道を作る。これを風橋という。岩盤下に設置された風橋を自然風橋という。

フウソッキ 風測器

気流や風速を測定する機械。

フウドウ 風道

坑内における通気坑道のことで、普通払や曲片等の排気坑道のことをいう。

フカコウリョク 不可抗力

人間の力ではどうすることも出来ないこと。地震や雷、台風など変災事故の場合をいう。発破事故は不可抗力ではない。

フキコミホウ 吹き込法

風を奥に吹き込むように扇風機を据付ける方法と、逆に扇風機で吸引し坑外に排出する方法がある。

フキワケ 吹き分け

通気が両方からきて衝突するよ



うな個所に図95のように、吹き分を造り通気の

図95 フキワケ

流れを円滑にして抵抗を減らす。

フケ 深

傾斜している坑道や炭層の低い部分を深という。逆に高い方を「肩」という。

フタサキ 二先

一先は二人一組である。四人編成で二先である。

フナソコ 船底

坑内捲立の一番低いところをいう。

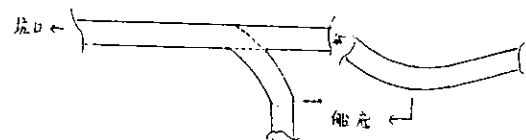


図96 フナソコ

フネンセキ 不燃石

変質した無焰炭。天草で最初の呼称。火に投げ入れても焰を出さないために、このような名がつく。燐石と同じ。

フネンタン 不燃炭

不燃石と同じ。

フハツマイト 不発マイト

ピス（雷管）不良のため爆発しないマイトのこと。発破係員が不発マイトを爆発したものと誤認すれば、重大災害を発生させる。不発マイトは必ず、残留マイトの標示をして、作業員に指示しながら残留不発マイトを撤去させる。

ブンジュウテン 部分充填

掘面を充填する場合、全面的に充填せずに、肩、深、中と部分的充填したもの。

フルト 古洞

以前掘進や採掘した切羽のことで、以前に掘進した坑道でも現在活用している坑道は古洞とはいわない。

フルトサイクツ 古洞採掘

古洞を天井又は盤にしたり、長壁採掘法切羽の一部に古洞を含んだ採掘方法。

フルトワタリ 古洞渡り

古洞を仕繰って坑道又は井を作ること。

ブルモーター 自動酸素吸入器。

「蘇生器」。

ブレーキ 制動機

坑内巻、電車、リール・ロコ電車等の制動機をいう。

ブンリュウ 分流

通気の流れを分けること。特に坑内気流を分けることをいう。

ブンリュウモン 分流門

風量を調整するためにつくる門。その門扉に一定の大きさの口を開いて、風量の加減をする。図 68 通気門参照。

ヘイレツケッセン 並列結線

図 34 結線参照。

ページ

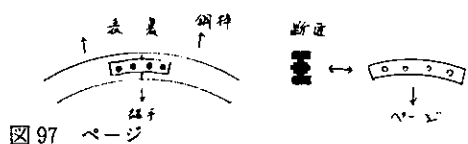


図 97 ページ

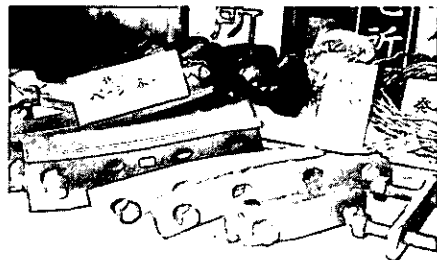


写真 ページ

車道、鋼棒などの継目をつなぐ時に、鋼棒の表、裏にページをあてボルトで締めつける。

ベンド

パイプをつなぐ時に、彎曲部分に使用する。90度、60度と其の他、各種類のものがある。別名ドグモンという。

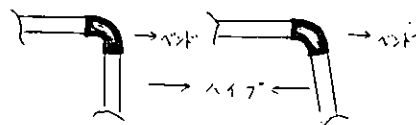


図 98 ベンド

ホアンタンチュウ

地表構造物（官庁舎、学校、鉄道）等の保存、河川、池、堤の陥没による被害防止。坑内では、古洞よりの浸水、ガス突出、主要坑道の維持のため、採掘せずに保存して残しておくことを、保安炭柱という。別名安全炭柱ともいう。

ホイストマキ ホイスト巻

小型巻で、20HP、50HP があり、20HP の小型巻が坑内では多く使用していた。

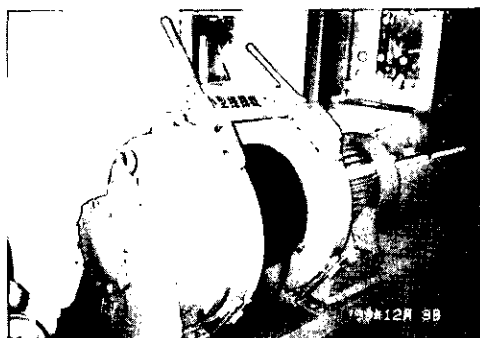


写真 ホイストマキ

ホイルベース

函又は台車の前車輪と後車輪の距離。

ボウサイ 防災

災害を防止すること。防災運動、防災週間、防災月間、防災訓練などがある。

ボウズバシラ 坊主柱

梁、成木を使用せず単独に打った柱。



図 99
ボウズバシラ



図 100
ボウズワク

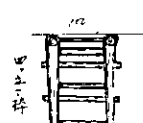


図 101
ヨツタテワク

ボウズワク 坊主杵

前後に杵がなく、一杵だけ独立して立てた杵で、事実好ましくない杵。二つ並べて立てた杵は四つ立杵という。

ボガン 母岩

鉱石を含んでいる岩石。

ポケット

貯蔵所のことで、石炭の貯蔵所を貯炭ポケットという。図105 ホッパー 参照。

ホサキ 穂先 鶴嘴の先につける「つる」の一部で、これを除いたものを「カブタン」というが、総称してこれを改良鶴。穂先の取替をしないのが両頭鶴という。

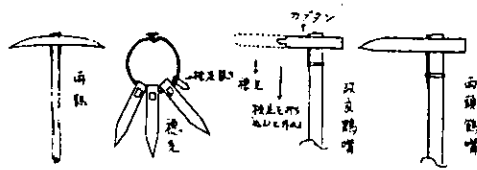


図102 ホサキ

ホースニップル

エアゴムホースを継ぐニップル。落石などで、ゴムホースが切断されるので現場では常時、備品として保管している。

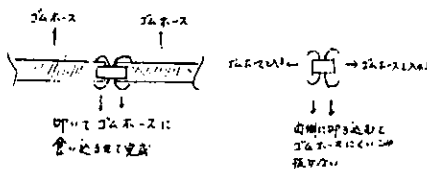


図103 ホースニップル

ボタ 硬

九州の炭鉱では、石炭以外の廃石をすべて硬という。常盤、北海道では「研り」という。

ボタエリ 硬選

硬と石炭を撰分すること。選炭ともいう。

ボタマキ 硬捲

払跡に石垣形に硬を積み、内部に小硬を入れて支柱の代りにする。带状硬捲（バンド式）とか全面硬捲がある。

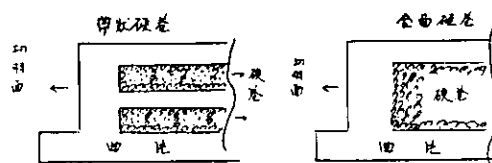


図104 ボタマキ

ホッパー

ベルトコンベヤなどで石炭を搬送し、上部の広い受口から石炭を落とし、下部の狭い出口から石炭を、炭車、貨車に積込む設備で漏斗形になっている。

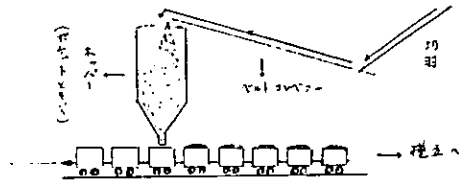


図105 ホッパー

ホホツエ 頬杖

炭壁を透かし堀する時に、炭壁が崩れぬように一時切張をすることがある。これを頬杖という。又杵足が折れて、応急処置として頬杖をする時もある。

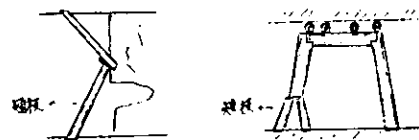


図106 ホホツエ

ホヤ

石炭が一部、炭層内で成層の時又は亀裂の関係で、粉炭になっているもの。

ホリコ 穿子

熟練した採炭坑夫のことで、明治以前の呼び名。

ボーリング 試錐

地層の状態、炭層の厚さ、炭質、断層の状態など知るために行われる。

ホンオロシ 本卸

斜坑の本線坑道で、大部分の炭坑では入気坑道になっている。

ボンコシ

ハンマーの大きなもので坑内では松岩「硅化木」割に多く使用する。カッペ採炭の場合はカッペを繋ぐピンを抜く時に使用する、抜柱ボンコシがある。

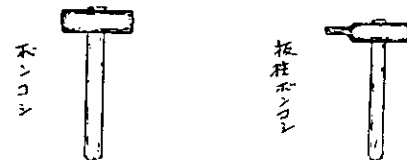


図107 ボンコシ

ボンブザ 唧筒座

坑内ポンプの据付けてある場所。
ホンノボリ 本昇り
昇り向きになっている幹線坑道。

マイソウタンリョウ 埋蔵炭量
鉱区内に埋蔵する石炭の量。

マイトカタ マイト方
ダイナマイトを発破する係員。

マイマイ
枠入れの時に、切組の合せ具合をいう。入
枠の時左右の両足は冠と同一平面内になる
ように立てなければならない。ねじれたり、
這前が悪い時に「マイマイ」が悪いという。

マオロシ 真卸
卸坑道において斜に分岐坑道が岐れている
時は、そのうち真直な卸を「真卸」という。
斜めの方は「斜め卸し」という。図 75 斜
め卸し参照。

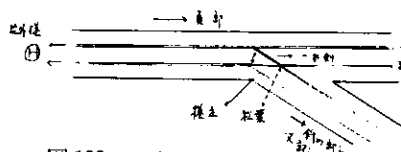


図 108 マオロシ

マキキリ 捲切り
坑内の炭車に積んだ石炭を、全部坑外に捲
上げて残炭を残さないように、その方で処
理することをいう。

マチコウドウ 待ち坑道
切羽の戸樋口をつくる時、すぐに造れない
時に、前から坑道を造って待つことがある。
これを待ち坑道という。風道も同じく造っ
て待つことを待ち風道という。

マツイワ 松岩 (硅化木)
炭層内で松岩ほど厄介な物はない。炭層内
に点在し、硬度は堅く、大きな物になると
5~6トンあり、採炭切羽では特に注意が必



写真 マツイワ

要。傾斜のある切羽ではトラフを飛び越し
て転石し、鉄柱をなぎ倒し、大落盤を起こ
し尊い人命も奪う。松岩は落として小割り
するか、鑿孔し火薬で爆破するのが原則。
落ちない物は充分に打柱などで補強が必要。

マツバ 松葉
車道の一本剣の取付けの所。図 108 の真卸
し、斜め卸し参考。

マテガラ 扇石の一種。「ドン」のため多孔質に
なって柱状になる。単一のものを「小マテ」、
群をなすものを「大マテ」、氷柱状になっ
たものは「モウガンコ」という。

マブ 間歩、間部
坑道の昔の呼び方。

マメタン 豆炭 家庭用の燃料。

マワク 間枠
施工枠の梁が折れたり、枠間が遠い場合に、
枠と枠の間に、新たに枠を入れて補強する
ことを間枠を入れるという。

マントン 満炭
ホッパーに石炭が満載になれば、各コンベ
ヤ (運搬機) は停止する。山盛になること。

ミアイ 見合い
賃金の内払い。例えば 10 月 1 日から 15 日
までの稼働日数の分を、10 月 25 日に見合
の内払い。16 日から 31 日まで稼働日数の
賃金と、見合い払の賃金差額を差引いて、
11 月 10 日に総括して支払う。この時に税
金、各種の保険等が差引かれる。各会社
により見合賃金の支払い、総括払いは異なる。

ミコツミ 実木積
坑木を井形に積重ね、中に硬を入れたもの
が実木積。図 20 空木積参照。

ミズアナ 水孔
水が滲んだ又は湧出した発破孔。

ミズナガクッシン 水流し掘進
昇りの沿層掘進の場合、先に水流し用の水
管とトラフを布設し、発破で出た石炭を水
を出して下部に流し、水切りしてホッパ
ーの中に入る。水流し掘進の場合は現場では
石炭を炭車に積込まない。ホッパーに集中
し炭車に積込む。

ミズナガシトヒ 水流し戸樋
単に水を流す戸樋は板で造ったもので、石

炭を流す戸樋は鉄板か、ビニールで造った戸樋。鉄板やビニールの戸樋に水と共に石炭を流して運搬する。

ミッペイモン 密閉門

不用になった坑道を門を立て密閉する。不用になった坑道には通気がなく奥に可燃性ガスなど、有害ガスが発生しているので、人間の立入り禁止、可燃性ガスの流出を防止するために行う、密閉門。隙間は漆喰で完全に塞ぐ。

ミバコ 実函

石炭や硬の^{ゴツ}入っている函。何も入っていないのは空函。

ミハリ 見張

発破中の見張人。発破中は前後、左右に見張を出し、何人も立入をさせてはならない。警戒人ともいう。

ミミカキ 耳掻

発破孔の中に残っている、^{クリコ}線粉を掃除する物で、耳掻に似ている。別名キューレンともいう。図 24 図参照。

ムエンタン 無煙炭

発熱量 8000 カロリー以上、炭素 93~95%、水素 2~4%、酸素及窒素 3~5% の範囲にある不粘結性の石炭。燃える時は青色の短い焰を出す。「無煙炭」と書かれるが本来の意味からは「無焰炭」が正しい。(鉱業便覧) より。

ムカエバコ 迎函

吊函等で函が置いてある場合、又は^{カウ}空函が無くて差函が出来ない場合は、コースに実函をつけて差し、下の実函を連結して捲上げる。其の時コースにつけた実函を迎え函という。

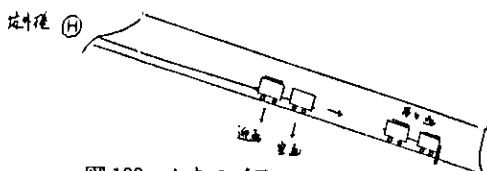


図 109 ムカエバコ

ムコウ 向う

坑道の貫通を急ぐ時は、その坑道の延長線上の反対側からも、これに向って掘進する。反対側からの掘進を「向う」という。貫通間際の発破作業は細心の注意、連絡を確認しないと災害を招く。

ムコウカタ 向方

二交替作業の場合相手方をいう。三交替制の場合は、自分達からみて、前の人は^{マエカタ}前方と呼ぶ。後の人は^{アトカタ}後方と呼ぶ。

ムワクコウドウ 無杵坑道

杵のない坑道で、^{ホトシ}殆どが岩石坑道に集中している。別名裸坑道ともいう。

メクラタテコウ 盲竪坑

坑内に設けられた竪坑で、地表に抜けていない竪坑のこと。

メクラノビ 盲延

測量せずに目見当で延ぶ掘進。盲延は中小炭鉱で聞いたことはあるが、事実無計画で無駄な掘進である。

メコファン

扇風機的一种で、鉄風管の中に扇風機とモーターが一緒に設置されたもの。

メタンガス CH₄

無色無臭の可燃性ガス。^{モウキ}沼気ともいう。空気の約半分の重さの気体である。空気より軽いので、切羽の上部又は天井の^{ボウシ}凹所、天井空木積に停滞しやすい。坑内のガス爆発はメタンガスと空気との混合した物が、引火した際に起るもので、空気中に 9.5% 含有が爆発最高限度となっている。メタンガスは、有機物が沼などの水中で腐敗する時に生じるので「沼気」ともいう。

メッシュ (網)

^{リョウツキ}砂や粉の粒径を表わす単位。その意味は長さ 1 インチの間にある網目の数を表わす。炭じん爆発は粒径(粒子)が小さい程、火源があれば爆発する。

メヌキ 目貫

長い坑道を掘進する時は、本卸坑道と連卸坑道を同時に掘進する。本卸と連卸の間に連結坑道として、普通二重門以上の門を立てる。図 14、卸詰参照。

メヌリ 目塗り

門や張切り、鉄風管の漏風を防ぐために、^{シラ}板と壁、板と板の隙間、風管の継目に漆喰で目塗をすること。

モウガンコ

柱状になった^{モウ}燧石の筑豊の俗称で、「モウガンコ」は訛って「マガンコ」(氷柱)になっている。ハシリの項参照。

モエイシ 燃石

石炭の昔の俗称。貝原益軒の「筑前風土記」(1703年)には「燃石」が書かれているが、6年後の「大和本草」(1709年)には「石炭」と書いて「もえいし」と記してある。

モエルイシ 燃る石

燃石に同じ。

モクサク 木柵

坑木の支柱木や板で造った禁柵。坑内の通行禁止箇所や危険個所に、柵をして札をかけて立入禁止にする。柵の一部を取外し中に入り、用便中に殉職した例もある。

モクセイタンシャ 木製炭車。

図 65 参照。木材で造ったもので、四角に若干の金具を使用している。鉄製炭車が出現してから、木製炭車と呼ぶようになった。

モクワク 木枠

梁も足も坑木で造ったものが木枠。レールで造ったアーチ枠、梁が使用されるようになってからこの名がつく。

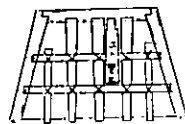


図 110 モクワク

モドリ 戻り

坑道、切羽などで、進行方向と反対の方向のことで、進行方向は「行き」という。

モドリバライ 戻り払

退却式採炭方法。最初に運搬坑道(肩坑道になる)を掘進(千メートル近くになる時もある)しておく。次にゲート坑道(深坑道)を掘進し、ある程度で中止し、切羽になる坑道を運搬坑道に貫通させる。採炭員が切羽採掘の進行に応じて、ゲート坑道も掘進する。この切羽は奥から手前になす採掘方法が退却払(戻り払)という。利点は材料運搬坑道を兼ねた「肩風道」(排気坑道)で長い期間保存しなくてもよい特徴がある。この、「退却払」と逆に「前進払」(行き払)があるが、通気関係、坑道維持、重圧などの悪条件が重なる。

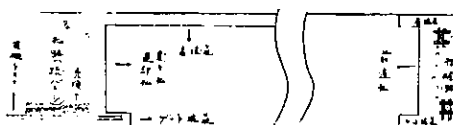


図 111 モドリバライ

モユルツチ 燃ゆる土

日本書紀に「天智天皇(38代、668年)に、7年越しに国の燃ゆる土と燃ゆる水を献ず」とある。燃ゆる土は石炭、燃ゆる水は石油である。

モユルミズ 燃ゆる水

石油の原油。燃ゆる土参照。

ヤイタ 矢板

土砂の崩壊または水の侵入を防止のため、建築物の基礎の周囲に打ち込む、板状(現在は鉄板)杭のことで、炭鉱では杵や柱を固定する時に締めるのに使用する。楔ともいう。

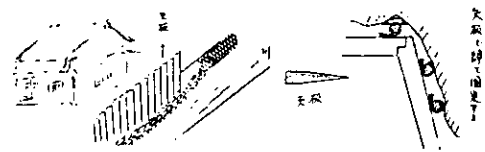


図 112 ヤイタ

ヤクカシヨ 役個所

突貫工事や作業が困難な個所を進捗させるために、前以って請負賃金を定めて作業をさせることがある。このような個所を「役個所」という。「曲片延」や「卸延」に進捗のためには四交替制もある。

ヤケ 焼け石

火に焼けた石炭。一度焼けた石「ガラ」(粗製コークス)は家庭用燃料として重宝されていた。

ヤゲンシャ 矢玄車(エンド・シーブ)

捲上機の前
の傾斜によ
り、ロープ
受け又は変
更する時設
置された車
を矢玄車と
いう。

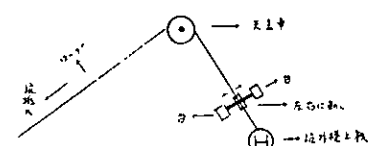


図 113 ヤゲンシャ

ヤハズ 矢はず

木杵の頭(幹の方)を弓の矢羽のように鋸

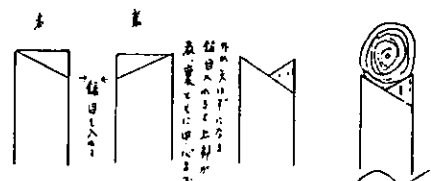


図 114 ヤハズ

で切ったものを矢はずという。

ヤマシンザン 山新参

他の炭鉱から就職してきた人。前の炭鉱のベテランでも、新しく炭鉱に就職すれば、その炭鉱では新参、つまり山新参という。

ヤマタケ 山丈

炭層は石炭とその間に挟み「岩石」が重なり炭層を形成している。この挟みを含めて山丈という。石炭部分だけを「炭丈」という。



図115 ヤマタケ

ヤマナカコウサイ 山中交際

友子に取立てられた鉱員は、旧慣に従って相互の災害扶助の義務があったが、友子が一時的、若しくは軽度の災害を受けた時は、その友子の属している鉱山または炭鉱の友子達だけで扶助した。これを「山中交際」という。長期に亘って救済が必要のある時に行われる「箱元交際」に対応する制度。

ヤマナリ 山鳴り

坑内の切羽全体が、自然の重圧のため不気味な鳴動がすることを山鳴りという。

ヤマノカミ 山の神

炭鉱や鉱山で祭っている神様。祭神は「大山祇命」で大部分が祭ってある。金属鉱山は「金山彦命」のところもある。



写真 ヤマノカミ

ヤマモトオンスクイ 山元御救

福岡藩では「石炭仕組法」に基いて稼行炭鉱に前貸した資金。これは1割の利息をつけて返済する。

ユウコウキリョウ 有効気量

掘の風道、その他の坑道に有効に使用され

る気量のこと。

ユウコウハッパ 有効発破

爆薬の多少と硬度に対する最も有効な発破方法のこと。

ユウスイ 湧水

わき水のこと。

ユキ 行き

戻りの反対。坑内作業場の進行する方向を「行き」という。

ユキノビ 行き延

一本坑道、鉄砲延ともいう。

ヨコカエシ 横返し

炭車を横転させること。

ヨココウ 横坑

斜坑または水平坑道のこと。立坑と比較してこのようにいう。

ヨツタテ 四つ立て

二つの枠で一組になって立っている枠のこと。図101、四つ立て参照。

ライカン 雷管

銅管の中に雷汞（水銀）又は窒化鉛など爆薬を入れたもので、火薬の点火、爆薬の起爆に使用する発火具のこと。



写真 ライカン

ラクサ 落差

断層の落差、断層によって食違った同一層の垂直距離。

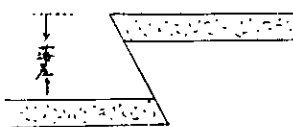


図116 ラクサ

ラクバン 落盤

天井の岩石が崩落することであるが、一般に炭壁の崩壊、吊岩の落下も総称して落盤という。

リュウカスイソ 硫化水素

硫黄と水素の化合物。無色で卵の腐った臭いを発する可燃性の毒ガス。空気中に極く

微量に存在しても眼や気管を刺激し、0.05%以上になると「めまい、嘔吐」を催し、次に気絶し死に至る。平成11年11月に筑紫野市で産業廃棄物処理場で3名の尊い命を奪ったのが、猛毒の硫化水素である。

リュウズ 龍頭

残柱式の採掘跡に残された炭柱のこと。

リョウツル 両鶴

両端が鶴の嘴のようになっている。図102穂先参照。

リョウトウ

軌道大工が主として使用している両頭鶴。図102穂先参照。

リロタンリョウ 理論炭量

計算上から算出した鉱区内の埋蔵炭量。

リロンフウアツ 理論風圧

理論計算上、扇風機の生じる最大風圧をいう。

ルイソウ 累層

多くの炭層が平行に重なり合っていること。また互いに平行に重なり合っている地層の集りをいう。

レキガン 礫岩

礫（小石）または砂利の大きさと丸みのある岩片を多く含んだ水成岩。礫だけ、または礫と砂が固まって出来た岩石のうちで礫の量が砂より多いものが「蜜岩」（みだれた岩）ともいう。砂の多い時は「礫質砂岩」という。

レキセイタン 瀝青炭

石炭の一種で、揮発分20～40%、固定炭素48～73%。黄色有煙の焰を出して燃える。普通の石炭よりも色が黒く光沢があり、燃えやすく、黒い煙と臭気を出す。火力は強い。

レッカ 裂か

岩石や地層中の割れ目のこと。

レンガマキ 煉瓦巻

煉瓦で巻き上げた坑道。入気、排気の坑口附近が多く、アーチ型になっている。



人道など永久坑道、図117 レンガマキ主要扇風機室などに施行されている。現在外から観られる旧海軍炭鉱、元国鉄志免炭鉱の主要扇風機室と排気

坑道の排気噴出口で観られる。

レンタン 煉炭

石炭、コークス、木炭などの粉末に、ピッチ、コールタール、石灰を粘結剤として混ぜて、強く押し固めた燃料で家庭用に多く利用されている。

レンバツ 連発

電気発破をする時は、一本ずつ鳴らさず二本以上を同時に発破する。五連発、十連発、二十連発があるが、鑿孔した物に効果がある。産出された多くの松岩（硅化木）に粘土で爆薬を付けて連発で割る時は、最初の爆薬で、次からなる爆薬を弾き飛ばし、空中爆発を起し効果がない。単発式を一度に発破すると効果がある。

ロウフウ 漏風

曲片、主要水平坑道の門、目抜の門、局部扇風機の送風管の継手、圧風管の継手折れなど風が漏れるのを漏風という。この各所の漏風防止に坑内保安係は苦労する。

ロウムガカリ 労務係

労働者及其家族の指導、世話、家屋損傷修理など坑外の管理をする。

ロス

損失のこと。炭鉱では切羽の古洞側に残された石炭、坑道の硬の中に残された石炭をロスがあるという。又漏風もロスがあるという。

ロテンボリ 露天掘り

地表近くにある石炭を、表土を剥いで地表から採掘すること。貝島大之浦炭鉱が坑内採掘を閉鎖して、露天掘採掘をし、昭和51年8月5日露天掘採掘を最後に筑豊の炭鉱はすべて閉山し、長い炭鉱の歴史に幕が下ろされた。

ロトウ 露头

地層、鉱床、炭層が地殻（地球の表面60杆）変動のため、これらの一部が表面に現れたものを露头という。

ロープ 炭鉱では捲網のことを、主としてロープは捲上機で炭車を捲上げる時の捲網をいうが、その他エンドレス・ロープなどがある。

ワイヤ・ロープ

鋼鉄線を振り合せて造った物で、主として捲網のことをいう。

ワクアシ 杵足

梁を支えるために立っている足のこと。図118-1・2・3参照。

ワクイレ 杵入れ

杵入れの順序として、鑿孔、発破、硬を取り、その時中央部を残し左右の壁際を硬取りを早くして、杵釜を出し杵釜を掘り、足を立て繫をし梁を乗せて切張りをする。杵裏に成木を差し込み矢板で固定し、残り硬を完全に除去して一工程となる。

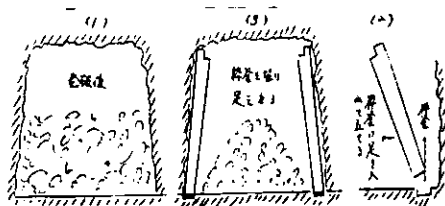


図118-1
発破後

図118-2
杵釜出し

図118-3
足を立てる

ワクガマウ 杵が舞う

重圧（荷）がきて杵が倒れることをいう。

ワクビキ 杵引き

不用になった坑道の杵を撤収すること。撤収した鉄梁、鉄アーチ、ページ、車道等は坑外に上げ修理して再利用する。梁や足、成木類の坑木も回収し坑外に上げて、薪として従業員の家庭に配達される。

ワクマ 杵間

杵と杵の間の間隔のこと。図119の杵間、杵裏、杵釜等を参照。

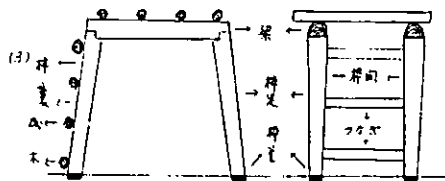


図119 ワクマ

ワクマワシ 杵廻し

杵足の方をかえる時に、大きな坑木は人力では自由にならない。その時に動かす道具のことをいう。

ワタリコウフ 渡り鉦夫（渡り炭鉦マン）

炭坑から炭坑へ仕事をかえながら、移動する人のことをいう。

ワッシャー

減摩機。パイプを連結する場合に、継目を密着させるために挟むもので、材質で「ゴ

ム・ワッシャー」、「木ワッシャー」、「鉛ワッシャー」がある。図87パッキング参照。

ワニグチ 鰐口

炭車や台車の引鉄の端についている結鎖（クサリ）の先についている、安全ピンをさしこむところ。図35・39参照。

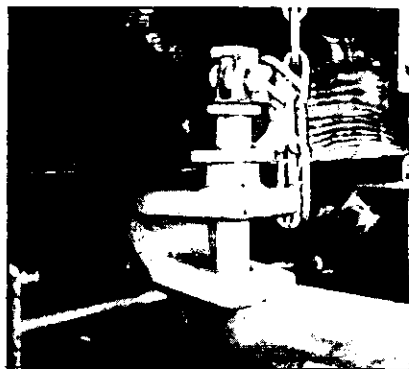


写真 ワニグチ

ワリコミ 割り込み

福岡藩で「石炭仕組法」が行われていた時代に、買手のない石炭があった場合、石炭を買入れるために入港していた船に、石炭を割り当て、無理にその分だけ余計に取らせた。この余分を買取らせることを「割り込み」という。

参考文献と写真

皇室、皇后関係年表。直方石炭記念館。田川石炭記念館。宮田町石炭記念館。鞍手石炭記念館。倭漢三戈図絵。大和本草。筑前風土記。石炭仕組法。鉦業便覧。鉦山保安規則。友子組合法。焚石会所作法。石炭爆発取締規則。鉦業警察規則。炭坑用語註解。石炭史話。鉦物名辞典。奇石産誌。嘉飯山郷土会会誌第八号炭鉦用語。桂川町炭鉦資料集。以上順不同 笹尾了祐

註一図・写真は原版より縮小しています。

本稿は、嘉飯山郷土研究会会誌第14号（石炭産業特集号）平成12年11月発行より抜粋、掲載致しました。
著者 笹尾了祐氏、並びに嘉飯山郷土研究会のご協力に感謝致します。

炭鉱用語解説と図解補足

炭鉱用語解説と図解補足

アーチワク

後には1型钢を曲げた2本繋ぎ（2部材）又は3本繋ぎ（3部材）のものが多く使われた。

アトガス

これらの中で炭酸ガスは毒性が無いので、行政では昭和40年頃からこれらを有害ガスと呼ぶようになったが、それまでは中毒ガスと呼んでいた。

アンゼンシュウカン

現在は保安週間といい、経済産業省が主催し、鉱山毎に自主目標を定めて実施する。

インターフェロメーター

光干渉計形ガス検定器、光の屈折を利用して、メタンや炭酸ガス等の坑内ガスの検出を行う測定器。

オオテン

一般には切羽直上の天盤を直接天盤（直天）、その上の固くて厚い岩盤を大天盤（大天）という。

オクリマイト

炭坑によっては送り発破又は掛け上がりという。その場合には「オクリマイト」は、発破孔にダイナマイトを装填したまま、次の方へ送ることで、係員が現場で直接申し送ることが原則である。

カグメワク

冠枠とも書く。また固め枠ともいう。

カタド

原理的には、温度、湿度、風速を加味した、通気による人体の冷却力を示す単位（ $\text{mcal/cm}^2/\text{s}$ ）である。

カタバンバライ

現在は前進式、退却式共片盤向きに進むものを、片盤向払又は片盤払と云い、払長150m程度、片盤長は数100m或いはそれ以上に及ぶ場合が多い。

カッタン

現在国際分類では発熱量（含水無灰ベース）5,700kcal/kg以下の石炭を、一方ASTMの石炭分類では発熱量（含水無鉱物質ベース）4610kcal/kg未満の石炭を其々褐炭と定義している。

キュウメイキ

救護隊が使用する酸素呼吸器を指す。これに対し各坑内員が自分の避難のために使用するものは自己救命器と云い、小型簡便である。

コウシュタンコウ

甲種炭坑は、坑内の気流中における可燃性ガスの含有率により通商（現・経済）産業大臣が指定する炭坑。甲種炭坑以外の石炭坑は、乙種炭坑と言う。

詳しくは、保安規則を参照されたい。

サカギ

枠足、打柱などで、末口が天井側になっているものを逆木と云う。

サポーター

鑿岩機の下部に取り付け、エヤーで伸縮する支持脚。エヤーレッグとも云い、サポーターの付いた鑿岩機をレッグドリル又はレッグハンマーと云う。

シクツ

自鉱区の試掘の場合は許可は要らない。

シテイコウザン

指定鉱山は、鉱業警察規則及び石炭坑爆発取締規則の時代迄の用語であって、その後の法改正により甲種炭坑となった。

なお、指定乙種炭坑は、可燃性ガスの発生状況により鉱山保安監督局（部）長が指定する。

セイダンソウ

断層面の上側の地層が落ちている断層が正断層、逆に下側の地層が落ちている場合は逆断層と云う。

ダイナマイト

現在のダイナマイトは、綿薬でコロイド化したニトログリセリンを基剤とした、可塑性のある爆薬（膠質ダイナマイト）である。炭鉱ではこれと硝酸アンモニウムを基剤とした、粉状ダイナマイトも使用される。

タンジン

詳しくは、石炭の採掘や運搬に伴って発生する石炭の微粒子で、空中に浮遊し、又通気で運ばれて坑道に堆積する。前者は浮遊炭塵、後者は堆積炭塵と云う。

センセキ

火成岩に近いものから順にハシリ、オコリ、チクラと云い、この順に変質の度合いが小さくなる。

チュウオウシキツウキ

これに対し、一方から入気し遠隔の他方から排気するものを、対隅式通気と云う。

チョクセツ

もう一つの意味は「間接」参照。

チョクセンハツパ

鉄砲延びでは規則で定められた発破母線長の距離を確保し、発破位置を設定（板囲い又は側壁への掘り込み）して行なう。

チョクレツケッセン

電気発破において、雷管の脚線を直列に繋ぐ結線方法。

ツリピン

炭車を繋ぐピンが鰹口に十分に刺さっていない状態。吊りピンのまま巻き上げれば、炭車逸走の恐れがあり、危険。

テッチュウ

戦後西ドイツから導入された画期的な採炭法—「カップ採炭」に必須の機器の一つ。上柱が下柱の中をスライドし、伸縮自在、当初は摩擦で止める摩擦鉄柱であった。後に水圧（油圧）鉄柱、移動鉄柱（自走杵）へと発展した。

ドシャジュウテン

圧縮空気を利用する場合は、通常破碎した硬を用い、空気充填と云う。

トロンメル

緩速回転するこの円筒の中に原炭を通し、篩分する。

ネンリョウヒ

現在は、揮発分は直接測定し、固定炭素は $100 - \text{水分} - \text{揮発分} - \text{灰分}$ で求め、

固定炭素

燃料比 = $\frac{\text{固定炭素}}{\text{揮発分}}$

とする。

ハシラビキ

また、残柱式採炭で炭柱割りをした後、残柱を採掘することを柱引きと云う。

ビチューム

現在では炭水化物ではなく、炭化水素化合物と云い、炭水化物は糖類を指す。

ピトーカン

詳しくは、気流の動圧（全圧と静圧の差）を測定する器具。気流や飛行機の速度の測定に利用する。

ピラモン

気流の要部でない所の風量の調整または不完全ながら通気の遮断に用いる。

フナゾコ

水平坑道（片盤等）と斜坑を繋ぐ部分を巻立と云い、水平坑道の先頭炭車が斜坑の近くまで頭を出すように、傾斜をつけて掘り下げている。

ヘイレツケッセン

電気発破において、雷管の脚線を並列に繋ぐ結線方法。部分不発が起こる恐れがあるので、炭鉱では通常は用いない。

ページ

ペーシとも云う。その断面形状により、平形、U形、M形等がある。

マメタン

粉炭に粘結剤を加え、豆状に押し固めた燃料。

ムエンタン

最も炭化度の高い石炭で、現在いろいろの分類があるが、我が国炭田探査審議会の分類では燃料費9を超えるもの、ASTMでは揮発分が14%以下のものとしている。

モドリバライ

一般的には退却式払に同じ。図62参照。

レンパツ

電気雷管を用いて複数孔の火薬類を1回の点火で爆発させる方法の内、瞬発雷管を用い一斉に爆発させる発破を斉発、段発雷管を用い、時間差を付けて次々に爆発させるものを連発又は段発と云う。

ワッシャー

現在ではパッキンの事をワッシャーとは云わない。ワッシャーは座金を指す。

参考文献

- 1、石炭利用技術用語辞典 燃料協会
- 2、図解機械用語辞典 日刊工業新聞
- 3、筑豊近代化大年表（大正編）付録筑豊炭鉱用語辞典 近畿大学九州工学部
- 4、万有百科事典・化学 小学館
- 5、広辞苑 第三版 岩波書店
- 6、鉱山保安ハンドブック 朝倉書店
- 7、石炭鉱山保安規則 昭和59年4月 白亜書房
- 8、炭坑読本・穿孔 三菱鉱業
- 9、最新鉱山保安技術テキスト 火薬保安、発破保安 白亜書房

- 1 0、新火藥読本 白亜書房
- 1 1、実用坑内通気 森北出版
- 1 2、選鉱工学 共立出版
- 1 3、石炭 共立出版
- 1 4、石炭 白亜書房

炭鉱用語解説集 北海道地区

アース (接 地)	ケーブル、電気機器の鉄台及び外函、風管、エアジェット装置等を、絶縁電線を用いて大地に継ぐこと。 効果＝感電の防止と、静電気による火花の発生防止等。
アイバン (合 盤)	炭層中に層状をなして介在し、比較的厚い場合の砂岩、頁岩等を云う。
アオギ (青 木)	坑木に使用する松類のことで、エゾ松、トド松、赤松、黒松等が使用されている。
アシ (脚・足)	杵脚の略称。
アシカエ (脚替え ・足替え)	破損した杵脚を、新しい杵脚と取替える作業を云う。
アツリ (圧 理)	盤圧によって、石炭層に出来る割目のことを云う。
アナコメ (孔 込 め)	発破孔の装てん、てん塞を云う。
アラシヤ (荒 車)	坑内現場から、石炭を積んで搬出されてきた実車をいい、積載量がまちまちなので、正車に対して使う用語である。(荒)とも云う。
アンコ	粘土製の、発破用込物のこと。
アンゼンバン (安全板)	急斜面の切羽等で上部からの転炭、転石を防止する為に設置するもので「転炭、転石防止板」、「保安板」、「炭殺し」、「ダム」とも云う。
アンドウシヤ (安導車)	導中車、アンドン車等と云う。 斜行の軌道中央に、適当な間隔で設置してロープの磨耗を防止し、又片盤への炭車の流れを良くする為に取付けるローラである。
イキトル (生きとる)	電線に電流がと通っていることを云う。「活線」とも云う。
イシメヌキ (石目抜)	岩石中に設ける目抜で、普通上層坑道と下層坑道を連絡する坑道云う。
イッソウ (逸 走)	炭車の暴走を云う。
ウチハシラ (打 柱)	一本の柱のみで又はその頭部に、笠木を乗せて天磐を支える支柱を云う。
ウワバン (上 盤)	炭層の上部に接している岩盤を云う。又は坑道の天井の岩石部分を云う。
エキゾスタ	ブロワーの一種で、特に吸込側のマイナス圧を大きくしたもので、主に坑内のガス抜きに使用される機械である。

エスデーサイタン (S D 採 炭)	シールド枠（自走枠）と、ドラムカッターを組み合わせた採炭法の別名である。
エビジリ (エ ビ 尻)	三ッ枠に於ける、笠木の両端の切欠ぎ部分を云う。
エアジェット	ジェット装置を持ち、圧気を噴射させてその力で送風する、局部通気用送風機の一つである。
エアームウバ	局部個所のガス排除用の、圧搾空気使用のエアジェットである。
エアファン	エアモータを具えた、局部扇風機を云う。
エアブラスタ	鉄製の破碎筒を炭層内に挿入し、発射バルブを操作して高圧空気を噴射させ、石炭を破碎する装置のこと。
エアモータ	圧気を動力とした、原動機を云う。
エアロコ	圧縮空気機関車のこと。
エンソウコウドウ (沿 層 坑 道)	炭層中に、炭層に沿って掘さくした坑道を云う。
エンドレスマキ (エンドレス巻)	ロープ運搬機の一つで「循環ロープ式巻揚機」とも云う。 これは、緊張装置によってロープに適當の張力を与えて、巻胴とロープを低速度で運転、兩地点間を循環させこのロープに炭車をクリップで、連結して軌道上を運搬するもので炭車とロープの関係位置で、上綱式と下綱式の二つの方法がある。
エンドシーブ	「エンドレス」巻の、終端にある矢弦車のこと。
オイミズ (追 水)	旧坑や水没個所の排水を行う場合、坑口や肩部から揚水しながら深部に進む方法のこと。
オイギリ (追 切 り)	狭くなった坑道で、周囲の岩盤を必要なだけ切り抜けること。
オオテンバン (大 天 盤)	採炭切羽の天磐のうち、無充てん払、総ばらし払等で容易に破壊沈下する直接天磐の上部にある天磐をいい、切羽が或る進度に達すると一時に大崩をなしてくるものである。
オオビキ (大 曳)	昇が水平坑道に貫通した交差口等で、水平部の枠足を支える地山が無い時又は軟弱な場合、枠足を支える為渡す長材の横木を云う。
オクリヤギ (送り矢木)	先受けのこと。又は先受けに使用する矢木を云う。

オドリバ（踊り場）	急傾斜（40度以上）の人道に取付ける転落防止板、若しくは折り返し部分の踏み板を云う。
オビジョウジュウテン （帯状充てん）	部分充てんのこと。
オヤカゼ（親風）	ある通気系統の本流から一部局部通気に取り分ける場合、その本流の気流を云う。
オヤダイ（親ダイ）	雷管を装着した爆薬のこと。
オリカエシ（折り返し）	昇坑道で地質の変化、上層連絡、その他必要により「く」の字に昇の傾斜方向を変えた所を云う。
カイコウ（開坑）	石炭を開発するため、立坑・斜坑、又は通洞を開さくし、引き続き採掘の準備の為に坑道を掘さくすること。
ガイソウケーブル （がい装ケーブル）	坑内用電線で鉄線、鉄板、鉛等を巻付けて絶縁物を外力から保護し、強度を強めたもの。
ガイドレール	すらせ用のレールをいい、立坑運搬のすらせ又はロープ運搬における曲線軌道部のすらせに用いる。
ガイドロープ	すらせ用の綱で、「すらせ綱」とも云う。多くは立坑運搬のすらせに用いる。
カイヒシヨ（回避所）	主要運搬斜坑底、又は運搬の用に供する坑道の一部を、人の通行に供する時に人が退避出来るようにした場所。
カエリカゼ（返り風）	局物通気で吹き込んだ風が切羽元を洗って出てきた風で、一般に人気より粉じん・ガス等が混入している。親風に合流する前を云う。
カエリタン（返り炭）	採炭切羽の炭壁が、剥離して倒壊すること。
ガカイ（外囲）	災害時、早期密閉が出来るように予め山の良い個所を選んで、密閉の基礎を築いたものを云う。
カガミメンオサエ （鏡面押え）	切羽面、又は坑道詰め正面壁が崩壊するのを防止する為の支保。 「作業面押え」とも云う。
カクウセン（架空線）	電気機関車の送電線として、空中に架設される裸電線のこと。「トロリー線」とも「電車線」とも云う。
カクウセンシキデンキキカンシャ （架空線式電気機関車）	架空線より電力を受けて動く、電気機関車のことを云う。

カクチ (欠口)	カギ型に切羽面に、堀込みを作った所を云う。
カクチオシ (欠口押し)	片盤向切羽の、下部坑道際の欠口の採炭を云う。
カクチサイタン (欠口採炭)	切羽面に欠口を付けて、採炭する場合を云う。「欠口払」とも云う。
カクスコップ (角スコップ)	先が平らになった、角型のスコップ。
カケアガリ (掛上り)	掘進切羽で発破したままで作業を終了し、次方の作業者と交代する状態を云う。「上り発破」とも云う。
カサギ (笠木)	打柱、三ッ杵等で天盤際に天盤を受けるように当てる横木を云い、三ッ杵の場合「梁」とも云う。
ガスシンシュツ (ガス滲出)	炭層や岩盤の表面より一様に、且つ徐々に間断なくガスが湧出する場合を云う。
ガスチャンバ	ガス湧出量の多い個所でガスが気流中に混入しないよう、湧出面を気流と遮断して局部的にガス室を造り、これよりガス誘導を行う。このような場合のガス室を云う。
ガスヌキ (ガス抜き)	石炭層に含まれるメタンガスを、気流に混入させずに捕集することで、目的別に大きく分けて、未採掘区域から捕集する地山ガス抜き法と、採掘跡から捕集する払跡ガス抜き法がある。 尚、ガス抜き法を分類すると、主なものは次の通りである。 ・地山ボーリング法＝地山の炭層、又は上下盤の岩石中にさく孔し、ガスを採集する方法。 ・上、下盤さく孔法＝稼行切羽の肩深坑道から上・下炭層に切羽の進行と共にさく孔し、ガスを採取する方法。 ・ガス抜き坑道法＝稼行炭層の上部炭層、又は岩石中にガス抜き坑道を設け、この坑道を密閉し貯溜ガスを採取する方法。 ・払跡密閉法＝払跡を密閉し、内部に溜るガスを採取する方法。
ガスブクロ (ガス袋)	ガスが停滞・充満している凹部を云う。
ガスフンシュツ (ガス噴出)	炭層又は、付近の岩盤の割目等より可成りの圧力のガスが、噴出する場合を云う。
ガスユウドウ (ガス誘導)	払跡又は、地山にあるガスを坑内気流に混入させずに、パイプで排気坑道や坑外に導くこと。

カタオイコミ (肩迫込み)	片盤向切羽面の肩側を、深側より進ませること。
カタバンムキサイトン (片盤向採炭・払)	採炭切羽面を片盤坑道方向に採炭し、進めていく切羽形態の採炭を云う。
カッソウ (滑走)	沿層掘進等の際、引立の軟弱天盤が高く抜け上り、多量の粉炭や含媒が流出することを云う。
カッペ	採炭切羽の支柱に使用する連結式の鉄笠木で、先受け支保の出来るもの、主として鉄柱と組合わせて使用される。
ガバナ	人車の逸走防止を図るため、救急車のフックを落下させる装置のこと。
カミサシ	「くさび」のこと。又打柱と天盤間に挟む板材を云うこともある。
カラボリ (空堀)	無充てん採炭のこと。
ガケマキ (崖巻)	天井を支持するため、硬で石崖巻をすること。「硬巻」とも云う。
ガンブンサンブ (岩粉散布)	堆積炭じんの爆発性を抑制する為、不燃性の岩粉を撒布混合して着火しないようにすること。
カンムリ (冠)	坑道又は、採炭切羽の天井部を云う。或は切羽の肩部を云う。
カント	軌道の曲線部で遠心力による車両の脱線を防止するために、外側軌条を内側軌条より高くする。この高さを云う。
キカン (軌間)	軌道に布設した、2本のレール頭部内側の最短距離のこと。 「レールゲージ」とも云う。
キキハライ (利払・効払)	発破又は、掘さく機械により掘さくした後の、裸の側壁・天盤を打診しながら浮石を除去して、安全状態にする作業を云う。
ギケイシャゼンジュウ テンハライ (偽傾斜全充てん採炭)	偽傾斜全充てん採炭切羽面を偽傾斜に設定し、払跡を・で全充てんする採炭方式を云う
キブル	立坑掘さく時、研・材料・人員の運搬に、使用する鉄製の大型のバケツのこと。
キリセン (切線)	①掘進時に引立の軌道仮延長用に使う短いレール。「軽便」とも云う。 ②軌道張替・補修の場合、レールの接手間隙が大きいとき、その間に入る短いレールを云う。「切金」とも云う。
キンク	巻綱 (ワイヤロープ) やケーブル等が、強く折れ曲りその癖が戻らない状態を云う。

クウキブクロ (空 気 袋)	自然発火や坑内火災時に、坑道の緊急密閉用に使用するナイロン等で作られた空気マットのことで、低圧空気で膨ませ短時間に坑道全面を覆い、通気を遮断させる。
クウハツ (空 発)	発破の際、岩石や石炭を破碎することなく、爆力が発破孔から込物を押し出し、空中に吹き出す場合を云う。「鉄砲」「熊取る」「ハチ打つ」とも云う。
クサビ (楔)	普通坑内では木製で、支柱と岩盤間の締まりを強くし、支柱を固定させるため、組み重ねた矢木と杵の間又は、岩盤の隙間に打ち込むものを云う。
クチモトコーキング (口元コーキング)	坑内でボーリング孔からガス抜きをする際、吸引圧により空気が手前から吸い込まれないように、口元の挿入パイプと孔壁間をセメントや、硬質ウレタンホーム等でてん塞すること。
クッシンズリ (掘 進 研・掘 進 硬)	掘進の際、掘さくされて出る研 (硬) を云う。
クルマドメ (車止め・車留め)	炭車の自走を防止する為、軌道の中に設ける器具を云う。
ケッセン (結 線)	電気発破において、装てんした電気雷管の脚線と発破母線をつなぐこと。
ケーブルセン (ケーブル 線)	電気動力線のこと。坑内で落盤等により切断すれば危険であるから、丈夫に被覆が施してあるものを云う。
ケイカイダチュウ (警 戒 打 柱)	無充てんの採炭切羽の古洞側、或は坑道杵曳き個所で、天盤が所定位置以上に崩落して作業場が危険とならないよう、打柱をしてその位置で崩落を喰い止める為に施す打柱を云う。「警戒柱」「警戒坊主」とも云う。
ケージ	立坑運搬に使用する運搬機で、炭車・材料・人を乗せる釣台を云う。
コ ア	環状の掘削具を使用する回転式ボーリングでは、岩盤は環状に切削されて孔中に岩石円柱が出来る。これを「コア」といい、「錐しん」「岩しん」とも云う。これを取上げて岩質層状を調べる。
コウアツチュウスイ ハツパ (高圧注水発破)	炭じんの湿潤効果を挙げる為、炭層の発破孔に前以て高圧水を注入した状態で、実施する発破のこと。
コースマキ (コース 巻)	斜坑においてロープの先端とで炭車を連結し、ロープの他端を巻胴に巻付け、又は巻戻して炭車の運搬を行うロープ運搬法を云う。
コースモト (コース 元)	コース巻等のロープの先端で、炭車に連結取付けを行う部分を云う

コウタイシキ サイタンホウ (後退式採炭法)	片盤展開を採掘予定線迄進め、その先端部かに採炭切羽を設けて、片盤坑道の出途の方向に戻りながら、採炭を進めて行く方法を云う。
コシセン (腰 線・腰 白・腰 印)	坑道掘進の際、坑道の標準勾配を示すため、杵脚に印した規準線を云う。
ゴ ロ	導中車のこと。
サイクロン	遠心分離作用を利用した濃縮装置で、水洗機から出る微粉炭の含有水分を除去し濃縮に用いる。
サイショウテイコウセン (最 小 抵 抗 線)	発破孔内の装薬中心点から、自由面に至る最短距離を云う。
サイタンワク (採炭杵・採炭留め)	縦杵のこと。急傾斜採炭切羽の支柱は、多くは縦杵にするので「採炭杵」と呼ぶ。「採炭留」とも云う。
サキウケ (先 受 け)	掘進時掘さくして積込支保を完了するまでは、引立元は裸天井である為、保安の為本杵を付けるまで、最終杵とその前の杵の笠木から長い梁を吊るして差し出し、この上に次の杵の一部又は矢木を当てて、裸部の仮支えを行うことを云う。
サギョウメンオサエ (作 業 面 押 さ え)	切羽面、又は坑道詰めの正面壁が崩壊するのを、防止する為の支保で、「鏡面押さえ」とも云う。
サバドメ (サバ留め)	柱又は、杵脚の上端をサバにして笠木を受けた支柱を云う。
サンスイ (撒 水)	炭じんの浮遊飛散を抑制防止する為、炭じん発生の多い場所又は浮遊し易い場所に水を撒布すること。
シ ー ブ	巻揚機のロープを受ける、案内車のこと。
シールドワク (シールド杵)	強固な鉄製杵に安全鉄板を当てた隙間のない連結自走杵で、更に採掘機械又は運搬機と結合した機械化支保杵を云う。
シキハバ (敷 幅)	軌道面を基準にした、坑道幅こと。
ジゴク (地 獄)	坑道高抜け個所の杵入れをし、矢木囲いはするが天盤まで当たりを付けていない状態を云う。
シタカサギ (下 笠 木)	下盤が軟弱な場合に、その剥離又は杵脚元のずれ、或はぬかり込みを防止する為、下盤に当てる横木のことで、その上に杵を立てる。 尚、下駄(敷物)をさして云うこともある。

シタムキツウキ (下向き通気)	長壁切羽に流れる風向きが、下向きの通気のこと。
シノビ (忍び)	柵の両脚の開き具合、すなわち柵脚の勾配のこと。「せり前」「這前」とも云う。
シャコウダンソウ (斜向断層)	「傾斜断層」「走向断層」の中間的状态の断層を云う。即ち地層の走向に斜交の断層面を持つ断層である。
シュウジンキ (集じん器)	作業場等に浮遊する粉じんを、捕集する装置のこと。
シュウキョク (褶曲)	地かくの変動で地層が波のように押し、曲げられた地層状態を云う
ジュウテンダム (充てんダム)	採炭切羽の払跡の所定空洞内に、充てんを充分に行う為に設ける仕切りをいい、「立ダム」「底ダム」「斜ダム」等がある。
ショアツ (初圧)	払が始発部から進行し、払跡の裸天盤の範囲が拡大して行くと、切羽面や天盤に重圧が掛かり、初めて大天が大きく崩落に至るが、その時の天盤圧を云う。
ショウド (焦土)	炭層内にボコボコした部分があるが、これを焦土と云う。「ほや炭」「茶かす」とも云う。
ジンコウテンバン (人上天盤)	スライシング採炭の下段の天盤のように、上段払の崩落・を金網や帯鉄で受け込み、人為的に作った天盤のこと。又、フライアッシュ流送充てんや、注水等により固化を図ることがある。
ジンドウ (人道)	人の通行用に設けられた専用坑道、又は運搬坑道内に人の通行用に設けられた歩道を云う。
スイダシツウキ (吸出し通気)	排気坑口で扇風機を運転し、その風圧により坑内空気を吸い出す通気方式のこと。又、局部通気の場合は、局部扇風機で切羽の空気を吸い出す方式のこと。
スイリョクサイタン (水力採炭)	高圧水をノズル(モニタ)から噴射して、その水力で石炭を掘り取る採炭法で、多くの場合、掘さくした石炭はトラフ中を水と一緒に流されて搬出される。
スイリョクユソウ (水力輸送)	採掘された石炭をパイプ、又は樋の中を水と一緒に流して輸送する方法。
ステズリ (捨研・捨硬)	捨場に捨てられた研(硬)。
ストッパ	車軸に金具をひっかけて車両を止める、軌道内に設けられた車止装置。

スナタンバ (砂タンバ)	ビニルの細長い袋に、砂を詰めた込物のこと。
スナテッポウ (砂鉄砲)	発破孔に砂をてん塞する時、圧気ので砂を吹き込む器具を云う。
スボウズ (素坊主)	笠木を付けないで、直接に天盤を支える打柱を云う。「坊主柱」とも云う。
スミタケ (炭丈)	山丈より夾みの厚さを差引いた、炭層中の石炭部分だけの厚さの合計を云う。
スラッグ	軌道の曲線部で炭車が通り易く、且つ脱線を防止する為にレールゲージを広くする。この標準ゲージより広くしたゲージを云う。
ズリ (研・硬)	石炭と対比して云う鉱山用語で、坑内で掘さくされて出る石炭以外の不用岩石、又は選炭して出る廃石等のこと。
ズリヤマ (研山・硬山)	研(硬)捨場のこと。
スンボウギ (寸法木)	施梓の際、物指し代わりとして寸法取り用に使用する、2本の細長い木棒を云う。
スンナワ (寸縄)	坑内で梓入れの際、坑木の寸法を図る為の紐のこと。
セイハツ (齋発)	多数の発破孔を結線して、一度に点火爆破を行うこと。
セリワク (迫り梓)	四ッ梓のこと。
セワク (施梓)	梓付けをすること。
ソスイドウ (疎水道)	下盤を掘り下げて、通水させる排水溝のこと。
ソウリ (層理)	地層(炭層)に、平行な目のことを云う。
ゾウキ (雑木)	坑木の「青木」に対する潤葉樹のことで、シラカバ、タモ、ナラ等が主に使用されている。
ソウケン (捜検)	煙草、発火具の携行を検べる為に行う、入坑前の服装検査を云う。「検身」とも云う。
ソウコウクブン (走向区分)	地層の広がり方向、即ち地層面と水平面を云う。 統計上次のように区分させる。 薄層＝稼行炭層の稼行山丈1.25m未満 中層＝稼行炭層の稼行山丈1.25m以上2.25m未満 厚層＝稼行炭層の稼行山丈2.25m以上

ソクアツ (側 圧)	側壁から来る盤圧を云う。
ソクヘキ (側 壁)	切羽、又は坑道の周壁岩盤のうち、たて壁の部分を云う。
ソデマキジュウテン (袖 巻 充 て ん)	前進式長壁切羽の肩深坑道維持と、通気の確保を図る為に行う肩深けの充てんのこと。
タイグウシキツウキ (対 偶 式 通 気)	主要入排気坑道が、採掘区域の中央と一端又は互いに他端に分れ、遠く離れて行う通気方式を云う。
タイセキタンジン (堆 積 炭 じ ん)	浮遊飛散した炭じんが、沈降して堆積している炭じんを云う。爆発その他の原因で再び浮遊炭じんとなり、爆発を起こす危険が大きい。
タイホウ (大 砲)	斜坑用の炭車逸走防止装置で、坑道途中の天井に太い丸太を吊し、炭車の暴走の時引綱で丸太の一方を落して、炭車を脱線喰い止めを行うもの。
タカオチ(高落ち・高抜け)	坑道又は、切羽の天盤が高く崩落する場合を云う。
ダシン (打 診)	ツル、テコ等を用いて天盤、側壁の岩盤を叩いて音響によって、浮石・浮炭があるかどうか判断する点検方法を云う。
ダッセン (脱 線)	車両の車輪が、軌条から外れること。「バッタ」とも云う。
タテオキ (立 置・立 函)	列車編成又は、実空車の入替操作の為、所定の場所に一時鉱車を止めて控えておくこと。
タマイシ (玉 石)	炭層中に偶々見られる硬い塊りの石をいい、硅化木のことで又は「松岩」とも云う。
タマコメ (玉 込 め)	発破孔に爆薬を装てんすること。
タマヅクリ (玉 作 り)	爆薬に雷管を装着させる作業を云う。又は「親ダイ作り」とも云う
タンソウケイシャ (炭 層 傾 斜)	地層(炭層)の面の最大傾斜線の方角と角度。方角は走向に直角の方角。角度は水平となす角度で表わす。 長壁式採炭切羽の炭層傾斜区分は、次の通りである。 緩傾斜＝ 20° 未満 中傾斜＝ 20° 以上 35° 未満 急傾斜＝ 35° 以上 55° 未満 立傾斜＝ 55° 以上
タンタン (探 炭)	炭層の有無、存在状況の探さくを行う地質調査。
タンタンコウドウ (探 炭 坑 道)	探炭を目的として、掘さくする坑道。

タンベキチュウスイ (炭 壁 注 水)	炭壁内に高圧水を注入して、採炭時の炭じん発生を抑制すること。
チュウスイハツパホウ (注 水 発 破 法)	爆薬を発破孔に装填し、孔口をパッカで塞ぎ装薬と孔口間に、高圧の水を注入してん塞をして、発破を行う方法を云う。
チャクタン (着 炭)	ボーリング、採炭坑道、岩石掘進坑道が、炭層に到着すること。
チョクセツテンバン (直 接 天 盤)	炭層に接する、天盤を云う。
チョウリョウモン (調 量 門)	風道に張切り又は、通気門を作りこれに風孔の窓を設けて、所要の風量だ風量だけ流通させる。このように風量を適当に調節する為に用いられる装置を云い「分量門」とも云う。
ツウキ (通 気)	ガス排除、酸素供給、坑内温度の調節の為に、坑外より坑内全作業場に新鮮な空気を送り、汚染した空気を坑外に排出する空気の流れをつくり、維持することを云う。
ツウキケイトウ (通 気 系 統)	入気坑口から排気坑口に至る、坑内空気通路の系統を云う。
ツウキタンラク (通 気 短 絡)	入気と排気が短絡することで、作業現場に流れる有効風量が減少する。
ツウキハイブン (通 気 配 分)	各作業上や作業区域に、必要な通気量を配分すること。
ツリテン (吊 天)	払跡の天盤が崩落せず、吊った状態にある天盤のこと。
テッポウ (鉄 砲)	発破の空初のこと。
テンジョウナリ (天 井 鳴 り)	山鳴りのこと。
テンジョウモメ (天 井 も め)	天井が断層等で、もめていることを云う。
テンセキ (転 石)	石炭又は、岩石が斜面を転がり落ちること。或は、転がり落ちてくる石炭や岩石のこと。
テンタン(天 炭)	切羽又は、坑道の天井にある石炭を云う。付炭(つけたん)とも云う。
テンチフリカエ (天 地 振 替)	巻揚機のロープ全長の中で局部的に、磨耗・疲労・腐食等の多い個所を移動させる為、コース元側とドラム側とを振替えること。

ドウジジュウテンサイタン (同時充てん採炭)	採炭と充てんを、同時に同じ方で平行して行う採炭法を云う。
トウシワク(通 し 枠)	1本の笠木を、2本以上の柱で受けて支保する枠を云う。
ドウワリ(胴 割)	枕木のこと。
ドベラ(どべら)	側壁のこと。
ドマアゲ(どま 揚げ)	脱線の復旧をすること。
ドロシコ(どろんこ)	坑木の切れ端を云う。(枠の裏込めや楔材に利用する。)
ナガラヅル(長柄づる)	長柄の鶴ばしで、高い個所の天井点検用として使用する。
ナカダチュウ(中打柱)	両脚の間に立てて、笠木を受ける柱を云う。補強の場合等に行う。 中坊主とも云う。
ネボリ(根 堀 り)	支柱の脚元がずれないように、又は落着くように、脚元地盤を硬い地盤中迄柱より、少し大きめに掘り込んだ穴を云う。「枠釜」とも云う。
ネ リ	打柱・枠脚等の、根堀りに入る脚元部分を云う。
ノボリムキ(昇り向)	切羽面の進行方向が、昇方向のこと。
ノボリワク(昇 り 枠)	横枠のこと。昇坑道支柱は多くは横枠をつける。昇留とも云う。
ノ ミ	「たがね」のこと。
ハイシャコウゾウ (背 斜 構 造)	褶曲の波の山に当たる、地層部分を云う。
ハイバン(配 番)	仕事の配役を、決めること。
バクフウド(爆 風 戸)	爆発の際、主要扇風機を保護する為のもので、扇風機に通ずる風道の途中より別に地表と連絡し、この連絡口に蓋をし漏風がなく、微風により軽く開くようにした通気装置を云う。
ハダカコウドウ(裸坑道)	無枠の坑道を云う。
バ ッ ク	排水用や、揚水用の為に設けられる水溜めを云う。
ハドメ(歯 止 め)	車道と軌条との間に、挟める車止め用具を云う。
バラス(ば ら す)	外力を加えて、崩落を起こさせる場合を云う。

バンシタコウドウ (盤下坑道) ヒキワリ (挽き割)	炭層の下盤側岩石中に、掘さくした坑道。 坑木を縦に、二つ割りにしたものを云う。打柱・荷合棒等の笠木又は、中段坑道棒の矢木等に多く使用される。「半割」とも云う。
ヒコウキ (飛行機)	炭車が、斜坑を逸走することを云う。
ヒッタテ (引立)	掘進切羽面又は坑道切詰めを云う。「詰」又は、「どん」とも云う。
プーリ	力を伝達したり巻上げたりする爲に、ロープ・ベルト等の方向を変える案内車のこと。
フカシボウ (吹かし棒)	発破孔の練粉掃除又は、込物が詰まった場合の詰まり排除等の爲、発破孔に差込み圧気を通す細長いパイプを云う。「プロパイプ」とも云う。
フケコウドウ (深坑道)	採炭部の、下側にある坑道を云う。
フナゾコ (舟底)	斜坑巻立部で水平坑道から、斜坑に向う実車線の一番低い地点を云う。
フマエ (踏前)	坑道の、床面を云う。
フライアッシュ	石炭火力発電所の排煙中から、電気集じん機で採取した灰の内、主に50～100ミクロンの粒子のことで、坑内流送充てん材料やセメント混合用、土壌改良等に利用される。
フナムキ (噴霧器)	浮遊炭じん抑制の為、水を噴霧させる器具を云う。
ボアホール	発破孔・ボーリング孔のように、穿孔された穴を云う。
ポイント	軌道分岐装置の、軌条切替をする部分を云う。
ボウスイタンチュウ (防水炭柱)	坑内出水の危険がある時、残す保安炭柱を云う。
ホゴタンチュウ (保護炭柱)	地表物件を保護する為に、残す保安炭柱を云う。
マキタテ (巻立)	巻卸斜坑より水平坑道に入る分岐部を云うが、現在は一般に斜坑・水平坑道を問わず、運搬坑道の分岐部を云う。
マサメ (柁目)	切羽面に直角にある炭理の状態を云う。斜めの場合は「半柁目」と云う。

マヌケ (間 抜 け)	杵と杵の間から、天盤が崩落すること。
マンロープ	斜坑等で人が楽に昇って行けるように、ロープをエンドレスに敷設し、これを運転して人を引張り上げる装置を云う。
ミズダナ (水 棚)	坑道天井側に吊棚を設け、ビニル製水袋を吊り又は水を入れた水槽を乗せた、炭じん爆発伝ば防止装置を云う。
ミ ズ タ ン パ	ビニルの細長い袋に、水を詰めた発破用込物を云う。
ミッペ (密 閉)	通気を遮断する、構築物を云う。
ムカイボリ (向 掘 り)	A坑道から掘進してB坑道に貫通させる場合、B坑道側からも掘進することを云う。
メクラコウドウ (盲 坑 道)	排気坑道のない、1本坑道を云う。
メルカプタン	正しい名称は、エチルメルカプタンであるが、強い臭気を有する液体で、坑内で重大災害が発生した時に、気流中に放出し風下の作業者に警報するのに使用される。
モクシテンケン (目 視 点 検)	「見 診」のこと。
モクヒ (木 樋)	木製の排水溝用の、樋を云う。
ヤ ギ (矢 木)	杵と杵との天井、側壁を囲うのに使用する細い坑木を云う。
ヤマカタメ (山 固 め)	天盤が悪くなって危険な状態の所に杵を施し、又は杵を補強したりする仕練作業のこと。
リュウソウ ジュウテン (流 送 充 て ん)	坑外や坑内のプラントから、フライアッシュ・細研・火山灰等の充てん材料を、水と混合させてパイプ中を流送させ、払肩・深や蜜閉個所の充てんを行う方法を云う。
リ ン グ ワ ク (リ ン グ 杵)	円形杵のこと。
レールゲージ	軌道の軌条内側の距離を云う。
レ ッ グ	さく岩機支持具の一種で、圧気により伸縮し支持と推力を行う。
レッグハンマ	レッグを具備した、ハンマドリルのこと。

レバブロック

引張り作業に使用する器具の一種で、棹（レバ）を動かして操作するもの。単に「レバ」、「ブロック」とも云う。

ロウエイデンリュウ
（漏洩電流）

電気機器、配電線等の絶縁不良、接続不良等で電流が漏れ、大地に流出する場合を云う。

ロウキョ （籠 居）

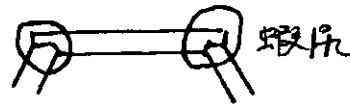
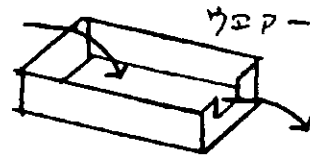
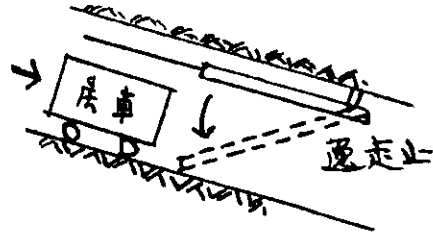
ガス炭じん爆発、その他重大災害事故が発生し、坑内より脱出出来なかった場合、安全な個所に避難して救出を待つことを云う。

炭鉱用語解説と図解(笹尾 了祐)	炭鉱用語集(北・九、鉱山保安センター監修) 石炭用語集(通商産業大臣官房調査統計部監修)
アイカタ (相 方、向う方)	相 方、向う方
アイズ (合 図)	信号線、合図線
アンドンシャ(行燈車、道中車)	安導車、導中車
アラトコ(新 床、地 山)	新山
イタメ(板 目)	板目
イワ(岩)	玉石、松岩
エブ	ぼげ
カキイタ(搔 板)	かき板、がすかき
クリコ (粉)	繰粉
ケイハイ(珪 肺)	珪肺症、けい肺病、ヨロケ
コウシュタンコウ(甲種炭鉱)	甲種炭坑
サクガンキ(ドリル、デムパー)	サク岩機、ドリル
ザンリュマイト(残留マイト)	残留火薬、不発残留マイト
タカオチ(高 落 ち)	高落ち、高抜け
タテイレコウドウ (立入坑道、盾入坑道)	立入坑道、立入、クロスカット
ツナギ(繋 ぎ)	つなぎ棒、タイロット
ツリバコ(吊 函)	吊 函(つり かん)
ツレオロシ(連 卸)	連卸、副卸、添卸
トンボ(蜻 蛉、坊 主 柱)	トンボ棒、トンボ柱
ニバンカタ(二番方、乙方)	2交代
ノボリバシラ(昇 柱)	昇棒、昇留
フナゾコ(船 底)	舟底
ホホヅエ(頬 杖)	頬立(ほおりつ)
マツイワ(松岩、珪化木・ケイホル)	松岩、玉石
ムコウ(向 う)	向掘り
メヌキ(目 貫)	目抜、目貫
メヌリ(目 塗 り)	目塗り、目張り
ヤゲンシャ(矢玄車・エンド・シープ)	薬 研、矢 弦
ワクアシ(杵 足)	杵脚
ワクビキ(杵 引 き)	杵曳、杵引き

炭鉱用語解説集 常磐地区

炭鉱用語解説集 常磐地区

アカマリ (あかまり)	温度、湿度の高い坑内で激しい労働を行った時に陥る熱中症（日射病と同じ症状） 転じて、まいった、くやしい、疲れた、困った時に使われる。
アガリハッパ (上り発破)	その方の作業の最後にかかる発破。
アソーブス試験	石炭中の揮発分を化合水分、タール分、ガス分に細分する分析法。
アトヤマ (後山)	九州で言う「先山」に対する補助要員。 比較的技量の劣る作業員。
アンコ	火薬装填後の発破孔に装入する粘土で造った棒状の詰め物。 九州では「ギチ」と云う。
イッソウドメ (逸走止)	斜坑で炭車が逸走するのを防止する装置。
イヌクグリ (犬潜り)	通気戸の中に造った人間が 出入りするための小さな通気門。
イワノビ (岩延)	岩石坑道掘進のこと（炭延は石炭坑道掘進）。
ウェアー	水量測定器具。
ウエットサイクロン	水中に懸濁する微粉または固形物を回収するサイクロン（濃縮器）。
ウワヤマ (上山)	片磐坑道で炭層傾斜の上側（下側を下山）。
エビジリ (蝦尻)	梁の端の部分。
オイギリ (追切)	坑道の側壁を掘進すること。
オシコク (押石)	石炭を積出す際、踏み押して増し積みすること。
カクガイタン (格外炭)	従来廃棄した硬または沈殿泥から回収した販売先の少ない低質炭（低カロリーの粉炭および細かい粒度で水分の多い沈粉など）で自家用に供する規格外石炭。 これに対し決定出炭に計上する販売炭は格内炭という。
カツア (搔砂)	九州では「搔板」と言う。

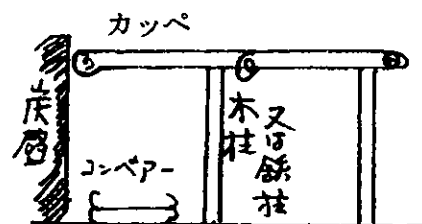


カツトウ (割当)

請負給の取り分を示す格付け。

カッペ

長壁式採炭に使用される金属製移動式梁。これにより片持梁の天井支持が出来採炭の機械化が進む。



カボウ (火防)

自然発火のことを言う。自然発火警戒夫を火防屋と言う。

カマキ (過巻き)

規定台数以上の炭車を牽引すること。

カマボコ (蒲鉾)

板の上に身を横たえて仮眠すること。

カヤクバコ (火薬箱)

火薬類を搬送する木箱。

ガラポンブ

スリースロー往復動ポンプの通称 (運転中ガラガラと音がする)。

カーリット

炭鉱用爆薬の一種 (過塩素酸塩を基材とする)。

カンセン (乾選)

塊炭の手選別、または脱塵の目的でサイクロン等で原炭中の微粉分を捕集する乾式選炭。

カンリョウシュッタン
(監量出炭)

坑内から搬出した実函をチップラー等で受入れる際、監量係が空引と硬引を行い監量出炭とする。採炭夫の請負給を決める。

キカンタンベース
(気乾炭基—資料)

乾湿の差が少ない外国では室内に放置し、大気中の湿度と平衡した試料をベースに分析する。

外国炭の輸入が多くなったので J I S でも気乾炭ベースによる分析、カロリー測定を追記した。

キツケボリ (切付掘)

枠を入れ切羽面をきれいにならして交代する掘進方式。

キョウセイバツスイ
(強制排水)

水位低下のため水脈に向かってボーリングをして強制的に水を抜くこと。

ギンカ (銀貨)

ゼニ (銭) の普通の呼び名。

キンク (きんくする)

ロープの振れ。

クウビキ (空引)

坑内から搬出した実函を監量係が検定し、炭車の上縁から切れた分量を%で表示する。九州では欠引という。(アキビキとも言う)

クジリサゲ

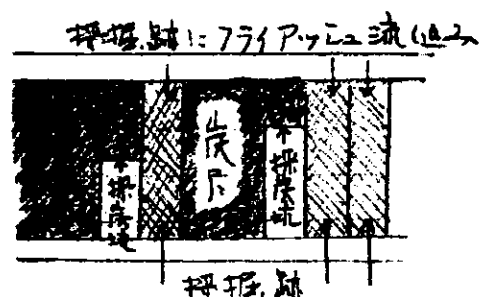
軌條の道床を下げること。

ケショウスイ (化粧水)

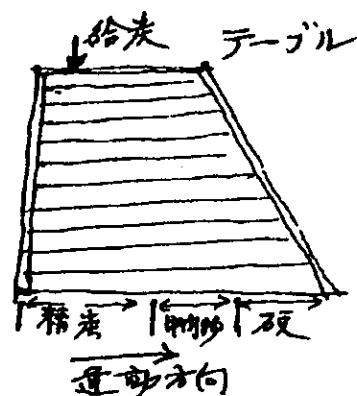
選炭後の精炭には重質剤や泥分が付着するので最終の篩上でスプレー (圧力水) で洗滌する。この水を化粧水という。

ケッキン (欠斤)	石炭を販売、または貯炭を払い出した際、当初の予定数量より少なかった量を欠斤という。
ケッテイシュッタン (決定出炭)	選炭後の精炭量で輸送量 (販売量) と貯炭残量から決定する。
ケントリ (間取り)	石炭や岩石の掘進坑道の伸び尺を測ること。これにより賃金が支払われる。
ゲンソブンセキ (元素分析)	J I Sにより調整した試料を炭素、水素、窒素、硫黄、酸素、塩素、磷等の化学成分で表示する。
コウサイコウフ (交際鉱夫)	兄弟同様の契りを交わした鉱夫の集団。九州の山中交際に似た様な存在。
コウシッタンベース (恒湿炭基一資料)	乾湿の差が著しい日本では食塩飽和液で一定にした恒湿器の中に一昼夜放置し、平衡状態にした恒湿試料をベースとして分析する。 J I Sによる試料調整法である。
コウギョウブンセキ (工業分析)	J I Sにより調整した試料を固有水分、灰分、揮発分、固定炭素の4成分で表示する。
コウナイショキ (坑内書記)	坑内で事務作業をする者。
コシジロ (腰白)	坑道掘進中測量係によって坑道側面に高さを示すために塗られた石灰溶液。
コロ (木呂)	九州の行燈車 (道中車) や導中車を云う。
サイスウ (才数)	昔、石炭の販売は捌売りで銘柄毎に1トン当たり何才 (何立方尺) であるかを検定し、容積トンで売買した。即ち1トン45才の石炭30トンは $45 \text{ 才} / \text{t} \times 30 \text{ t} = 1,350 \text{ 才}$ (1,350立方尺) となる。 この方法では水分超過などのトラブル起きない。
サガリブツ	購入代金が差し引かれて給料が赤字になること。帳面つけの伝票で現金なしで生活用品の一切を売店より買い物が出来た。
ササベア (部屋)	坑内詰所の古い呼称。新しくは交番所とも云う。
しかーし	いやだ、情けない、生憎だという意味で炭鉱女性一般で連発された女性語。
シケンミチビ (試験導火線)	導火線発破で点火後、退避の時を知らせるための雷管が付いていない導線。発破導火線の1/3程度の長さの試験導火線にまず点火し、それが燃え切ったら作業途中でも退避する。
ジグ (跳汰機)	上下動する交替水流で原炭を比重別に成層し選別する選炭機。 交替水流をエクセントリックでつくるプランジャージグと、圧縮空気を空気バルブで送るバウムジグがある。

シツブン（湿分）	石炭表面に機械的に附着している水分で、到着した石炭と恒湿試料との水分差を湿分という。
ジュウヤン（重選）	磁鉄鉱等の粉末を水中に懸濁させた疑重液により選別する重液選炭
シュクブン（縮分）	大口ロットから分析試料を得るにはロットの各所から平均に採取し大量となるため、これを粉碎の後、円錐四分法（交互ショベル法）や二分器によって順次試料を分割、廃棄しつつ必要量の試料を得る。この操作を縮分という。
シロカンモチ（白缶持）	坑道の中心線等を入れるための石灰溶液を入れた缶を持ち歩く測量の後山。
ジャンボン	お葬式のこと。
ジュタンカロリー （純炭発熱量）	工業分析の不燃物の固有水分、灰分を除き可燃分の固定炭素、揮発分のみで100%とした時の発熱量で炭質分類の指標である。 $\text{純炭カロリー} = \left(\frac{\text{発熱量}}{100 - \text{灰分} \times \text{灰分補正率} - \text{水分}} \right) \times 100$
スクリーン（篩）	石炭を粒度別に分ける「ふるい」で、固定式（バースクリーニングリズリー等）、回転式（トロンメル）、揺動式（セーキング・ジンマースクリーン）、振動式（ローハットスクリーン）等がある。
ストール採炭	追切しては、フライ・アッシュを流し込み、稿馬状に採掘する採炭法。 自然発火を防止するために採用。
ズリ（硬）	九州の硬（ボタ）を云う。
セワショ（世話所）	炭住の中にあって住民の日常生活万般の面倒を見るための事務所。労務係所属。
センブハイスイ（浅部排水）	浅部の採掘跡（旧炭砦）に流入した地表水が、深部にある坑内に浸透するのを防ぐため浅い所で受け止めて排水すること。
ソスイコウ（疎水坑）	排水を目的とした坑道。
タイグウシキツウキ （対隅式通気）	入気坑口と排気坑口が遠く離れている通気方式。 斜坑口で入気を取り、奥部の立坑で排気する等。
タンガラ（炭殻）	九州の石殻を云う。
タンコツ（炭鉦杖）	係員や主任が坑内巡回の時に持ち歩く杖。



タンピョウ (炭票)	自分が掘った石炭であることを示す炭札。炭車につけて坑外に搬出する。九州の炭標に類似。
ダンソウ	岩盤のこと。炭層を掘り進むうちに断層に逢着し、岩盤が現れたことからこう呼ばれている。
チカゾウオンリツ (地下増温率)	地温が1℃上昇する深度。 因みに常磐炭砒では15m前後で1℃上昇。
チャクトウシヨ (着到所)	坑口で入出坑者を確認するところ。
チンプン (沈粉)	選炭廃水中からウォーターサイクロン等で回収または沈殿池に沈降した固形物で、石炭分を多く含む沈殿微粉炭で水分を多く含む。
ツボシタ (坪下)	斜坑坑底の水平坑道区域。
デキン (出斤)	石炭を販売したり、または貯炭を払出す際、計量すると目標数量より多い分を出斤という。
テセン (手選)	塊炭をピッキングバンド上で手作業により精塊・中間物・硬と選別する作業。この女子従業員を選炭婦という。
テッポウ (鉄砲)	鉄砲発破は発破が空吹きに終わった時、鉄砲延びは単独で掘り進んだ掘進坑道。
テーブル (淘汰盤)	多少傾斜したテーブル上に25mm位の間隔で多くの栈木を並べ、水流により精炭、中間物、硬とに分ける。 揺動するテーブルもあり微細粉の分級に好成績。
デレスケ油	炭車の車軸油のこと。
トウシバン (通し番)	番方を続けて勤務(連勤)すること。
トクメンクイキ (特免区域)	甲種炭砒にあつて、特に安全と認められて乙種炭砒扱いになる区域。
ドマグレ	炭層の褶曲をさす。九州では炭車の脱輪をいう。
ドベラ (どべらかき)	沿層坑道の側壁(側壁を削り取る)。
ドライアッシュ フリーベースカロリー (無水無灰基発熱量)	工業分析の不燃分である固有水分・灰分を除き、可燃分の固定炭素、揮発分で100%とした時の発熱量。純炭カロリーともいう。 ロシアではドライアッシュフリーベースで表示する。



ドライベースカロリー	工業分析の固有水分を除き、灰分・揮発分・固定炭素で 100%とした時の発熱量。中国等ではドライベースで表示する。
ドンコロ	坑木の切れはし等をいう。
ニアガリカイ(二上り会)	土曜日の二番方昇坑後は最も気分的にリラックスする時で、仲間と酒を飲み交わす。
ニッキンボウ (日勤坊)	巻揚機やポンプ等の重量物を扱う部隊で、力あり元気者の表徴とされる。
ネボリ (根掘り)	梓足の位置を掘り下げること。
ネンリョウヒ (燃料比)	工業分析の可燃物である固定炭素／揮発分の比で、この値が大なる程炭化の進んだ石炭で、炭質分類の指標である。
ハウスコール (家庭用・厨房用炭) (ホームコール)	燃料比 1.5～1.0 程度の非粘結性の石炭（亜瀝青炭～褐炭）で、着火燃焼性がよく硫黄分やタール分（煤煙がでる）の少ない一般炭が賞用される。
パクリ (ぱくる)	物と物との交換（交換する）。
バツタ (ばったする)	炭車の脱線のこと。転じて会社を休むことを「ばったする」。 片輪だけの脱線を片バツタ、両側の場合は両バツタ、4 輪が脱線した時は 4 つバツタ又は大バツタ。
バツタリー	九州でいう通気門戸。 通行中の通気短絡を防ぐため、炭車が入っても開閉が十分出来る適当な間隔を置いて設けた二重門戸が一般的で、漏風防止上三重門戸にする場合もある。入排気の差圧が大きい箇所では門戸を開け易くするために小門をつけることもある（犬潜り）。
ハーモニカナガヤ(長屋)	ハーモニカの穴のように一棟に何軒もある炭住長屋。
バンチョウ	順番のこと。
パンツァーコンペアー	屈曲自在なコンペアー。ドイツで考案された。
ヒッタテ (引立)	坑道の前先端、前奥部。
ヒヤク (日役)	請負給化がしにくい作業で、1 歩幾らで支払う賃金形態。
フイゴまつり(ふいご祭)	鍛冶屋の祭り。
ピンキリ	ロープと炭車、炭車と炭車を連結するピンを抜き取る作業。

フィルター (濾過器)

微細粉炭の脱水に使用する真空濾過器等。

フセン (浮遊選炭)

浮選剤を使用し 24mesh 以下の高カロリー微粉炭を回収する。
泡沫浮選が一般的で攪拌によって発生した気泡に微粉を附着させ分離する。

フセンフロス

浮選で回収した微粉炭を含む泡沫。脱水が困難で通常は真空濾過器を使う。

フナゾコ (舟底)

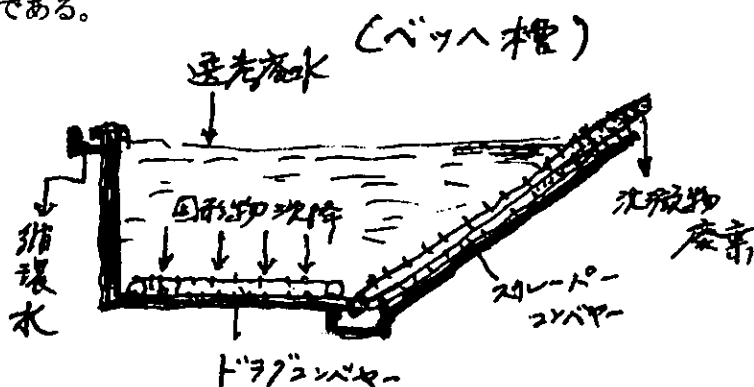
大きく凹んだ坑道部分。

フライアビリティ

石炭の破碎し易さを示す単位。
因みに常磐炭砒西部炭は 20 内外でホーベル採炭がやや可能。
東部炭は 10 内外と非常に硬くホーベル採炭不能。

ベッヘ槽

選炭廃水処理する小型沈殿槽で、沈殿物を連続的にドラッグコンベアーで掻き寄せ、槽の一端に設けたバケットエレベーターまたは槽の斜面に沿って設置したスクレーパーコンベアーで、水面上に掻きあげる沈殿物連続処理装置である。

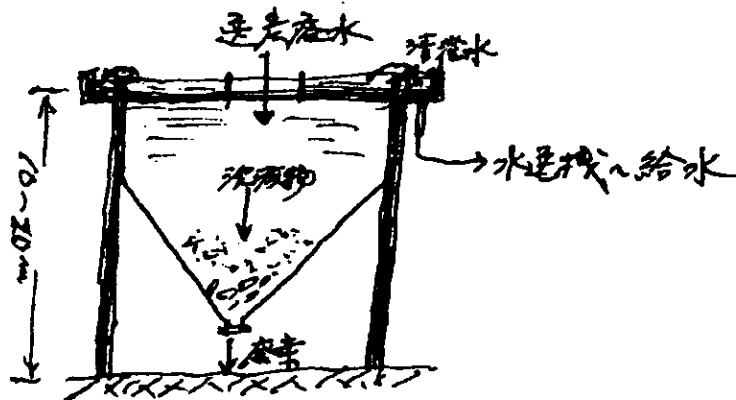


ヘドロ

選炭汚水。

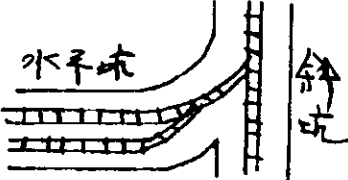
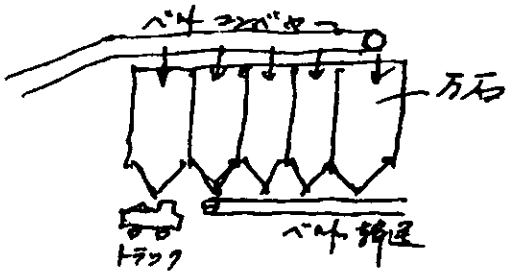
ポインテッドボックス

選炭用水として再利用するには、循環水中に含む固形物を沈降させ清澄化すると共に、水選機への給水圧を一定にする目的の塔型の装置で、シクナーと給水タンクを兼ねた設備による。



ボス抜け

天盤の一部が枠間から抜け落ちること。

ボタビキ (硬引)	坑内から搬出した実函をチップラー等で受け入れる際、監量係が原炭中に混入する硬量を検定し%で表示する。硬引の比率(%)は選炭後の精炭量(決定出炭という)を勘案し調整する。 九州では検定というが硬量の甚だしいものは秤量検定する。
マキタテ (巻立)	斜坑から水平坑に移る分岐点。 
マキキリ (巻切り)	巻上機を止める意から仕事を切り上げることにいわれる。
マヨイコミ (迷い込み)	選炭の場合分離比重に近似のものは、石炭が硬中に逃げたり硬が石炭中に誤入する。これを迷い込みという。迷い込み量が少ない程分離成績はよい。同じ原炭でも選炭機の構造や製作精度により異なる。水選機は重選機より迷い込みが多い。
マンゴク (万石)	ベルトコンベアー等で石炭を搬送し貯蔵する石炭庫で、通常漏斗型になっている。ポケットともいう。九州ではホッパーと呼ぶ。 
ミチビ (導火)	導火線。
ミズヌキコウ (水抜き坑)	水没区域の水抜き、水位低下のための水抜き等、水抜きを目的に掘られた坑道。
ミズプロ (水風呂)	高温多湿下の作業環境で体を冷やすための坑内の水箱。
モクレンガ (木煉瓦)	坑木を粘土で固めながら積み重ねる坑道密閉用構築物。
モロワク (諸杵)	九州の荷合杵をいう。
ヤギ (矢木)	梁と天井の間に使われる細い坑木。
ヨメサマ	縦長の重量物を左右に揺すりながら移動すること。
ヨロケ	九州での硅肺。
レオラボール (樋流式水洗機)	原炭を水と共に樋を流して選別する。 傾斜の比較的急な分級部と硬抜用レオ函を備えた緩傾斜の水洗部に分かれており、構造簡単、建設費が安いと主選機以外の付帯設備(主選前の粗選機等)として採用される。

炭鉱用語解説集

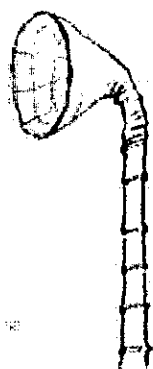
宇部地区

アイノコボリ (間の子掘)

宇部炭田では明治26、27年頃に蒸気巻揚機で斜坑運搬をするかのように南蛮を利用して斜坑の石炭巻き上げが行われたことがある。これを「あいのかぼり」といった。(宇部市史)

アゲアナ (上げ穴)

堅坑の巻き揚げに南蛮を使っていた頃、坑道から地上に向けて堅坑を掘ることを「上げ穴を掘る」といった。

アサガオ (朝顔)

人力だけに頼っていた時代に、割り竹で朝顔の花の形に編み、紙や布を貼って風の吹く方向に向け、堅坑口から坑内へ空気を送った。大きさは径2メートルくらいあった。

第1図

イキラスル (息をする)

坑内で水が出たり、止まったりすることを、水が息をするという。

息をする水は穏やかに終焉することはなく、必ず激しく吹き出す。大出水の前兆のことが多かった。

イッサンボリ (一散掘)

旧藩時代から、宇部の炭坑は、毎年晩秋から始めて春に終える事が多かった。これを一散掘と呼んだ。継年堀(一年を通じて採掘する炭鉱)に対する言葉。

この一散掘は明治2年～5年ごろまで行われた。すなわち、立坑堀は籠で行い、その防水は蒸杵を用いた。採炭は蓮根掘、運搬は南蛮またはセナ、灯具には燈明やカンテラが用いられた。

イレコ (入れ子)

ワイヤロープの損傷部分の一部を切り除き中古あるいは新品ロープを部分入れ替えるために入れるロープのこと。

ウムシワク (蒸杵)

沖積層中に開坑し、砂利水を完全に防止するための宇部地方独特の杵入法。「ムシワク」ともいう。立坑には六角または八角蒸杵が用いられ、斜坑には斜坑蒸杵が使われた。いずれも明治19年頃船大工和田喜之介の考案による。

「ロッカクムシワク」、「シャコウムシワク」の項参照。

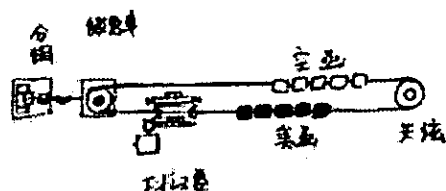
ウンジョウキン (運上金)

毛利藩は明治2年(1765年)ごろから有帆川に代官所舟木宰判の船改所(ワタタビシヨ)を設け、石炭を積んで下る舟から一荷(37.5キロ)2文の運上金(税)を船主に課すことで出帆免状を与えた。別名運上銀ともいう。

エビジリ (えび尻)

第2図

木材で坑道の支柱ワクつを作るとき、杵脚と梁がかみ合うように鋸と斧(よき)で切りこみをする。梁の方の切りこみを「えび尻」と言う。

エンドレス

第3図

炭車を牽引するワイヤロープが一つの輪となっていて、そのロープを巻上機で駆動し、両端を矢弦車で折り返す運転方法で、このロープに炭車を「グリップ」で連結し連続的に石炭を運ぶ。

オオコ



第4図

天秤棒のこと。昔の斜坑運搬はオオコを使った「にない運搬」で石炭が運び出された。いわゆる筑豊でいう「セナ」による運搬であった。立坑の場合は南蛮が利用できたが、狸掘りの多かった有帆では「有帆の若衆はどこでも知れる。背にオオコの跡がある」と唄われた。

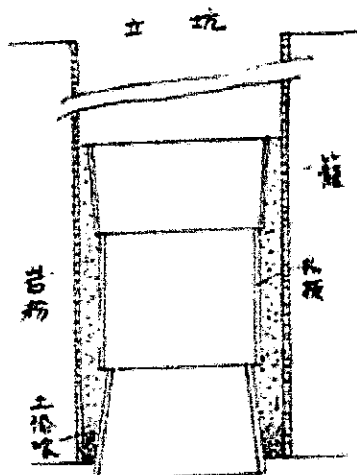
オオサッサ

大失敗の意。機械が壊れた時や、炭車の大脱線事故が起きたときなど「おおさっさをやった」と使っていた。

オオドオシ (大通し)

幹線坑道から出る支線坑道を大通しという。片盤坑道の親となる坑道をいう。

オケワク (桶枠)



第5図

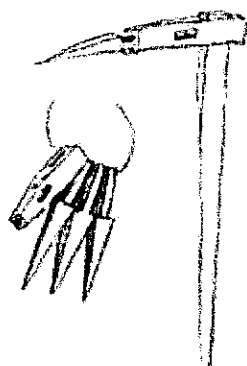
沖積層からの湧水を防ぐために丸桶を作り、底のない桶を幾段にも重ねて継目には檜皮縄(マキヅナ)を入れ、岩粉と漆喰で圧密とした。六角蒸杵が出現する前の立坑の防水法であった。

オハシタ

お早うございますという意味で宇部地方の坑内の挨拶語として使われた。大嶺地方では「御安全に」ですべてが通用した。「オヤシタ」とも言った。

カイリョウツル (改良つる)

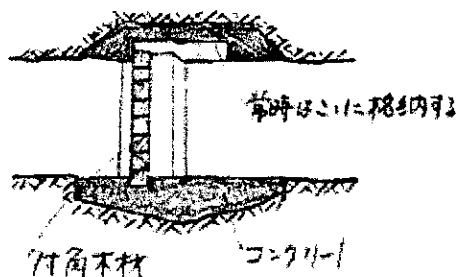
昔、鶴嘴(ツルシ)は石炭を掘る重要な道具であったので、つるはしの先を常に研ぐ



必要があった。昭和の初め頃、宇部で脱着可能な「つるはし」が考案され、坑内「つるはし」の主流となった。

第6図

カクオトシダム (角落としダム)



第7図 (側面図)



第8図

非常出水の緊急対策として坑道の地盤の良いところを選び設けられたもので7寸角の木材を溝に沿って落とし込み、水流を防ぐ簡易ダム。宇部炭田では緊急時に備えて各所に設けられていた。

カグリ

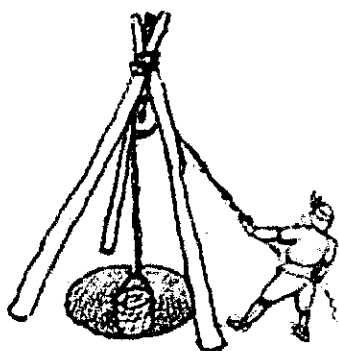
宇部地方における炭鉱の初期の採炭方法。当時は浅い井戸を掘って着炭し、運

根掘りで採炭していた。運炭は「かなまた」を用い、滑車を使って土や石炭を盛った目籠(メ)を引き上げた。地上にいる「鼻取り」がロープに手を掛け目籠を引っ張り揚げる。この動作を「かぐる」という。このような作業方式を「かぐり」といい、一般の井戸掘りの場合にも使われた。第9図参照

カグレ

南蛮車で石炭などを巻き上げるときに歌われた「なんば唄」(なんば押せ押せ鼻取りやかぐれ)の中に出てくる「かぐれ」は手繰れという意味で「ボヤボヤしないですぐ早くやって!」といった意味を含んでいる。

カナマタ (かなまた)



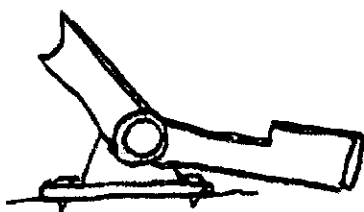
第9図

3本の柱の一個所を括って脚を拡げさせ、又銃(サヅク)の如くに立てたもの。初期の炭坑では「かなまた」を立坑櫓の代わりに使っていた。一名「まだき」ともいう。

カラス (からす)

宇部炭田の五段層と袴腰層との間にある炭丈20cmほどの炭層名。非稼行の炭層。

カラス (烏)



第10図

斜坑で炭車の暴走を受け止める器具。烏

のとまったような形で、炭車が昇るときは車軸が頭を押さえて通る。そして尻尾の方が重くできているのですぐ頭を持ち上げる。炭車が逆行するときは、その頭が車軸を受け止めて暴走を防ぐ。

カルイ



第11図

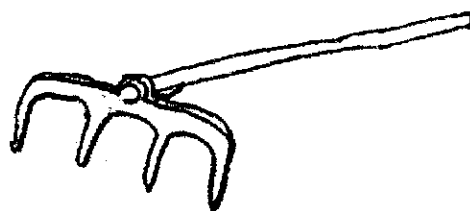


第12図

「すら」という「そり」を小さくしたものに石炭を入れた目籠(メ)を載せ、炭車のところまで引っ張る道具。

麻で編み両腕を通すと背中でタスキをかけたようになり、素手で引っ張るより遙かに軽い。背中に当たる部分は鎖となっており、低い坑内の天井で、こすって怪我をしないようにしてある。

ガンツメ

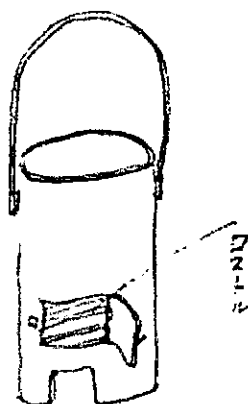


第13図

かき板と同じ役目の道具で70cmくらいの柄が付いた手指4本を拡げたようなもの。

石炭などの塊(カマリ)を掻き込むのに便利な小道具であった。「めごへよつ」ともいう。

カンテキ (かんてき)



第14図

鉄製の七輪のこと。

カンヌキ (貫抜)



第15図

炭車逸走防止のために使われた横木。普通20-50kg/mの古レールが使われた。

カンヌキ (貫抜 門)

牛蒡木固(ゴボウキ)が圧力で移動、崩壊しないように施す横棒。

牛蒡木固 第17図参照

キング

炭車の脱線で牽引器具のグリップがワイヤロープをすごいだり、滑車からロープが外れて元に戻らずに二重、三重のリング状になること。英語のキングの訛り。他人の鉱区を借り、採掘量に応じて支払う権利金のこと。

キンタマ (きんたま)

エンドレス巻揚機のワイヤロープの張りは巻揚機後方の軌道上にある矢弦車を載せた緩急車と天井から吊り下げられたテンションウェイトにより保たれている。これに使われる分銅のことを「きんたま」という。

機械学的には「テンションウェイト」といわれるものである。

「エンドレス」の項参照。

クジリサゲ (くじりさげ)

天盤や側壁から重圧で下盤が膨れて、支柱の梁や脚につかえて炭車が通らないとき下盤を掘り下げて通るようになる。そのとき、軌道を敷いたまま枕木の間から下盤を掘り下げのことを「くじりさげ」という。

クリカラモンモン (俱利迦羅紋紋)

俱利迦羅竜王の背中に施された「いれずみ」のこと。宇部では移入した坑夫に「いれずみ」をした暴れ者が多かったので、村民の恐怖の的であった。よってこの言葉が残ったのであろう。

クリヤ (繰矢)

宇部の旧式の炭坑では、地上に或距離を置いて立坑を幾つも掘り、坑底には横坑を幾本も掘り、遂には甲坑と乙坑の横坑がつながる。これを俗に「繰矢」を通すという。

グレル (ぐれる)

飲酒したり、喧嘩したり、常軌を逸した行いをする。転じて炭車が脱線すること。

ケアゲリョウ (毛上料)

農閑期を利用して石炭を掘った時代には、採掘が終わると、地主や耕作者に作物の補償金を支払うのが通例であった。この補償金を毛上料といった。「けじょう」とも言う。

ケイネンボリ (継年掘)

昔、農閑期を利用して石炭を採掘していた頃(明治前)までは秋から冬にかけて石炭を掘り、春から夏にかけ農業を営むのが普通であった。石炭が塩田用などに利用され始めると石炭掘りを専業とするようになり、通年で石炭を掘り出した。前者を一散掘りといい、後者を継年掘または通年掘という。

ケツグリ (けつぐり)

けつは尻で一番後ろ、ぐりはグリップのこと。連結炭車の最後部をグリップでロープに連結して炭車を押す方法を「けつぐり」、「けつを練る」という。

コウシ (鉱士)

戦時中の炭鉱労働者に対する褒賞制度上

の呼称。採炭夫と掘進夫を対象に勤続年数、技能、出勤率等により4階級の称号を与え、優秀な者に「鉄の十字章」を授与し表彰した。

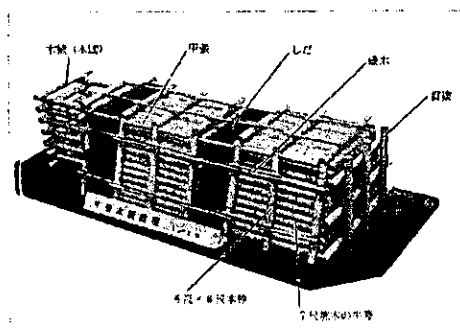
コウナイベコ (坑内ベコ)



第16図

婦人の坑内労働者がズロース（今のパンティ）の上に巻いた縦30cmくらいの短い腰巻き。「腰ベコ」、「きやるまた」、「まぶベコ」、或いは単に「ベコ」ともいう。

ゴボウキコ (牛蒡木固)



第17図

坑木を密に積んでその隙間に「しだ」を詰めて、水は流しながら軟弱な泥土の流出は防ぎ土圧でもって防水する工法。簡易防水ダム的一种で宇部地方の地質に適合した独特の初期の防水技術であった。

サエモノ (冴物)

宇部炭の代表的性質の一つで、加熱すると分解して灰がバラバラとなり、ロストルの下に落ちて通気の邪魔にならぬ特徴を持っている。非粘結炭の別名。

サキウケ (先受け)



第18図

掘進切羽では天盤が露出している部分を「ハネナル」または「ハネレール」で受

けて、安全に作業を行う。そのための保安器具。

ササベヤ (書写部屋)



第19図

炭鉱の坑内に設けられた事務所。炭鉱現場の最前線基地であり、電話、警報装置、誘導無線などの保安機器、鉱員の出勤札盤、工具保管場が付設され、坑内で働く人たちにとって大事な頼りになる場所であった。そうしたことから神棚を祀り、月初めには新しい櫛をささげる習慣があった。

シイレ (仕入れ)

炭鉱経営者が経営する日用品や仕事上必要なものの販売所。

筑豊炭田では売勘定といった。

シキズミ (敷炭)

試掘のための立坑が着炭すると炭質や炭層の厚さを調べるためにその坑の底だけの石炭を掘り揚げる。これを「敷炭を抜く」という。これが行われると沿層坑道を縦横に伸ばし採炭に着手することになる。(古語)

ジゴクモン (地獄門)

出水のおそれのある坑道に設ける防水ダムの俗称。閉めたら中の人はいられぬところからその名がついた。



第20図

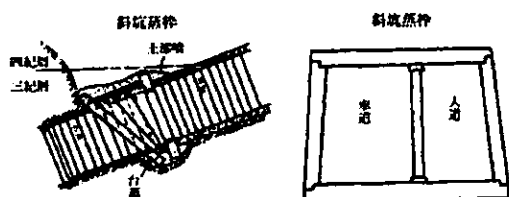
シツテ

ワイヤロープの先端のこと。

シモドシ (仕戻し)

炭坑を掘った後の田畑の復旧作業で、肥えた土に入れ替えて農耕ができるように戻すことをいう。

シャコウムシワク (斜坑蒸粋)



『中部炭田における海底炭層の掘りと保安について』より

第 21 図

海底採掘では自力で昇坑できるように斜坑を設けることが法的に決められており、湧水の多い宇部地方の沖積層を突破する施粋方法としてこの方法が最近まで用いられていた。この斜坑蒸粋は明治23年藤山村の船大工 和田喜之介により考案された。「ロッカクムシワク」の項参照。

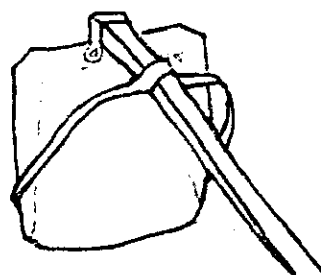
シュウスケ (しゅうすけ)

エンドレス巻上坑道における大きな脱線事故をいう。脱線してグリップから離れた炭車にさらに後続炭車が乗り上げ、支柱枠を倒して坑道を塞ぐほどになった大事故を「おおしゅうすけ」といった。

ジュウニンチョウ (十人長)

昭和初年までの炭坑(匿名組合)の労務管理の形態を十人長制と言う。その親方を十人長と呼んだ。配下に10~50人の部下を持ち、賃金決定に関与、出勤を督促し、配下の出勤率により組合より歩金を受けていた。「組頭」「納屋頭」とも言う。その後、この制度は自然消滅した。

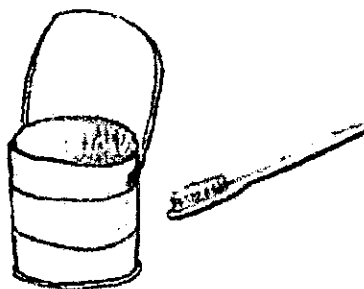
ジョレン (じょれん)



第 22 図

坑外の貯炭場などで石炭の掻き込みに使われた小道具。

シロタゴ (白担桶)



第 23 図

石灰の溶液を入れるブリキの容器。坑内係員の必携の道具であった。

スコグ

「シゴク」「スゴク」の炭鉋訛り。長い物を、一方の手に握りしめ、もう一方の手で引く抜くように強く手前に引くこと。(広辞苑)。ロープを「スコグ」という。すごがれたロープは提灯状となるので「チョーチン」になるともいう。

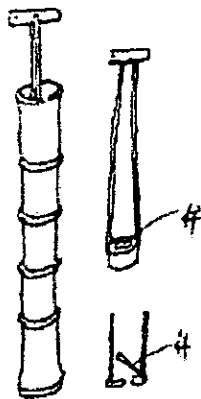
スッポン



第 24 図

手動の竹製のポンプ。まっすぐな孟宗竹の中をくり抜き、その中を弁のついた

ピストン棒を上下作動させて排水に用いる。明治から大正にかけて掘進先に溜まる



第25図

水をスッポンで取り除くのは主に女性の仕事であった。

鉱山では寸法（スホン）と呼ばれ（佐渡金山）角樋のものと竹製のものが使われていた。炭鉱に伝わり「スッポン」と訛ったものと思われる。

スモト

直径10cm以下の小さい坑木（丸太）の呼び名。「せんぼん」、「成木」ともいう。

スラ

切羽から炭車まで石炭を入れて運搬する長さ1m、幅0.4mの小さい籠（ワリ）。
採炭が個人作業であった頃、石炭を入れた「目籠（メコ）」をスラに乗せて、炭車に積み込むところまで狭い坑道を這うようにして引っ張った。

「すら」には「かるい」がついていて、「かるい」の背中に当たる部分は金具となっており、天井や梁に背中が当たって怪我をしないように工夫されていた。

「カルイ」の項参照

スンボリ（寸掘）

昔の採炭法。蓮根掘りでは、まず掘進して石炭を掘り、後に本格的に採炭が実施される。開坑当時は掘進掘りで延べ1尺につき掘子に賃金が支払われる。これを寸掘という。「ニボリ」の項参照。

セケンシ（世間師）

南蛮で水を汲み上げるのを水ナンバといった。水ナンバのナンバオシは村落の婦

女子ではなくて、多くは旅から旅を渡り歩く放浪者の群で男も女もいた。このような人を世間師といった。

（宇部郷土史話）

ソコシ（底師）

旧式炭坑で、坑内で働く労働者をいう。坑外で働く者を「上師」（ウツシ）と呼んだ。

タブ（田生、炭生）

初期の採掘方法。「はぐり掘」「狸掘」からやや深いところを採掘するようになり、斜坑、立坑を穿つようになった。この坑を「炭生」という。又露頭に沿って短い斜坑を掘って採掘する炭坑を「坂たぶ」と言う。

ダイツボコウジ（大坪工事）



第26図

崩れ易い土質の第4紀層を取り除いて斜坑を掘さくする方法で、先ず土を取り除いて蒸杵で坑道を造り、坑道ができると取り除いた土で覆う一連の工事をいう。摺鉢状に掘ったものを「大坪」または「台坪」という。

ダンゴニナル（団子になる）

炭車が脱線して山のように重なったことを函（炭車）が団子になったという。

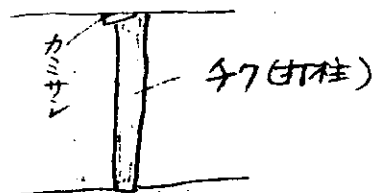
ダンベイセン（団平船）



第27図

長さ15m、巾5m、深さ2mくらいの扁平な船で、エンジンも帆もなく、4～5隻つないで、エンジンつきの船に曳航せられた石炭専用の運搬船。

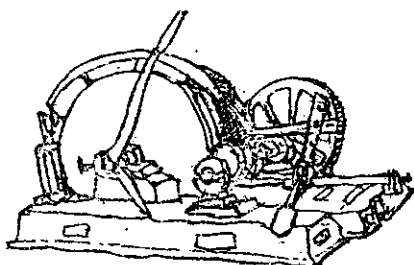
チク (打柱)



第28図

梁、成木を使用せず、単独に打った柱。
坊主柱ともいう。宇部独特の用語。

チャンガラマキ (チャンガラ巻)



第29図

小型コース巻 (7.5~10馬力) 第二伝導機構がフリクションで動力が伝えられているので正式にはフリクション巻ともいわれるが、歯車が鋳鉄であったため会話もできない程騒音を発したことからこの名前がついた。

チョウチン (提灯)

炭車を牽引する「グリップ」が緩んでワイヤロープをしごいだ為、撚り合わされている1本1本の素線がささくれて逆なでした状態となり、1ヶ所にかたまり、さながら小田原提灯のようになる。これをワイヤロープが「提灯になった」という。「スゴグ」の項参照

チンヅミ (賃積み)

昔は船主が石炭を買い付け、自ら販売していた (買積み)。明治後期頃より各地に問屋が出来、次第に船主は輸送のみを請け負うようになった。これを賃積みという。

ツダシ (津出し)

採掘した石炭を海岸へ運ぶこと (古語)。船着き場、または港を「津」といった。

ツノ (角)

木製台車の4つのかどが凸型に突き出て

いる。これを函の「つの」という。

ツポオチ (坪落ち)

地表が陥没すること。特に雨が降ると地下水が増加して古洞 (昔の採掘跡) を崩し、その影響が地表にまで達することがある。宇部地方では「坪抜け」とも言う。

ツム (錐)

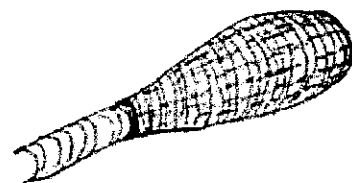
試錐を行うとき、地表に穿つ錐 (サ) 状の金具。試錐で炭層を探すことを「錐をつく」といった。

テッポウ (鉄砲)

炭車を押しても重くて動かないとき、その後にある軽く新しい炭車をぶっつけ、その衝撃を利用して重い炭車を押し動かす。この軽い炭車をぶつけることを「鉄砲を撃つ」という。又行き止まりになっている坑道を「鉄砲坑道」と言う。

テボ

- ① 石炭などを背負って運搬するカゴのこと。
- ② 小さいポンプの吸水管の先端に取り付ける割り竹で編んだツクシの形をした除塵用の竹かご。
「手棒」と書くこともある。



第30図

トイボリ (問掘)

炭坑を始めるために試掘すること。井戸のように垂直の穴を地中に着炭するまで掘ってみることをいう。

トウドリ (頭取)

山口炭田の炭坑が「匿名組合」と呼ばれる経営組織であった頃経営者の代表を「頭取」といい、事業に関する総ての権限を任された最高責任者であった。

トウリョウ (頭梁)

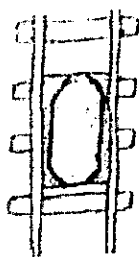
昔宇部では個人で炭鉱を始めるとき、自分が先山となり、番子や南蛮押しは雇った。炭坑の設備と販売は組合が担当した。

坑内は危険が多いので組合から指導兼管理者を出した。この人を頭梁といった。

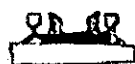
(山口炭田の民俗)

後の坑内技術職員のこと。棟梁とも書く。一散掘り時代には坑口ごとに小屋があり、その小屋の責任者を「固屋棟梁」といった

ドマグレハンドル



略して「どまはん」。軌条の真ん中に取り付け、脱線炭車を巻上機で強引に引っ張り、炭車の重量を利用してレールに乗せる装置をいう。



第31図

「どまぐれ」は脱線した炭車のこと。

また、常識を逸した人を「どまぐれもん」と言った。

トラレル (取られる)

急な出水やポンプの故障などで揚水不能となってポンプが水没することを「ポンプを取られる」という。

ドングロス

通気を遮断、またはコントロールするために坑道に吊り下げた麻布のことをいう。びら門に使用された。英語のローンクロス(麻布)が訛ってロングクロスと筑豊ではいっていた。宇部では更に訛って「ドングロス」「ドンゴロス」と呼んでいた。盗難から守るためにコールタールを塗っていたとのこと。(山本作兵衛絵巻より)

トンボ

外来語の訛で炭車の転覆、脱線したことを「トンボした」という。転じて失敗することを指す。語源は「タンブル」(tumble)。

ナゲセン (投げ線)

規格外の丸太などを枕木としてレールと組み合わせ、てこなどで移動させることができる簡易な軌道を「投げ線」という。

埋め立てるに従って移動ができるので、海岸付近の埋め立て地に多く見られる。

ナフダトリ (名札取)

坑内から巻き上げる目籠(めご)には石炭を掘った人を表示する竹札がついている。この竹札を取り、その日の採炭量を計算する仕事、または担当する人。札繰(ふだぐり)ともいう。南蛮を使った時代の言葉。

ナリミズ (鳴り水)

バルブの開閉作用による揚水ポンプは、水位が下がり、ストレーナーが露出すると、水と空気を同時に吸入してガブガブと音をたてる。多量の空気を吸い込むと一瞬にして揚水不能となる。「ポンプが鳴り水をつく」という。

ナル (鳴る)

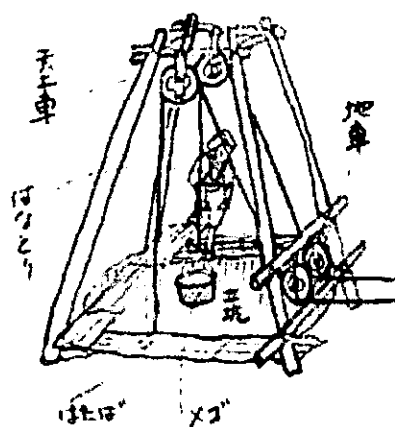
溜まっている水をポンプで干すと、吸水管の先端の除塵器から空気を吸い込んで音を立てる。このことを「ポンプが鳴る」という。

ナンバ (南蛮)

旧堀の炭鉱において坑内より石炭や水を捲上げるのに用いた(第32図、第33図)。天保11年(1840年)宇部の亀浦に住む向田九十郎は娘婿が経営する西沢の炭生(炭坑)が水で困っているのを見かねて、兄 七右衛門と一緒に発明したのが「南蛮」という木製の人力ウィンチであった。水や石炭を巻き上げるに用いる。南蛮車と書いて「ナンバ」と読む。従来の20~30尺の立坑が100尺以上の深さまで掘れるようになり、湧水の多い宇部地方にとって意義の深い発明であった。

この発明は後の宇部炭田の開発に多大の貢献をなし、今も宇部炭田の発祥の地常盤湖畔に顕彰碑が残って居る。又南蛮押しの女性達の労働歌が南蛮音頭として今も歌い継がれている。

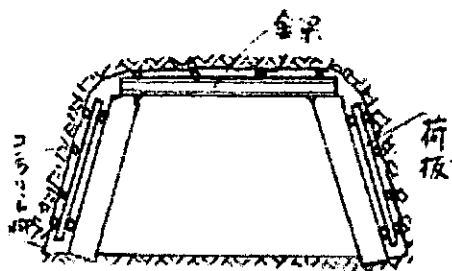
第32図、第33図参照。



第 32 図

ニヌキ (荷抜き)

コンクリート製の枠脚は側圧に対して弱い欠点があるので、コンクリート脚に集中して荷重がかからないように脚の裏側に空間を作り荷重を分散させるよう成木を組むこと。



第 34 図

ニボリ (荷掘)

昔の採炭法では着炭時掘子は掘進 1 尺につき賃金が支払われ、後に採炭が本格化すると荷掘りといって石炭一荷につき賃金が支払われる。採炭の請負のこと。

ネバリモノ (粘りもの)

加熱すると融けて固まってしまう性質を持つ石炭。主に九州三池、北松、の石炭は粘結性が高い。粘結性を有する瀝青炭をいう。「さえもの」の対語。

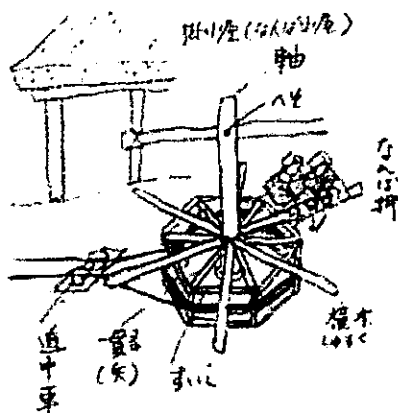
ネブリツケ

坑道の掘進面や石炭採掘面を茶碗の内側のように丸く掘ること。未熟練者のやることで、能率が悪かった。

一般には下盤に段差がある場合、これを緩傾斜でならすときなどにも使った言葉。

ハグリボリ (剥ぐり掘)

露頭より炭層に沿って横に掘り込んで採掘



第 33 図

する方法で、九州では「走込」という。
(「山口炭田三百年史」より)

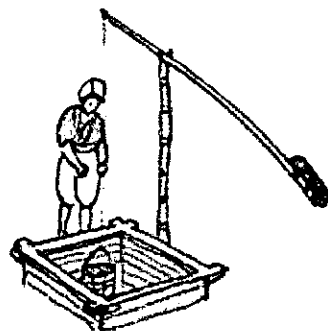
ハタバ (端場)

旧式炭坑の立坑口。南蛮のハナトリが作業する足場のこと。また、石炭を船に積み込む所も「ハタバ」という。これは波止場からきた訛か。 第 32 図参照。

ハナトリ

旧式炭坑時代、立坑の坑口において、南蛮から上り下りする桶や目籠を取り扱う人。 第 32 図参照。

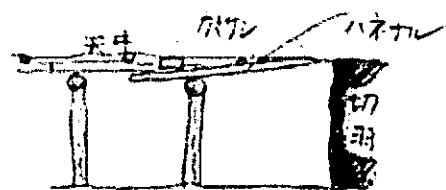
ハネツルベ (撥釣瓶)



第 35 図

柱の上に横木を渡し、その一端に石を、他端に釣瓶を取り付けて石の重みで釣瓶を撥ね上げ、水を汲むようにしたもの。

ハネナル



支柱

第 36 図

坑道掘進の切羽で露出天盤の小崩落を防ぐために、手前の枠の梁から、成木または鉄レールを2本差し出し、「カミサシ」で締めて、新たな枠入れまで作業場の天井を保持する。その2本の成木、またはレールを「ハネナル」という。後に「先受」という道具が現れる。

「サキウケ」の項参照。

バラ

昔の炭坑で働いていた土着性のない浮浪人を賤すんでいった言葉。炭坑の者は何かというと「バラス」(殺す)というので「バラス」が「バラ」になったともいわれている。昭和初年頃まで使われていた宇部地方の差別語。

ピーヤコウ (ピーヤ坑)

煉瓦または鉄筋コンクリートで円筒形の井筒をつくり、それを現地に据え付けて、中の土砂を取り除けつつ井筒を沈下させ、次々に井筒を積み重ねて沖積層を突破する。この工法で掘られた堅坑のことを「ピーヤ坑」という。この工法を一名、井筒式沈下法ともいう。

ビク



第37図

ヴィクリック ジョイントの略称。容易に着脱でき、少しの曲げに対し漏気強い特徴がある。戦後導入された。

ヒジョウ (非常)

宇部地区では「非常」といえば、異常出水事故のことを指した。海底炭田であったから大事故が出水と結びつく事が多かったのであろう。

ブ (歩)

採炭夫、掘進夫は共同作業の請負制で、全員で稼いでこれを各人に配分するシステムであった。その配分率を個人ごとに決めたものが歩といわれていた。

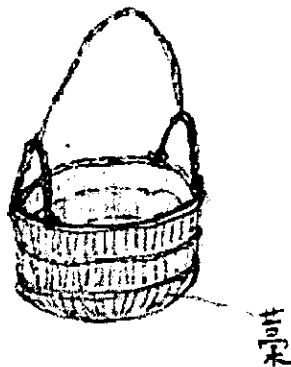
普通、先山が1.2歩、番子が0.8歩、長壁払の大責任(材セキ)が1.3歩であ

った。

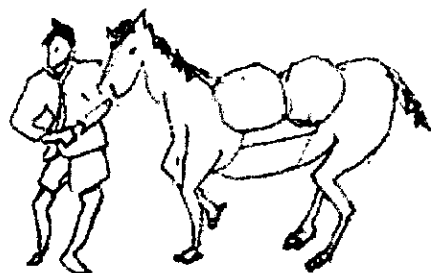
フクチ (歩口)

炭坑の経営形態が匿名組合といわれた初期の頃の出資額。

フゴ



第38図



第39図

わらで編んだ容器。昔は馬の背に2荷づつ乗せて石炭を運んだという。

フダバ (札場)

決められた採炭札を炭車に付けて坑外にあげ、坑外の監場(かんば=検炭係)でこの札を集め、小屋に保管した。この小屋のことを札場と呼んでいた。そこで働く人を札繰りと言った。

フリ (振り)

昔は石炭16貫、すなわち100斤を1振りといった。(注:1振りは60キロに当たる)

ホウコクタン (報国炭)

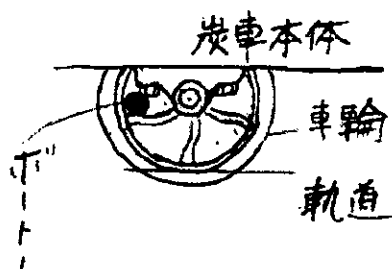
第二次大戦下において採炭現場や坑道に落ちている石炭を持てるだけ持って昇坑し、お国のために生産増強の一役を担った。筑豊では奉公炭といった。(山本作兵衛絵巻より)

ボウシン (棒心)

炭鉋の修繕方の作業は3~5人単位で行うことが多く、特に機械の設置、移動、

修理などは職能のある経験豊富な人が責任者となり細かい作業指示を出していた。この様な主任又は職場長にあたる人を「ボウシン」と呼んでいた。英語の bosun (水夫長) の訛り。

ボウトオ (ぼうとう)

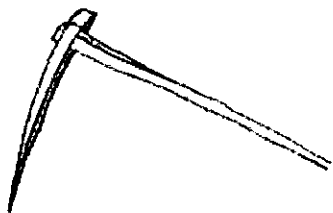


第 40 図

下り傾斜で炭車の車輪の回転を止めてスピードを落とすため、車輪に差し込む長さ 30cm、径 5cm くらいのも木や鉄の棒のこと。この作業を「ぼうとおを打つ」という。

ホリ

石炭採掘用ツルハシの 3 倍くらいの大きさで、先端が 5 ミリ巾ほどの扁平な形をしており、主として、堅い下盤を掘るのに使われた。



第 41 図

マーケット・バスケット

昭和 27 年 10 月日本炭鉱労働組合が 63 日にわたってストライキを実施したときの賃上げの指標。「買物籠」の意で食べるだけの賃金を獲得するという内容。

マウ (舞う)

採掘現場に大きな重圧がかかり、なんらの措置を施す暇もなく、天盤が崩落すること。「切羽が舞う」という。

マテ

火成岩の貫入により大嶺の無煙炭層が部分的にコークス化された部分。塊炭となり「天然コークス」とも呼ばれた。

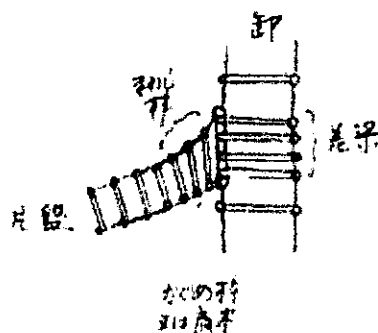
マルタン (丸炭)

戦後の経済復興の柱である石炭の増産のため行われた、労働者への特別配給物資。第 2 次大戦後占領軍総司令部の指令で、米・メリケン粉などの食料品の特別配給があり、すべて丸の中に炭の字の検印があったので、これらを「丸炭物資」といい、略して「まるたん」といった。

マワシワク (廻し杵)



第 42 図



第 43 図

肩木に次いで入れる杵で、正規の方向に戻すために漸次方向を振って入れる。

マンガク (万斛)

坑外で石炭を選別するために用いられた原始的な選炭装置。斜めになった格子の上部から石炭を滑らし、塊炭と粉炭を選別する。「まだ」ともいう。

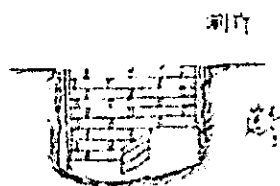


第 44 図

ミズナンバ (水南蛮)

水を汲み上げる専用の南蛮を「水なんば」という。一旦水位が下がると「水なんば」を二三残して、残りはすべて石炭巻上げに用いた。

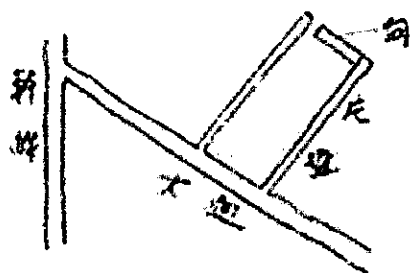
ムカデウムシ (百足蒸し)



第45図

昔、宇部地方の立坑開鑿時、沖積層の支保材として用いられた支保、籠枠の一つ。特に堅坑の坑壁から滴水とともに土砂が崩れる箇所には筵(むしろ)をあてがい、割竹で張り押さえる。筵の両端が突き出て「むかで」のように見えるので「むかでうむし」と呼んだ。

ムキ (むき)



第46図

坑道を樹木に例えると樹幹が幹線坑道、太い枝を大通し、そのまた枝を片盤という。その片盤に更に枝道のあるとき、これを「むき」といい、宇部炭田で使われた。

ムス (蒸す)

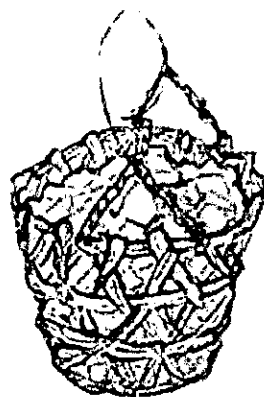
沖積層からの湧水を遮断防水すること。厚い松材の枠を用いて造船用の舟釘で組み立て、継ぎ目に「まきはだ」を埋め込み、その上をカスガイで止める方法で、沖積層の砂利水を完全に止める。宇部地方独特の施枠方法。堅坑の場合は六角蒸枠が用いられ、斜坑の場合は最近まで斜坑蒸枠が用いられた。

メクラ (盲)

送水や吸水のパイプ、或いは圧縮空気のパイプ端末や連結部に、鉄板や木板を差し込み、ボルト・ナットで締めて、通水

や圧気を止めるときに用いる鉄板・木板のことを「めくら」という。その作業を「めくらを打つ」という。

メゴ (目籠)



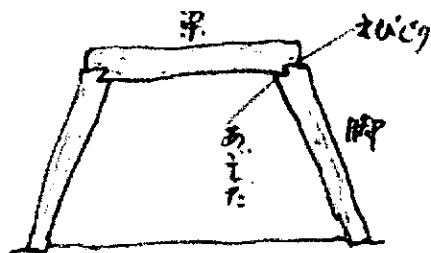
第47図

竹で編んで、編目が方2寸位の籠。石炭はこれに盛った。

モトゴヤ (本固屋)

明治初年頃まで、炭鉱の事務をとるところを「もと」と言い、炭坑組合の事務所を「もとごや」と呼んだ。「会所」(かいしょ)ともいった。(宇部郷土史話)。

モロワク (諸枠)



第48図

一般に三つ組み枠を総称していう。三枠、三留ともいわれる最も基本的な枠組である。

ヤケ (焦土)

やや青白色の砂岩で水に溶けやすく、3紀層と4紀層の間にあって新三紀層といわれている。ヤケは宇部地方独特の呼び名で、学名は細粒砂岩、坑内で白濁した湧水があると異常出水の前兆といわれていた。

ヨスケ (与助)

昭和30年頃まで、炭鉱、映画館、劇場などが匿名組合と呼ばれる経営形態の時代に、株券ともいうべき出資額の証明書

保安技術資料
炭鉱現場用語集

平成14年3月編集

財団法人 石炭エネルギーセンター
社団法人 資源・素材学会 石炭技術部門委員会
炭鉱保安機器委員会
北海道炭鉱技術会
九州炭礦技術連盟
